謎手本忠臣蔵

中

加藤廣



新潮文庫

新潮文庫

謎手本忠臣蔵

中　巻

加藤　廣著



新潮社

新潮文庫

謎手本忠臣蔵

中　巻

加藤　廣著



新潮社版

9328

中巻　目次

第六章　京山科へ　元禄十四年夏　7
第七章　細井広沢の苦渋　元禄十四年晩夏　59
第八章　大石東下り　元禄十四年冬　121
第九章　桂昌院昇叙　元禄十四年冬　181
第十章　大石の誓い　元禄十四年暮れ～十五年年初　227

謎手本忠臣蔵

中巻

第六章　京山科（やましな）へ　元禄（げんろく）十四年夏

1

四月十九日――。

大石内蔵助（くらのすけ）は、三の丸の拝領屋敷を明け渡し、尾崎村の「おせど」に仮寓（かぐう）した。

「おせど」は、お背戸。大戸（表ノ戸）の反対語で、裏口・裏門の意であろう。

赤穂（あこう）城とは熊見川を挟んだ対岸にあった。

家来の一人、瀬尾孫左衛門（せのおまござえもん）の世話で見つけた隠れ田舎屋である。

なお、この当時の内蔵助の家族構成は、

妻理久　三十三歳
長男松之丞　十四歳
長女くう　十二歳
次男吉千代　十一歳
次女るり　三歳
の五人である。

この他、四月初めに江戸からきて、内蔵助の愛顧を得た台所小役人の三村次郎左衛門（義士の一人、三十五歳、七石二人扶持）、下男、下女など十数人を伴った。

このため、五月に入ると、なにかと手狭になり、増築するまでの間、妻と長女、次女の三人は、一時、妻の実家（但馬国豊岡）に預けることにした。

内蔵助は、この尾崎村の寓居から城下の遠林寺（真言宗。浅野家の祈禱所。華嶽寺の南方、加里屋随鷗寺西隣にあった。明治十四年廃寺となり現存しない）を会所（事務所）として、その後一ヶ月以上、残務整理のために通った。

この遠林寺と居所との間――熊見川を挟んでの往復（約三キロ）――の身辺の護衛を務めたのは、天皇家の守護役である八瀬童子である。

関白・近衛基熙から内蔵助の身を案じて派遣を申し出たものであった。
東山天皇の内意を受けてのことであろう。
天皇は、浅野家が四十年前に京都御所再建に尽くしてくれた忠誠を忘れていなかった。

こたびの江戸城内の刃傷事件でも、浅野家の忠誠の過去が生きていた。この春、勅使として江戸に赴いた柳原資廉、高野保春、院使の清閑寺熙定が戻ってくると、天皇は、三人の、だれ一人として浅野長矩の助命嘆願をしなかったことを厳しく咎め、罰として御所への出入りを差し止めたのであった。

確かに、朝廷側がこの時、助命を願い出ていれば、綱吉には「天子さまへの非礼」を理由とする以上、浅野内匠頭の切腹も改易もできなかったろう。

事件は、ただの喧嘩両成敗で決着がついた筈である。それをしなかった。

そのせめてもの償いが、浪人となった大石内蔵助の身辺を守ることであった。

「大石は、そなたの血筋ではないのか」

と、天皇は、関白を諭されたかもしれない。

内蔵助の四代前の大石良信の妻は、関白の近衛前久の娘（志茂）。二人の血統が内蔵助である。

両家は遠い親族であった。

しかし、当時、朝廷は財政的に余裕がなく、抱えている八瀬童子の数は、天皇の護衛で手一杯であった。なによりも、関白本人が積極的でなかったと思われる。

関白は、自分の娘（熙子）を甲府宰相綱豊の正室に嫁がせていた。ということは、綱吉に一朝事があれば、自分の娘婿が将軍となり、自分はその外戚に納まることができる。

だから――。

内蔵助を狙う傷害事件は、ないよりあった方がいい、という点で、綱豊と利害が一致していたのである。

浅野内匠頭の刃傷を聞いた時、関白は、日記に他人事のように、こう記している。

元禄十四年三月十九日、丙午、快晴。（中略）或る者が伝えて言うには、さる十四日、関東では武家伝奏勅使と院使が江戸登城の朝、吉良侍従が浅野内匠頭と口論をして、内匠頭が吉良へ斬りつけたと、こういう話であった。珍事〳〵。

全くの傍観者の姿勢である。
そんな訳で、この度も、内蔵助の護衛のために派遣された忍びは、中途半端（はんぱ）な数――十人程度――にとどめられた。

一方、幕府の事務方である目付・代官衆は、引き渡された浅野家の財産目録の現物確認などで郡部を回り、結構、手間どった。
彼らが、引き継ぎのすべてを完了し、
「一点の批議すべきところなし」
の褒め言葉を残して、引率兵ともども赤穂を去るのは、五月十一日である。
この出立の日、内蔵助は、暇乞（いとまご）いのために目付の荒木十左衛門と榊原采女（さかきばらうねめ）を宿に訪ねている。
そして最後の最後の嘆願に出た。
「くどいようではござるが、我等が大学さまの身上が成り立つよう、くれぐれも、くれぐれも、お頼み申し上げまする」
涙を流さんばかりの平身低頭ぶり。
だが、決して本心ではない。

それ以外に望みはない――当方には、まったく〈恨みも邪念もない〉――という印象を、江戸幕府方の役人に植え付けるためであった。

一方の十左衛門も、したたかである。

感激屋を装って、こう答えている。

「我等、貴殿の願いの趣は、すでに御老中にお取り次ぎすることと決めてござる。帰った後で御老中にこのことを申し上げるということを家中の者によくよく申し渡し置くようにして下され」

老中に言上したところで、綱吉が独断で決めた処罰であるから、ひっくり返ることは絶対ありえない。それを重々承知で、おざなりの慰めを言ったに過ぎない。

狸と狐の化かし合いであった。

帰宅すると、内蔵助は、更にも一つ念をいれた。原惣右衛門と岡本次郎左衛門を呼び、御家再興を江戸の護持院隆光にお願いするよう依頼する手紙を、京都普門院に届けさせたのである。

隆光から桂昌院へ、そして将軍綱吉へ、お声を掛けていただける可能性があると見た。

なりふり構わぬ対幕工作である。

そんな内蔵助の身に、異変が起きたのは、この幕府方総引き上げの日（五月十一日）の深夜である。赤穂に兵はすでになく、幕府軍も去り、治安は真空状態だった。

内蔵助は、何ヶ月ぶりかで仕事から解放され、息子二人との団欒（だんらん）の時を持った。

明日十二日には、嗣子（ししし）松之丞と次男吉千代を京山科に建設中の隠居所に、工事の下見に行かせる予定で、この夜は、その別れの宴も兼ねていた。

内蔵助は、中年になっての遊びながら、酒も結構いける口である。この夜は、いつになく度を過ごし、息子二人に抱えられるようにして床についた。

幸いだったのは、狭い仮宅のため、子の松之丞、吉千代と同室だったことである。

丑夜（うし）八つ（午前二時）頃であった。

数匹の番犬のうなり声に続いて、

「曲者（くせもの）！」

の護衛の忍びの一声。

最初に、耳ざとく気付いたのは松之丞である。

若いのに、普段から早起きの父に付き合わされて、目覚めが早い。いち早く、熟睡

する父と弟を叩き起こし、自分は素早く愛刀を握った。

父から与えられていたのは、二尺二寸五分の「共国」。腰には、一尺一寸の脇差「広重」までぶち込んだ。

当時の佩刀の定寸は、二尺三寸～三寸五分である。それよりやや短いのは、松之丞の年齢を考慮したこともあるが、内蔵助が実戦用に片手打ちを教えていたからである。

実際、松之丞は、大女の母の血を受けて、父より四寸身軀長大（五尺七寸という）であったから、この愛刀を、苦もなく片手で扱うことができた。

次男吉千代は、まだ育ちざかりだが、それでも父内蔵助と背格好は同じくらいあった。

片手打ちというわけにはいかないかわりに、定寸最長の二尺三寸五分の刀を与えられていた。刀は無銘である。

ちなみに内蔵助本人の剣は「則長」。長さ二尺八寸の長刀である。小柄だが、腕っ節の強さに自信があったから長物を好んだ。

しかし、三人は、起きあがったものの、室内は真っ暗であった。

忍びの軍団は、日頃から夜間行動のため、夜目の利く鍛錬をしている。

こちらはそうはいかない。

部屋の中での応戦は不利――、一瞬、そう判断した松之丞は、

「お父上、庭へ」

咄嗟の機転で、二人を廊下に誘導すると、雨戸を蹴破った。

途端に、さっと薄い月明かりが差し込む。

（今だ）

とばかり三人は、ほぼ同時に庭に飛び降りた。

即座に、背中合わせに鼎状になって刀を構えると、親子は、そのままゆっくり弧を描いて巡り始めた。

父が嗣子松之丞に教え、松之丞が弟吉千代に伝えてきた闇討ちに対処する隊形である。

飛び出しても、すぐに元の鼎に戻る。

これによって、背後や横の敵を気にせず、前方の敵だけに集中できる。また三人が同じように敵と戦い、敵状を知ることができた。

夜眼のいい吉千代が、即座に、

「宵闇！」

と叫んだ。

月光下になにをいうのか――と、敵方は驚いたであろう。

実は、宵闇月（二十日月）に因んだ大石家だけの暗号で、敵は二十人という意味である。

こちらは、大石親子三人と、途中で加わった三村の四人。やや離れて待機する三村は、投げ礫の名手だが、二十人の敵に囲まれたまま、護衛の八瀬童子衆と離ればなれでは不利である。

この頃から内蔵助は、漸く酒気を脱し、冷静を取り戻していた。

敵の人数は判ったが、如何なる敵か、皆目知ることができない。それが不気味だった。

内蔵助は、一旦、裏戸の竹藪に難を避けて、様子を窺うことに決めた。

竹藪の端の物置には、赤穂を去るにあたって売り残した由緒ある槍や刀が置いてある。三村の得意とする投擲用の鉄菱の予備の袋も置かれていた。そこで戦えば、武器の取り替えや補充が可能になる。

だが、内蔵助の決断より、一瞬、相手の攻撃の方が早かった。

最初に、無言で斬りかかってきたのは、〈捨て駒〉と言われる下っ端だったろう。

三人の親子は、ぱっと鼎の隊形を解いた。
日頃の訓練が物を言った。
勢い余って、とんとんとよろける敵。
これを正面の吉千代が、難なく身をかわして、相手の刀を払う。と、松之丞が抜く手も見せず横一閃。相手の胸元あたりを、一撃のもとに切り捨てた。
「うっ」という低い声と共に相手が倒れる。
松之丞の生まれて初めての殺人剣となった。
これを合図に、廊下の奥の部屋の暗闇で敵と戦っていた八瀬童子十人が、どっと庭に飛び降りて来て、大石親子に合流した。

2

派遣された八瀬童子十人の総大将は、朽木鉄平といった。無言のうちに内蔵助の前に出て、敵襲の楯になろうとした。
「心配ご無用」
内蔵助は、にっこり笑って、息子二人を指さした。指された松之丞と吉千代は、淡

い月光の下、不敵な微笑を浮かべて、うなずきあう。
内蔵助が若い頃に学び、二人の息子に手を取って教え込んできた東軍流は、こうした「一対多数」の乱戦にうってつけの武術である。
それが、今まさに絶好の実地修練に入るのだ。
内蔵助は、敢えて松之丞に、地獄を体験させる積もりであった。

ちなみに、この東軍流の創始者は川崎鑰之助といい、越前の戦国大名・朝倉氏の用人の生まれである。武術として百年以上の歴史がある。
しかし、この流派の実力を最もよく証明したのは、鑰之助の四代後の川崎次郎太夫宗勝である。
宗勝は武者修行の旅に出て、一人で数十人を相手に戦って勝ち、一躍勇名をはせた。
内蔵助が学んだ奥村無我は、この宗勝の流れを汲む一人である。
なぜそんな「一対多数」剣法が可能だったのか。
それを解く鍵は、最初から相手の絶命を狙うことを企図せず、もっぱら、耳、指、腕、脚を切り、あるいは叩き潰して戦闘意欲を失わせることにあった。
当時流行の「柳生新陰流」「小野派一刀流」などの個人戦法から見れば邪道である。

しかし、これほど、この場にふさわしい戦術はなかったのである。

親子三人は、武者震いした。

特に松之丞。弟を父の護衛に残るように命じると、一人、果敢に敵中深く突入した。止める間もなかった。

見ると、松之丞は、内蔵助の教えを超え、いつの間にか、右手に共国、左手に広重を持って二刀流で闘っていた。

若い身のこなしは、蝶（ちょう）のように高く舞い、燕（つばめ）のように鋭く反転した。

囲んでいる黒装束の敵が、見る間に、三人、五人と、ばたばたうずくまっていく。皆、手首、鎖骨、膝（ひざ）を切られ、あるいは叩き割られるだけで、深手を負っているわけではない。

だから、松之丞の剣は、折れることも、刃こぼれ一つすることもなく、血あぶらで切れなくなることもない。

何人相手にしても戦闘能力がおちなかった。

対する敵は、僚友が、なまじ生きていて、うめき、七転八倒するため、放置しておくわけにいかない。無傷の戦力までも、負傷者に肩を貸して去るしかなかった。

それで、さらに敵戦力が低下した。
こうして一時、危機は去ったかに見えた。

「お見事でござるな」
松之丞の獅子奮迅の活躍に、朽木鉄平は、ほっと一息。ただただ感嘆の一語である。
「いやいや、貴殿らの擁護あったればこその愚息の働きでござる。改めてお礼申し上げる」
内蔵助は、鉄平に軽く会釈した。
そんな会話が、一瞬の油断を招いた。
四囲を巡る田舎家の黒塀の彼方から、ひゅっという鋭い風音と共に、十数本の矢が飛来したのである。
「父上！　御免」
いち早く気づいた松之丞が、さっと二人の間に割って入り、両刀で飛矢を立て続けにたたき落とした。
三村次郎左衛門は、月明かりを透かして、こちらは続けて礫を投げた。
礫が眉間に当たったらしく、もんどり打って、落下する数人の敵。

だが――、味方の注意が四囲の塀に向いている時、安全と思っていた背後の大石家寓居の壁のよろい張りの一角から、思いがけず、一本の矢が、すっと、音もなく放たれたのである。

「あっ」と、思った瞬間、内蔵助は、左の二の腕に、焼けるような痛みを感じた。

「いやいや、なんでもござらぬ」

刺さった矢を気丈に引き抜いた内蔵助だったが、痛みに妙な痺れが残った。

急に全身に震えが走る。

「如何なされた」

と、駆け寄った鉄平が、松明の火をかざして内蔵助の抜いた矢と鏃を見た。

一瞬のうちに顔色を変えた。

「大石殿、これは忍びの者の毒矢じゃ！　急ぎ傷口を切り開き、毒を吸い出さねば！」

そう叫ぶと、三人ほど配下を呼び、有無を言わせず内蔵助の身体を、ぎゅっと押さえ込んだ。

次に、もう一人屈強な部下を呼んで、両手で内蔵助の左手をしっかと握って固定し

た。

その上で、

「しからば御免！」

鉄平は、鏃の刺さった箇所を焼酎で洗った小刀で、ぐさっとそぎ取り、何度も口を付けて吸い込むと、ぺっぺっと血と肉片を吐き捨てた。

「かたじけない、造作を……」

（かけて済まぬ）と、言いたかったが、身体を走る痛みと痺れで舌がもつれた。

この応急手当の後、内蔵助は、自室に倒れるように運び込まれ臥所に横たわった。

最初に悪寒が襲った。やがて身体が火のように熱くなった。そして眼の裏が焼けそうに燃えると、意識が次第に薄れていった——。

3

内蔵助は、以後数日、生死の淵をさまよい続けた。この間の記憶がない。

意識を取り戻したのは、五月十六日明け方であった。

「どうしたのじゃ、これは」

と言って、じっと周囲を見回した。
だが、事態の把握ができなかった。
内蔵助の寝ている廻りには、実家から急遽呼び戻された妻理久以下娘二人と息子二人の合計五人。これを、さらに遠巻きにして八瀬童子たちが不安そうに囲んでいた。
「大石殿、お気がつかれましたか」
と、鉄平が前に出て、のぞき込む。
「そなたは確か朽木殿……と申されたな」
「さよう、覚えておられましたか。大石殿は毒矢にやられましてな。これ、この傷がそれで……」
内蔵助の腕を指してぐるぐる巻きに縛った二の腕を見せた。
「このため、高熱を出されて、これで丸四日半。一時はどうなることやら、と心配申したが、昨夜来、いいあんばいに、お熱が下がり始め、眠りもすこやかになり、一安心していたところでござる。これもひとえに、奥方さまの昼夜をわかたぬご看病ゆえでございまするぞ」
「そうか、奥にはそんなに世話になったか」
内蔵助は、理久を見て優しく言った。

「いえ、とんでもございませぬ。それより、お前さまの腕から毒を吸い出して下された朽木さま。秘伝の解毒薬を口移しで飲ませてくださった部下の方々には、心から感謝申し上げねばなりませぬぞえ」

「そうだったのか、それほどまでに。いやいや改めて朽木殿にお礼申さねば」

内蔵助は起きあがりかけて崩れた。腹に力が入らなかった。

理久と長女のくうが、あわてて支えて、再び床に戻した。

「この毒は潜伏期間が長く、毒気が全くなくなるまでは、当分気長に養生せねばなりませぬ。なによりも忍耐が肝要でござるぞ。大石殿」

「そうか、あい解った」

仕方なく、内蔵助は、再び横になる。

「で、朽木殿」

「なんでござろう」

「訊ねたいのは、拙者を狙った敵じゃ。どこの家中の者であろうな」

「我等と同じ忍びの者。使った弓矢や撒菱の形からみて、雑賀衆と見ましたが」

「というと、水戸家か」

「いえ、水戸の雑賀衆は、昨年末、水戸光圀さまがお亡くなりになった後、大挙して

甲府宰相の元に移られましてございます」
「綱豊殿のところへ？」
「はい」
「となると、すこしおかしいな」
「何故（なにゆえ）でございます」
「甲府宰相といえば、奥方は関白殿の娘さまではないか。その宰相が拙者を狙うのはなぜ？」
あり得ないと思った。
だが、鉄平は頭を振った。
「それとこの攻撃とは別でございましょう。まして関白さまの娘さまと言われても、甲府宰相さまの場合は、形だけの飾りもの。宰相は、夫人に指一本触れておられぬとの、とかくのお噂（うわさ）でござれば」
鉄平は、ここで、にやりと意味ありげに笑った。
笑いの意味は――。
関白の娘熙子は、有名な醜女（しこめ）であった。
三拝九拝して貰（もら）ってもらったのは、実は関白の方で、であれば、甲府宰相が次期将

軍を狙い、大石を殺めるなどして世を騒擾させ綱吉隠退を目論む、という筋書きででもあろうか……。

以後十日余り――、内蔵助は、もっぱら病床で指揮を執って残務に励んだ。

以下が、その記録である。

五月十七日　原惣右衛門と岡本次郎左衛門に、参勤交代の帰国途中の広島藩主浅野綱長と逆に江戸に向かう三次藩主浅野長澄に、御家再興の力添えを懇請

同時に、京都智積院隠居を通じて江戸の護持院隆光に、御家再興に力添えを依頼

五月二十日　遠林寺祐海を江戸に派遣し、護持院隆光に、御家再興の力添えを依頼

幕閣だけでなく、親族あるいは寺院筋まで――、ありとあらゆる伝手をたどって、御家再興を願い出ている。

この内蔵助の心底にあったものはなにか。

（御家再興など、できないことは重々承知）

ただ、自分が江戸に下り、瑤泉院に会う時までの身の安全が欲しかったのである。
（すべては、東下り。その上で決める。その前に、こんな理不尽な攻撃を喰らっては堪らぬわ）
そんな心境である。
残務は、この五月二十一日ですべて終わった。
だが、一旦は回復したものの、内蔵助は、二十日過ぎには、再び疼痛に悩まされ、全く起きあがれなくなった。以後丸々一ヶ月の間、内蔵助には活動の気配がない。
この前後の公式記録は以下のようになっている。

五月十一日　辰の刻目付赤穂を出発す
　　内蔵助左腕に疔腫出来る
同月二十一日　赤穂城残務御用本日にて相すむ
同月二十二日　内蔵助疔腫再発す

あくまで「悪性の疔」を患っていたとして隠し通されている。しかし、疔は、当時それほど長患いする病気ではない。一旦、治ったものが再発する病気でもない。

丸一ヶ月の空白を置いて、内蔵助が活動を再開するのは、以下のように六月下旬である。

六月二十四日　華嶽寺にて内匠頭の百カ日法要
同月二十五日　尾崎村八畳岩海岸から海路大坂へ
同月二十八日　山城国山科西山村（現京都市山科区西野山桜ノ馬場町）に移動

4

この間、内蔵助は、部下の瀬尾孫左衛門に命じて、引き続き赤穂の浜方（塩田業者）への貸付金の回収に当たらせている。

しかし、その返納は全く期待を裏切った。

貸付金総額五千四百七十両（内阿久里の持参金二千両を含む）に対する返済は、わずか六百九十両。藩札を六割にした報いとしても、半分程度は回収できなければならない。

九割近くを踏み倒されたのである。
支配権を失った武士が、如何にもろいか、いかに馬鹿にされていたか、を物語る一件である。
この結果に対して、内蔵助がどんな感慨を持ったかは記録に残っていない。しかし、悔しかったであろうことは想像がつく。
内蔵助は、この回収金を、全額阿久里への返済金とし、将来の東下りの際、持参することに決めた。本来なら、その半金以上は浅野家のもの。正規の相続人である大学に渡さねばならないところであるが、内蔵助には、そんな気はさらさらなかった。
その点でも、内蔵助の「御家再興」願望が本気でなかったことが読める。
もっとも、この六百九十両が、そのまま将来の「討入り費用」になる、とまでは、内蔵助は夢想だにしていない。
考えていたのは、
（これだけの回収では、お部屋さまになんとお詫びしてよいやら、面目次第もない）
そんな気持ちだけである。

さて、山科の隠居所である。

場所の斡旋は、親族（内蔵助の叔母の息子）の一人で、この辺りに田畑を所有していた前浅野家臣・進藤源四郎（物頭、四百石）が行った。

当時、他国者、浪人の取締が厳しかったから、源四郎が元受人となって、土地の庄屋、年寄、村役人に根回しして了承を得たものである。

敷地は六反（千八百坪＝五千九百余平米）。

さして広くはない。この土地に二、三百坪の住居を建設したと推測される。

所要資金は三百両といわれている。浅野家の立退料百七十両は辞退したが、これまで千五百石の高禄を得ていた蓄えで、建設資金には困らなかった。

赤穂を離れる際に、一部処分した先祖代々の武具、什器、書画骨董が、意外に高値がついたこともある。

これらは、当時、浪人が仕官の道を求める時の家系図同様、身の正統を立証する必携品として売り手市場であった。

山科の新居に落ち着き、ようやく傷も峠を越すと、内蔵助は努めて楽隠居を装った。

まず、名前を池田久右衛門と改め、近隣には大石内蔵助を死亡したように偽装した。

池田は母方の姓、久右衛門は父方の四代前の先祖良信の俗称である。良信の妻が関

白基熙の四代前の近衛前久の娘であったことを考えると、この改姓は意味深長である。実は、内蔵助は、秘かに天皇家に接近したかったのである。天皇家直属の家臣になりたかったのかもしれない。

天皇家の直臣なら「二君にまみえる」ことにはならない。

この期待を胸に秘めて、内蔵助こと久右衛門は、野菜畑造りに精を出したり、庭を整えて好きな牡丹を植えたりして日を過ごした。

しかし、天皇家には、内蔵助を採用するような意図も余裕もなかったから、この期待は内蔵助の一方的な片思いで終わることになる。

が、他の一般の仕官の口はいくらもかかってきた。竜野の脇坂家が百人扶持・客分として迎えたいとの申し入れをしてきたのをはじめとして、肥後・細川、土佐・山内、備前・池田、久留米・有馬からひっきりなしに仕官の話が来た。

しかし、どこまで本気だったかはわからない。

百人扶持というのも前家老の身分を考えると、人を馬鹿にした禄高である。

皆、「家老の大石がどう動くか」に興味津々だったから、仕官の打診は話半分、この後どう身を処す気かを知りたかっただけであろう。

親族の場合は、下手に内蔵助を野におけば、なにをされるかわからないという身柄

封じ。その他はあくまで興味本位であったろう。

内蔵助には、そんな相手の心中は言わずとも読めたから、いずれも丁重に断っている。

最後に近衛家からも打診があった。が、これも断った。今さら天皇家の又者（家来の家来）にはなりたくなかったのである。

5

そうこうしているうちに、江戸急進派が、再度攻勢をかけてきた。

今回は飛脚による手紙攻勢である。

もちろん、大石も、左腕こそ不自由だったが、右腕に筆を持って盛んに応戦した。

この二人の手紙の往復は、『堀部武庸筆記』に残るだけで、以後、堀部の発信が二十通、堀部ら宛ての内蔵助の手紙は二十七通の多くに達している。

最初の発信は、もちろん江戸側である。

日付　五月十九日
発信人　江戸三人衆（奥田兵左衛門＝孫太夫＝、堀部安兵衛、高田郡兵衛）
宛名人　赤穂衆（大石内蔵助、奥野将監、吉田忠左衛門、河村伝兵衛、進藤源四郎、原惣右衛門、小山源五右衛門）
内容　吉良の動向報告
泉岳寺における法事と石塔建立報告
六月二十四日の泉岳寺における百カ日法要の予定と赤穂衆への出席依頼
法事の際の宿舎の問い合わせ
二、三日なれば私どもの所にお泊まりくだされ。長期なれば借家を斡旋させていただく。ともかく一日も早く、お出下さることをお願い申し上げます云々。

文意明瞭であり、言葉使いも丁寧で、礼に欠くところはなかった。
ところが赤穂からは、なんの返事もしなかった。
内蔵助が引っ越し最中で、手紙が一時宙に浮いていたこともある。が、実際は、襲撃騒動で、それどころではなかったのである。

しかし、事の真相を知らせるわけにはいかない。また下手に内蔵助が病気だといって、江戸から見舞いにでも飛んでこられたら、その傷が疔でないことが露見してしまう。そうなったら、即、江戸衆の暴発につながるだろう。

ということで握りつぶしたのである。

内蔵助から何の音沙汰もないので、堀部は再度手紙攻勢をかけてきた。

以下がその第二弾である。

日付　六月十九日

発信人　江戸三人衆（同前）

宛名人　大石内蔵助（単独）

内容　先月十九日、町飛脚に、伏見大塚屋小右衛門宛ての手紙を託し、確かに手紙を届ける旨を確認しております。ところがご返事がない。泉岳寺での百カ日法要も迫っており、その出席の可否を早急に知りたい。一体どうなされたのか、心許なく思っております。

前回申し上げたように御宿の件は、最近なにかと心許ないので（こちらは

旅行者の調べがうるさいという意味か）是非拙者らにお任せ願います。ご到着の日にちを、お知らせ下されば（期限もぎりぎりですので）我等、品川までお迎えに出てこちらの事情をお話ししますので、お含み下さい。ともかく一日も早いお越しをお願い申し上げます。

これも前回同様に礼を尽くした文面である。

しかし、堀部は、大石だけでは心許ないと思ったのであろう。今回は大石の叔父小山源五右衛門にも手紙を書いている。

こちらは、もっと堀部の本音が出ている。

堀部と内蔵助の両者の葛藤が、以後、この物語の重要な展開要素となるので、この手紙は原文にそって詳細に記述しておく。

一筆啓上申し上げます。酷暑の折、御一家さまには如何お過ごしでしょうか。こちらは無事に過ごしております。

さて先月十九日、貴台を含む赤穂の方々連署でお手紙を差し上げました。

しかし、状箱（飛脚の手紙箱）の上書きを内蔵助殿御一名として伏見大塚屋小右

衛門に頼んだところ、内蔵助殿御事、先月中は赤穂に御逗留だった由、近頃山科に引っ越しされたとのことで、この書状は封印のまま届けた、と、小右衛門から報告を受けました。

そこで貴殿へも格紙（宛名を個人とする書状）が、内蔵助殿から遅く届くと思います。是非ご覧頂いて、ご返事をお待ち申し上げます。

どなたさまでも、御決意の節は、できるだけ早く御一報下さるようお願いします。御到着の折の御宿の件は、我等十分その積もりでおりますので、ご遠慮なく申し出てください。

（中略）

こちらとしては、なにを申し上げても、そちらから下向の音信がないため、一日一日不愉快な日を送っております。万々が一、ご下向を延引されるならば、拙者、そちらに参上して、こちらの様子などお話しして、是非御決意〈思召し立て〉されますようにと申し上げたいと存じます。

内蔵助には、返事のないことを「心許なく」とやんわりといい、こちら源五右衛門には「一日一日不愉快」とはっきり使い分けている。

そして一日も早く「思召し立て」を、と叫んでいる。思召し立てとは、復讐の決意表明ということであろう。

堀部も中々気を遣っている。

次に、（同じ手紙の後段で）この際復讐の決意（思召し立て）が何故必要かを、瑤泉院がらみの江戸の衆の口ぶりから、暗に言及している箇所に続く。ここは、以後の二人の対立の核心部分に当たるので、現代文に、できるだけ原文に使われた用語を挿入し、現実感を浮き上がらせてみたい。

六月二十四日執行の百カ日御法要の用件で瑤泉院殿用人落合与左衛門（三次浅野家から阿久里についてきた家士）が泉岳寺へおもむき、そこで江戸家老安井彦右衛門と出会い、二人が用談。この二人が寺を出た後、私（堀部）ら三人で泉岳寺に参詣しました。

その際、寺僧から聞いたことですが、瑤泉院さまお付の落合さまは、瑤泉院さまのお言葉として、次のようなことを申されたとのことです。

「百カ日の法要で、たとえ亡き殿に、千回、万回追善の読経をされようとも、すこ

しもお喜びなさるまい（仮令千部読経、万部読経おこなわれようとも殿の御無念の程晴れようか。その様な追善を殿は喜ばれようもない）……」

さらに、

「わが部下は甲斐性なしばかりよ、と亡き殿は悔しがっておられるだろう」

とのこと。

注意しなくてはいけないのは、これは「間接話法」のまた「間接話法」であること。

と――瑤泉院は落合様に話された。

と――落合さまは寺僧に話された。

と――堀部は寺僧から聞いた。

つまり「殿が悔しがっておられるだろう」と瑤泉院が言われたという話。これを落合なる者が聞いて喋った。それを寺僧が聞き、それを堀部が又聞きした。

話は「又聞き」の「又聞き」であって、誰も瑤泉院に「主君がなにを悔しがったのか」の核心について、直接訊ねた者はいないのである。

ここが江戸衆の弱点――泣き所であった。

しかし内蔵助は、この弱点を指摘することはしなかった。すれば、彼らは瑶泉院に強引に談じ込み、院を困らせることは目に見えていた。

（瑶泉院さまは、内蔵助が東下りして、拙者と会う時、初めてご主君のご本心――ご無念の秘密――を明かされるのだ。それまでは誰にも語ることはしまい）

それは、瑶泉院の手紙の「隠し文字」を見て以来の、内蔵助の確信であった。

だから、以後の内蔵助の手紙でも、堀部への反撃は、終始、「疔患い」と「大学さまの復権」の二点だけである。

それ以上には一切触れない。

以下が、この堀部らの六月十九日の手紙に対する内蔵助の返信（現代文）である。

本音は、すべて隠されている。

去月（六月）十九日の貴殿の手紙拝見致しました。皆様、ご健勝とのこと、結構に存じます。

赤穂の御用は五月二十二日をもって終わりましたが、拙者は、腫れ物患いが長引き、ようやく去月（六月）二十五日に赤穂を出帆し、最近山科西山村へ到着しまし

た。貴殿の五月十九日の手紙も、ここで受け取りましたことを大塚屋小右衛門方に連絡しました。

大学さまについて、いまだ幕府からご沙汰がないこと、冷光院さま（内匠頭）百カ日の御法事が済んだこと、また拙者下向の節は品川までお出迎え戴けるとのこと、皆様のお手紙にてすべて存じあげております。

しかし、ご存じのとおり、拙者左の腕に疔腫ができ、気分最悪の状況が続きました。漸く快気に向かっておりますが、今もって、腕の屈伸がよくできませぬ。

京医山本如哲に傷の治療を、そして寺井玄渓に内服薬を頂戴し、両医師とも平癒は請け合っておられるのですが、早急な回復は無理とのことです。

このような次第ゆえ、早速の東下は難しく、残念に思います。

そこで、まず原惣右衛門を差し向けます。本人は今、大坂におります。詳しくは惣右衛門とお話しされますようにお願い申し上げます。

七月三日

恐惶謹言

大石内蔵助

宛名（江戸三人衆）

内蔵助は、瑤泉院が亡君の百カ日法要を前にして、亡君が悔しがるだろうとか、なにもできない部下を甲斐性なしと嘆くであろうと話されたことには一切言及を避け、また反論もしていない。

意識して避けている風がある。

また、この段階でも左腕の屈伸ができないということは、自慢の長尺刀を両手で振れないことを意味する。

護衛に誰を連れていくかにもよるが、自力で刀を振ることができず、身を守れないでは、武士として恥ずかしい。

東下りに自信がなかったのである。それが江戸衆に言えない内蔵助の悩みであった。

6

次も、内蔵助の七月十三日付の江戸三人衆への別の手紙である。

これは堀部が内蔵助の叔父小山源五右衛門に出した前掲の「本音の手紙」（赤穂衆は、自分の手紙に返事も寄越さない、不愉快である。早期に決意をとの督促文）を読んで、その上

で書いている点が、前の手紙と異なる。

ここでは堀部の本音に対し、元家老として、たしなめる箇所が、随所にでている。

しかし、今後の自分の行動については、なお相変わらず煮え切らない態度のままである。

（序文省略）

安兵衛殿から源五右衛門方への手紙を拝見しました。お手紙の文言を読むと、かねて、こちらで赤穂の者に申されたことを、貴殿は、勘違いしているのではないかと思います。

赤穂での面談でも申したとおり、この上は、大学さまの身が立つ〈御安否〉かどうか、その一念を相談いたすべき覚悟でいます。そのいなやも決まらぬうちは、誰が、どのような決意〈存念〉を持とうと、まずは大学さまの御為（おんため）よろしいように、を真っ先に考えるべきで、我意を申し立てるべきではありません。

その点では赤穂の面々は一致しております。

この上は、たとえ不本意ではあっても、大学さまの御為、御首尾第一と心がけ、よくよく心得ていて欲しいと思います。

（そんなわけで）こちらにこられても、話すことは、他には、なにもありません。

また（逆に）赤穂から大挙して江戸に参上することは、大学さまの（復帰の評定の）御為にもなりません。かえって害になるだろうと、何度もこちらで相談し、大勢で参上することはやめて、拙者と（原）惣右衛門と、もう一人だけを連れて（ごく少人数で）参ることになるでしょう。

その節は、泉岳寺に参詣し、お目付役方には、ご挨拶を兼ねて、赤穂でお願いしたことを御老中方に御披露下さったかどうかを、お訊ねしたいと思います。

お顔のきく筋があれば、是非お手配のほどを願います。それがあれば東下を決めます。

しかし、拙者が江戸で（うろうろ）長逗留することは大学さまの（御処遇決定の）ためには、よろしくないと思います。

また、（一度行ったら）以後は、どんな理由があれ、そちらに参ることは、大学さまの御首尾が（一層）難しくなる恐れがあり、もっての外のことと、赤穂の者たちと話しております。

（中略）

それに、前回申し上げたように、拙者腫れ物不快にて、左の手が屈伸できません。

こちらで内外の療治（皮膚治療と内服薬療法）を繰り返しておりますが、未だ治癒のほどはわかりません〈計りがたく〉。東下は延引の他ありません。

（中略）

大学さま、首尾よろしく身を立てられれば御本望至極でございます。その上は、（我等）出家沙門（僧）の身となるとも（いといません）、それも亡君さま、大学さまへの忠義の極みと、この頃はひたすら、そのように考えております。

（下略）

恐惶謹言

七月十三日　　大石内蔵助

江戸三人衆

七月三日、十三日に加え、内蔵助は、同月二十二日にも、以下の手紙を江戸三人衆に与えている。

最初の攻撃は江戸側だが、内蔵助の筆の応戦はそれをはるかに上回っていた。

もっとも、文面内容は前二回と変わらず、大学の身の立つまでは、なに一つしては

なりませぬ、を繰り返し、暴発に釘を刺している。

この手紙での注目は次の一点にある。

上野介も米沢に参るそうです。子息左兵衛（義周）は勤務につくそうだと、風の便りで知りました。さようなことにもなろうかと、この辺のところは、よく知っております。

これは言ってはならない、書くべきではなかったことである。

上野介が、息子が藩主をしている米沢に帰ってしまうことも、息子（実際は孫だが）が出仕することも知っていると、淡々と陳べるだけ。

全く他人事のような書き方である。

この件に、江戸衆三人は激高した。

「大石にもあきれた。もう赤穂の連中とは一緒にやっていけぬ」

と、高田と奥田の二人は息巻いた。

これをかろうじて押しとどめたのが堀部であったろう。今年四月に赤穂入りした時、内蔵助に説得され、以後、単独行動を慎み、「臥薪嘗胆」を血盟で誓った手前もある。

それに、まさか小山源五右衛門に書いた手紙を内蔵助に読まれるとは思ってもみなかったのである。

（参ったな）

と、堀部は思ったに違いない。

仕方なく、内蔵助に対する返事を一人で書いた。

次の堀部の八月八日の手紙に、他の二人の署名がないのは、明らかに、この二人にそっぽを向かれたためであろう。

それだけに、この手紙では、これまでの居丈高な調子が、一転して低姿勢に、そして内蔵助にかなり忠実になっている部分がある。

それともう一つ。全体に、文体が格調高い。それだけ難しい言葉が多い。

これは、堀部が他の二人より、知的教養が高いことを意味するのだろう。

（前段略）

赤穂でお聞きした趣旨〈趣（おもむき）〉と、こちら（に帰ってから）の我々の気持ち〈存念〉と違うように思し召（おぼめ）しの由（よし）、承りました。

その辺（あたり）は、最初から考えに違うところがあったため〈たがひ御座候故〉ですから、

相違が――後から――生じたように思し召されたのではないかと、今更ですが愚考する次第です。

我々は、最初から怒りを上野介に向けるより他はなかったのです。

ところが、先般も申したとおり、江戸詰の上役たちは、一向にそのような怒りの様子もなく不愉快千万、情けない思いでおりました。

そこで、三人だけで申し合わせて、この上は是非もないから御城を枕に（死のうと）、重ねて最後の決断を申し合わせるため、そちらに参上しようと話し合った次第です。

右の通りですので、兵左衛門とは三度意見を交換し、郡兵衛とは二度相談の上、ともかく江戸では話のらちがあかないので、そちらに行って皆様と会って、本音の気持ちを語り合いたいものと思い、四月四日昼過ぎから急遽まかり越した次第です。

ところが赤穂領近くに入って、そちらのご意向を聞き、急ぎ参上。御城を明け渡したお嘆きの気持ちも、ひとえに亡君への御奉公のためと推察いたしました。

あるいは他の事も考えている。御城は引き渡しても、それだけですべてを決着させてしまう積もりはない、とのお気持ちを、再三お聞かせ戴きました。

（貴殿の）御心底は、兎に角、亡君のお怒りをなんとか鎮めたいとのお気持ちにあ

ると拝察いたしておる時〈御亡君の御憤被散度との御所存と計察罷在候折節〉、偶々原殿が我々の宿舎に来られて申されるには、間もなく貴殿が出府ができるとのこと、お聞きいたしました。

ここまでは、堀部は、内蔵助に頭を下げっぱなしである。しかし、そうそう頭を下げてばかりもいられないと思ったのであろうか。

堀部が、ここで考えついたのは、今で言う《世論》という援軍であった。

ぬらりくらりとかわす内蔵助の意見を、世論を押し立てて中央突破する試みをした。

以下が、まずその世論の総論部分である。

さて、――こちらに御出いただければ――私共の考えの通りで相違ないとお考えくださると思います〈下着已後益様子を考見申候所〉。こちらの（他藩の）上層武士、下級武士、また町方等の世論・主張を申し上げますと、その悉くが、我々赤穂浪士は、間違いなく上野の所へ押し込むだろう、という大合唱でございます。やはり我々江戸組の考えは、世上の意見にも叶うものであったか、と思うにつけても、いよいよご決意のほど、お立てなされますようにとお願いいたします。追って世論の

詳細は飛札にて申し上げます。

この唱（世論）を背景に、次に堀部は、個別書きで内蔵助に反撃を試みている。

一　上野が米沢に引っ込み、左兵衛（義周）が勤務に就くように聞き及んだとのこと。左兵衛がことはありえますが、上野の米沢行きは嘘でございます。六月上旬、心やすい方が見舞いに行った所、隠れて〈内証〉でも行かれることはない。行かれる時は、ご沙汰があるはずとのことでした。（むしろ）六十歳を過ぎて、上野の余命の方が気になります。

一　大学さまの御安否のことは、こちらでもあれこれ取り沙汰されております。しかしながら、日本に天竺（インドの古称）を添え下されようとも、上野が生きながらえること御見逃しになられてはなりませぬ。決して許してはならぬことと存じます。

「日本に天竺を添え下されようとも、上野が生きながらえること御見逃しになられて

はなりませぬ」というのは、当時としても相当過激な言い回しであろう。三人が、内蔵助の手紙に、かなり頭に来ていたことがこれで解る。

ところが、堀部の手紙は、最後にくると、また少し反省の色が出ている。以下が、その部分である。

赤穂で申し上げたように、以後は、すべて大石さまの御命令に従い、その御意向も承る覚悟でございますので、さよう御心得なさってくださいませ。

郡兵衛・兵左衛門も、私同様の覚悟です。何年たっても、最後は亡君のお憤りの気持ちにそって考えるべきが家臣であり、そうでなくては武士の道もすたれましょう。

武道の分際については、我等は心得ている積もりです。すべては亡君の末代までのご名誉にあり、この他に私共の気持ちはございませぬ。

源五右衛門殿へは別紙をもって右の趣の御意を得る積もりですが（まだです）。

問題はないと思いますが、その点、お含みおき下さい。

八月八日　　恐惶謹言（きょうこうきんげん）
大石内蔵助様　　堀部安兵衛

7

内蔵助が、この堀部の手紙を入手したのは、八月中旬である。堀部の揺れ動く気持ちのままに、一喜一憂しながら読んだ。

途中、決起を促されて、一時困惑したが、読み進んで、最後に、こちらの下知に従うという堀部の結論を知って、やれやれと思った。

（今、江戸衆に暴発されては、すべてが無に帰する）

第一、主君の恨みの内容が解らない。

解らないままに立ったのでは、吉良の素っ首を取ったとしても正義を立証することができない。

ただの〈私憤による復讐（ふくしゅう）〉と誤解され、下手すれば老人虐（いじ）めの暗殺団にされてしま

うだろう。

第二に、江戸衆だけでは失敗の可能性が高い。上下の団結もないというではないか。それでは決起は幕府に筒抜けになろう。そんな失敗は物笑いになるだけである。

第三に、江戸城下、将軍のお膝元での暗殺実行行為は、以後、幕府を敵とすることとなり、これまでの折角の努力が水泡に帰する。

（どうしてそんなことが解らないのか）

と思う。

殊に、江戸からの手紙では、一向に動向が摑めない片岡源五右衛門のことがひどく気になった。

だが、内蔵助は、自分の身も情けなかった。

七月後半になっても左腕が思うように動かせなかった。どうやら腕の筋を痛めてしまったらしい。これでは、自慢の長尺刀を諦めねばならなくなる。

それに関白からは、

「長途の旅の援護はできない」

旨の意向が伝わってきた。

八瀬童子は、前回の夜戦で二人が死亡、四人が重傷を負ったという。戦力に益々余力が乏しくなったというのである。

しかし、断る理由はそれだけではなかろう。

万一、東下の途中で襲撃を受け、内蔵助の護衛が朝廷からの差し回しであることが発覚したら、とんだとばっちりが来る。

それが嫌なのが、話し合いの中で読めた。

内蔵助は、八瀬童子の援護を諦めていた。

嗣子松之丞も期待できなかった。

夜戦でかすり傷を受けた。たいしたことはないと思って油断していたところから化膿して、目下、手当を受けている。

こちらは本当の「疔患い」である。

（どうしたものか）

堀部の手紙を読み終わると、思案の末、一度、原惣右衛門に相談してみようと思った。

例の第二の早駕籠で刃傷事件を知らせてきた矍鑠たる老人である。

当時、大坂の弟の所に寓居していた。

当初、事件に対する姿勢としては、堀部らの復讐早期実行に賛成する血気の多い方だった。

だが、内蔵助の側にいる間に、内蔵助の苦衷を理解するようになり、内蔵助が襲撃を受けてからは、一層内蔵助に接近し、すべてを代行して、万事にそつがない。

山科に来る早々、惣右衛門は、

「どうなされた。顔色が優れぬようじゃが。やはり傷の回復が、はかばかしくござらぬのか」

と慰めてくれた。

「中々にな、己れが歯がゆうてかなわぬわ」

内蔵助は、左腕を振ってみせた。わずか三月足らずで、左腕は手首まで細っている。

「まあ、あわてることはござらぬ。急いては事を仕損じると申すでな」

「そうはいうても、この有様。江戸衆には脅されっぱなしじゃで。ご覧下され」

と、堀部の手紙を披露した。

惣右衛門は近眼である。熟読に時間はかかったが、理解力は確かだった。

「一番の心配は、大学さまでも吉良の余命でもない。ここに名前の出てこない片岡の暴走じゃな」

とずばり言い当てた。

「それよ」

「で、ござろう。殿は、あの男を猫っ可愛がりしすぎたでな。先祖が源氏という触れ込みに、殿はぞっこんだった。江戸では、お側で見ていて不愉快極まりなかったですな」

確かに、過去、源五右衛門の加増だけが突出し、大野九郎兵衛が、目を白黒させていたのを内蔵助は思い出した。

「しかし、片岡が源氏とは知らなんだな。源氏蛍ならよく存じておるがな」

と、内蔵助は皮肉った。

そう言われれば、殿の遺言とやらも、片岡宛に託されていたことを改めて思い直した。

「全くでござるよ。殿もよくない」

そんな亡君のためにこうまで苦労させられている。そんな気持ちを内蔵助は慌てて伏せた。

二人は屈託なく笑った。
内蔵助にとっては何十日ぶりの笑いであったか。
ちなみに、以下が源五右衛門の加増状況である。
成年時　小姓頭として知行百石を継承
十九歳　二百石
二十四歳　三百石
三十二歳　三百五十石

「ところで……」
と、惣右衛門は真顔に戻って、顔を近づけた。
「なにかな？」
「この隠居所、防備の方は如何（いかが）なっていましょうな。どこにもそれらしい男どもの姿が見あたらぬが」
「その後はなにもござらぬで、このままでござる。まあ、息子二人と次郎左以外は……」
「その松之丞殿も疔で病んでいると聞いた。となると全くの無防備でござるな」

「確かにそう言われれば……」
「しかし、なぜ、ぱったり襲撃がなくなったのかの。これも考えてみるとおかしゅうはござらぬかな。大石殿」
襲撃があればあったで不安、なければないで不安。
そんな不安をかき立てる惣右衛門の言葉が、内蔵助の心をいらだたせた。
（確かにそう言われれば……奇妙じゃな）と。

第七章　細井広沢の苦渋　元禄十四年晩夏

1

柳沢保明は、堀田将監を通じて、大石内蔵助の動向をすべて把握していた。

いや、把握していると思っていた。

大石が「疔を患っている」ことも耳にしていた。ところが――。

「拙者、大石めに、まんまと誑かされておりました……、申し訳ござらぬ」

と、大きな身体を丸めるようにして将監に詫びを入れられて、初めて雑賀衆による大石襲撃の事実を知った。

七月二十九日のことである。

この日は、先月（六月）二十五日に亡くなった妻・定子の母の「果の日（忌み明け）」であった。亡くなった日からの一ヶ月余を、「忌中」ということで私的活動を一切停止していたため、この忌み明けに、どっと面会と報告が殺到したのである。

その最初の飛び込みの面会者が将監であった。

事件の時、
大石は左腕に毒矢を受けた。
犯人は雑賀衆の忍者。
襲撃指令は甲府宰相から出ていたらしい等々。

そんな将監の報告を聞いた保明の衝撃は大きかった。

「何だと？　いつのことだ、それは」

いつになく険しい調子で訊ねた。

「皐月（五月）十一日、幕府関係者とその引率した軍勢が一斉引き上げした、その夜のことでございました」

と、将監は小さくなって答えた。
襲撃組は、およそ二十名。これを大石は家族総出で、かろうじて退散させたという。
「子息の松之丞と申すものが、刀の大層な使い手だそうで」
「幾つになる」
「十四歳と聞きまする」
「ほう、まだ元服前か」
「御意」
「身体が大きいか」
「五尺六寸以上はあるとのことで」
そんな応答の中で、保明は考えた。
「その若さで、多数の忍びを相手に渡り合えるとは、よほどの剣技を学んだに相違ない。父親仕込みかの」
「なんでも東軍流とか申す田舎流儀と聞き及びますが」
「東軍流か、おぼえておこう。だが、相手が二十人では、一人で闘って勝てるわけがあるまい。他に助っ人はいなかったのか」
「大石家の女どもの話では、一切ないと申します。しかし、近隣の農夫らの噂では、

何者か、数人の者が大石を援護した模様との話もあり、さらに追って諜報を集めておりますれば、もうしばらくのご猶予を」

「よかろう。しかし、此度は、いかにも後手後手にまわったようじゃな」

「面目次第もありませぬ」

「そちが気付いたのはいつ頃じゃな？」

「正直申せば文月（七月）に入ってからでございます。あまりにも大石の回復が遅いので、不思議に思い、よくよく調べさせてわかり申した。なにしろ、この種の病は、神君さまの癰のご発病以来百十数年。特効薬が研究し尽くされて、今では、癰は、これほど長患いする病ではござらぬゆえ」

前述したように、家康が秀吉と戦った天正十二年（一五八四）三月の小牧・長久手の合戦。

この時、家康は背中に悪性の癰を患って動けなくなっていた。やむなく戦場を離脱し、岡崎に戻って、摂津・笠森稲荷の特効薬を塗布したことで急回復。かろうじて危機を脱した。

当時は秘中の秘の事件であった。

爾来、侍医、薬師の総力をあげての癰・疔治療法の考究が進み、この種の病は、初期療治で、よほどのヘマでもしないかぎり、月を二つも越す病ではなくなっている。

「確かにそなたの言うとおりじゃ。余の息子たちも、幼い頃、面疔を患ったが、特注の軟膏で、いずれも大事に到らなかった。そう考えると、やはり毒矢しかないか。で、大石は、その事を秘していたのだな」

「御意。恐らく内外の影響を恐れてのことでござろう。特に江戸の赤穂浪人どもは煩そうにござれば――、うっかり知らせれば、この春、殿が危惧されたように、幕府の暗殺指令による襲撃と誤解したかもしれませぬ」

「さもあろう。しかし、その後はどうじゃ。雑賀の動きは？」

「それが、不思議なことに、全くございませぬ。皐月の、この時、一度だけでござる」

「そうか、それはよかった。今日、唯一の朗報じゃな」

「唯一の朗報とは？」

「いやなに、こちらのことじゃが――」

と、保明は言葉を濁した。

これには、――将監に言えない――陰の理由があった。

〈桂昌院が、綱吉の後継者に甲府宰相を、と神仏に願っている。この旨を甲府宰相に伝えてたもれ――〉

この衝撃的な告白と依頼を、院の口から聞いたのが、御訪問を受けた四月二十五日。微妙な問題だけに、直接「お噂話」ということで、甲府宰相の用人・間部詮房に耳打ちできたのが、五月十五日の登城日であった。

（この話を、もう少し早く、翌月一日あるいは五日の端午の節会にでも詮房に伝えていたら……）

あるいは、大石は襲撃を受けなかったかもしれない――、そう思うと、大石には少し気の毒なことをしたな、と思う。

だが、同時に、その後の襲撃のないことで、自分の「耳打ちの効果」を、居ながらにして確認できた。これは大収穫である。

（やれやれ、これで、甲府宰相殿とは、しばらく休戦できたようだ。この間に、懸案の〈桂一計画〉を進めねばならぬ。さて、どんな妙案を弁庵先生が持っておられるやら――）

その細井広沢が、次の面会予定者として、すでに別室で待機している。
保明は立ち上がりかけた。
が、ふと、将監が赤穂に配した忍びのことを思い出して、また座り直した。
「も一つだけ訊ねる。例の忍びの男女のことだが、その後、どうしている？」
「はい。男は、赤穂塩の秘密を盗み出して後、秘かに逐電させましてござる。目下、盗み取った製法書の吟味に打ち込んでおります。赤穂塩がなぜ美味かも、これで判明致しましょう。この御説明は如何しましょうか？」
「仔細は後でいい。では、尼寺に置いた女の方はどうした？」
「寺を出て伏見の撞木町という遊里で遊女にさせました。ここで遊び好きの大石の出を待つ計画でござる」
「ほう、遊女か。で、名はなんという」
「浮橋と申します。なんでも源氏物語に出てくる女の名とか聞きましたが」
「そうだ。源氏物語の最後の巻名だ。で、遊女の格はなんだ？」
「〈天神〉でござる」
「なぜ〈太夫〉にせぬ。浮橋の名が泣くぞ」
「殿は、よくそこまで町方の事をご存じで……」

将監は感嘆しきりだ。

が、保明は、苦笑いしながら答えた。

「別に不思議はない。公務で読む公事沙汰（裁判事件）の仕置伺い（判決案）には、頻々と出てくる遊里の女の位じゃ。天神や太夫の色恋沙汰に絡んだ犯罪が多いのでな。だが残念なことに、この二つの格の違い、この眼で確かめたことはないが……」

「なるほど。ではいずれ太夫の実地見学を――、ということにいたし、殿の答えの方に参ります。つまりは、太夫では遊興費が高くつき、浪人の身となった大石が近づけぬことを恐れた故でござる。もっとも、この浮橋は、美貌、教養、品格とも、太夫に優るとも劣りませぬが……」

「そうか、一度是非拝んでみたいものだが。しかし、天神ともなると、その辺りの遊女屋には、ざらにいよう。果たして首尾良く大石と巡り会わせられるかどうか――」

「それは、お任せあれ。あの男、生来の好色なれば、いずれ必ず撞木町に現れましょう。そこで一番の〈床上手の女〉と評判をとっておれば、言わずとも大石の方から寄って参りましょう。なにしろ、臥所で男をたらし込む秘術は、黒鍬組女忍びの秘伝中の秘伝でござれば」

将監は、自信ありげに、にやりと笑ってみせた。

「そうか、その話、もそっと聞きたいところだが、ここまでとしよう。なにしろ忌み明けのため面会者が殺到していてな。ゆっくりできぬのじゃ。そうそう、最後になったが――」

「なにか他に？」

「言い忘れぬうちに申しておく。そなたが大石の襲撃事件に気付かなかったは、そなたや黒鍬衆の落度とは思っておらぬと」

「有り難きお言葉。それをお聞きして胸のつかえがおりました。今日はどのようなお叱りを受けるかと、ひやひやしておりましたが」

「気の弱いことを申すな。そなたらしゅうもないぞ。それに、そなたには、大石の東下りの際の護衛は命じていたが、大石の日常の守護までは命じていなかったではないか。加えて畿内は雑賀衆の発祥地。我等より配下の数が、ずんと多い。下手に日常の大石の守護まで命じていたら、甲府宰相の雑賀衆との血みどろの戦いとなり、こちらの方が痛い目に遭っていたかもしれぬでな」

「正直のところ、拙者もそう思います」

将監は、首をすくめた。

「それゆえ、済んだことは気にするな。次は大石の東下りだ。こちらは、我等の守備

範囲での戦いぞ」

「来ますかな、大石は」

「病癒えれば、間違いなく来る。問題は時期だな。左腕の状態と難所の箱根越えを考えれば、時期的には、神無月（十月）あたりではないかと思うが、どうだ」

「なるほど、大いにあり得ますな。しかし、此度は、道中しっかりとお守りしますゆえ、ご安心くだされ」

「頼むぞ」

そこまでで別れた。

多分甲府宰相との休戦は十月も続くだろう。

大石の守護は必要ないかもしれない。

しかし、用心に越したことはない。

（なにしろ、甲府宰相は上さまに似て、気まぐれで、気短だからな）

保明は、あわただしく立ち上がった。

2

柳沢常盤橋邸には、十室ほどの面談部屋がある。各々出入り口が違っており、面会者は、お互いに廊下で顔をあわすことがない工夫が施されている。

細井広沢の待つ部屋は、事が重大なだけに、最も離れた北側の六畳の密室を用意した。

保明は、近くまで来ると、そっと周囲を見て人影を窺い、異常のないことを確かめると、入り口から気軽く声をかけた。

「お待たせしましたかな、弁庵先生」

平伏する広沢は、顔を上げた。

「いえ、川越から、たった今駆けつけたばかりでござる。ご心配なく、殿」

明るい答えが返ってきた。

来てから半刻近く待たしてある筈だが、広沢はその点、世間慣れして如才がない。

見ると、顔が、真っ黒に日焼けしていた。とても学者には見えない。が、眼だけは、相変わらず知的でさわやかである。

「まずは、余が忌中、身動きできぬ間に、川越の水害の復旧に先生のお手をわずらわせたことを厚くお礼申し上げたい」

と、保明は広沢に謝した。

この年・元禄十四年七月は、台風災害の頻発した年である。連続して酷い水害に遭った川越領内の復旧と復興のため、保明は、思いきって上さまに願い出て、幕府から二万両を拝借し、領民の救済と田畑の復旧資金に充てた。

この総指揮を執ったのが土木知識の豊富な広沢である。今も川越に留まって指揮を継続している。今日は、その合間を、無理を承知で呼び出したのである。

相対の形で、気軽く安座で座り込むと、保明は、早速に口を開いた。

「弁庵先生」

「なにか？」

「話というのは他でもござらぬ。例の件で、朝廷の切所（攻め所）を教えて欲しいのじゃ。たしか弥生の頃、先生が築島（出島）帰りの報告で来られた時、半年ぐらい後でならお教え申す、と言われたと記憶するが……」

「確かにそうでしたな。で、殿の成功報酬の十万石の御加増の件は如何なされました

かな」

広沢は、悪戯っぽく笑った。

「弁庵先生も、お人が悪い。桂昌院さまに従一位が戴けても、とてもとてもそのような大袈裟な褒美は望めませぬ。が、気配り上手の上さまのこと。拙者がなにも申さずとも、母君の破格の飛び昇叙（昇格）ともなれば、何らかの御加増はありえましょう。弁庵先生のご指導の賜とあれば、拙者、そっくりそのまま、御加増分は先生に差し上げてもよろしゅうござるが……」

「いやいや、それには及びませぬ」

「何故かな」

「恐らく御加増は、十万石とはいかぬまでも、万石以上のものとなり申そう。さすれば拙者、大名にならねばなりませぬ」

「お嫌か、大名は」

「困りますな」

「何故かな」

「大名になって、江戸城に出府し、あのような大部屋に閉じこめられて、一日中米つき飛蝗をさせられるのはかないませぬで。辞儀だけで四十数通りあると聞きました

ぞ」

広沢は、茶目っ気たっぷりに答えた。

「あははは。米つき飛蝗は、きついお言葉じゃが、言い得て妙」

「――でござろう。拙者は貧乏性。今の気ままの暮らしが好きでござる。と、まあ冗談はさておき……、その後、朝廷からは、殿の桂昌院さまの従一位の打診に対して、色良い返事はございませぬか」

「いや、全くナシの礫。それで弱っておる」

「そうですか。あれほど皇室関係の陵や神社の修理、整備に精出して、将軍としての忠誠を示して参ったのですがな。それでも効きませぬか」

広沢は、保明を穴の開くようにのぞき込んだ。

「そのようだな」

「となると、やはり神君さま以来の数々のしこりが大きいのでござろうな」

「やはり、そこに来ますかな、原因は――」

広沢はうなずき、保明は天井を向いて、大きくため息をついた。

確かに広沢の言う通り、幕朝間の官職を巡る対立の根は深い。

発端は、はるか遠く寛永四年（一六二七）の昔の「紫衣事件」に遡る。

「紫衣」とは、高徳の僧尼が着る紫の法衣や袈裟のこと。これを着るには朝廷の勅許が必要とされていた。ところが、慶長十八年（一六一三）、家康は『勅許紫衣法度』を制定し、それまで朝廷の専権であった紫衣の授与に介入し、幕府への事前連絡と同意権を要求した。

朝廷と寺院勢力との分断を図るためである。

朝廷は、泣く泣くこの要求を呑んだ。

ところが、実際には法度の幕府制定は有名無実のまま、紫衣は朝廷の独断で与えられ続けた。

理由は、朝廷御料（領）からあがる収入（禄高にして一万石相当）では、天皇家を維持できなかったためである。

背に腹は代えられぬままに、朝廷は、参禅修行をしていない僧にまで紫衣を乱発し、多額の副収入を得ていた。

朝廷の懐の苦しい実情を知っていた二代秀忠は、父家康の死後、朝廷の法度違反に眼を瞑っていた。娘和子を天皇の女御として入内させていた関係もある。

ところが、三代家光（元和九年＝一六二三＝将軍就任）は「生まれながらの将軍」を

自称する権高な男であった。

将軍就任早々に朝廷に新御領として一万石を寄贈（朝廷御領は以後二万石となる）し、反論を封じておいてから強行策に出た。

寛永四年七月。

家光は、僧侶の出世の日付を調べ上げ、慶長十八年の法度制定以後の僧侶の紫衣勅許を、悉く無効としたのである。その数は大徳寺派、妙心寺派で九十人に及んだ。

「朕が綸旨を無効にするとは、将軍の僭上（思い上がり）の極みぞ」

切歯扼腕された後水尾天皇は、将軍への抵抗姿勢をあらわにし、即刻、譲位を表明した。

これが「紫衣事件」のあらましである。

第二は、それから二年後の寛永六年の春日局の「拝謁強要事件」。

この年の十月十日のことであった。

家光の代理で伊勢神宮に参詣した乳母・福（五十二歳）が、この日、将軍の妹で後水尾天皇の中宮であった和子（二十三歳）との面会を済ませた後、依然譲位の意向を撤回されない天皇のところに押しかけ謁見を申し入れたのである。

福の意図は明らかである。

（中宮さまとは、お仲がよろしいのに――実際中宮は、天皇との間に、娘を二人産んでいる――、相変わらず天皇をやめたいなどと、ぐずっておられる。そんな天皇とはどんなお方なのか。譲位はご本心なのか）

を自分の眼で確かめたかった。幕閣の後押しもあったろう。

しかし、福のような無位無冠の者は、天皇に拝謁することは許されない。

が、福は強引だった。

武家伝奏・三条西実条に命じて急遽、その妹分という名目をでっちあげ、猶兄の実条を従えるようにして皇居に乗り込んだのである。

まさか、許しも得ずに、のこのこやってくるような不躾はあるまい、と思っていた朝廷は、驚き慌てた。延々鳩首朝議の末、最後に、不承不承、拝謁を認めたのである。

しかし、無位無冠の拝謁者は認めないという筋を通すため、朝廷は、福に従三位、「春日」の名号を付与した上で拝謁を許した。

福にとっては、「棚からぼた餅」のような名誉であった。が、朝廷に言わせれば官位の強奪に等しい暴挙である。

もっとも、この時、本当に天皇が御簾の内に御座しておられたかどうかは歴史の謎

である。

なにしろ後水尾帝は、三十三人もの御子を儲けられたような〈骨太な天子〉である。たかが将軍の乳母ごときに親しく会う気持ちなど、さらさらなかったと思われる。幸い時刻はすでに暮靄（夕靄）に入っており、謁見のための禁裏の御学問所は薄暗い。それに、遠い御簾の中は見えない。直接御言葉をかけることもなさらない仕来りである。

となれば、御本人は御不在だったとも考えられる。

福の挨拶に対して、勾当内侍経由で返ってきたという天皇の御言葉は、わずかに次の一言であった。

「綸言汗の如し」

綸言とは「王ノ言ハ糸ノ如ク、ソノ出ズルヤ綸ノ如シ」（礼記）に由来し、「汗の如し」（漢書・劉向伝）は、一旦出た汗は二度と戻らない。つまり帝の言葉（譲位）は、取り消すことはできないものなのだ、「さよう心得よ」との諭しである。

しかし福には、この言葉がぴんとこなかった。

天皇に拝謁するには、基礎的教養が足りなかったのである。

「ご叡慮がどこにあるか、わらわにはさっぱりわかりませなんだ」

福が、江戸に戻った後、そんな、ぼやきまじりの報告を行った直後の十月二十五日。
福の無知をあざ笑うように、後水尾天皇は、土御門泰重（つちみかどやすしげ）を呼び、女一宮（天皇と和子の間の娘・将軍家光の姪（めい））を次期天皇にする意向を伝えた。
「将軍名代の福とやらが、朕の言葉に反対しなかったゆえ」
と、謁見の強要を逆手に使われたのである。
同二十九日。後水尾天皇は、女一宮への譲位を敢行した。
明正天皇（七歳）の誕生である。
幕府は衝撃を受けた。
なぜなら、女一宮はやっとの思いで天皇家に押し込んだ徳川の血統の女である。
だが、女帝では夫を持つことがない。
持った先例もない。
そうなれば、徳川の血統は、女一宮一代で終わってしまう。
天皇譲位という名の、徳川の血統排除の陰謀に、まんまと引っかかったのである。
なまじっか福を将軍の名代として派遣した、しっぺ返しであった。
天皇の言われたという「綸言汗の如し」の謎を、福が、その場で理解し、天皇の譲位の決意表明の撤回を在京中に画策していたら――。

それをしなかった徳川幕府の、悔やんでも悔やみきれない失態だった。
だが、福の威光を恐れて、だれもこの点に触れる者はなかった。

こんな朝幕の対立抗争の歴史を、もつれた糸を丹念に解きほぐすように修復してきたのが五代綱吉である。
せめて、そんな綱吉公の朝廷に対する忠誠回復の努力に免じて、曲げてでも、その母君に従一位を下さるまいか――、それが保明の偽らざる気持ちだった。

3

「柳沢さまのお気持ちは、よう解(わか)ります。が、なかなかもって理屈では難しゅうござるな」
と、広沢は、声を落とした。
声の調子が、冷ややかに聞こえた。
「いけませぬか」
どうも広沢には妙案がないらしい。

このままでは切腹ものである。

しかし、広沢は、そんな保明の苦衷を無視して語り続けた。

「どう考えても正論としては通りませぬな。幕府は、資格のない僧侶に紫衣を与えるべからずと申してきた。しかるに自分のこととなると、桂昌院さまにはなんの功労も資格もないのに、忠義な上さまの母上に免じて従一位を、と要求する。ここに矛盾があります」

「わかっております。弁庵先生……」

背筋から冷や汗が流れた。

保明は、ゆっくりと自分に言い聞かせるように答えた。

「……拙者の申すのが理屈でないことも重々承知しております。ただの私情に過ぎませぬことも」

保明は、そう言い切った。

「私情と申すと、綱吉公との親子の情のことでござるな」

「さよう。しかし、そこに拙者の私情も加わりまするな。私情の三つどもえでござる」

「と言われると？」

「では申し上げましょう。実は拙者の実の母も賤しい身分の女でござった」
「まさか！」
「いや事実でござる。拙者、恥ずかしながら、実際は庶子の出でござる。しかし、長い間、我が柳沢家では、これを隠してきました。拙者が、その真実を知り、生母の孝養に努めたのは二十四歳、生母の晩年に過ぎませぬ。この不憫だった母の姿が、桂昌院さまと重なりましてな。どうしても綱吉公の母上を想われる、その幼児のようにがんぜないお気持ちを、拙者、突き放すことができませなんだ。それゆえ、理屈ではないと申し上げるのだが……」
「と申されると、〈理外の理〉を探せと申されるのでござるな。この拙者に」
「有り体に申せばそうでござる。理はどうでもよいのでござる」
保明は、自嘲気味に言った。
「うむ」
今度は、広沢が腕を組み、眼を瞑って動かなくなった。

保明は、ひたすら待った。
瞬き一つせずに――。

おそらく、だれかが、この情景を眺めていたら、さぞ自分が憐れっぽく見えたに違いない。

この春、広沢と会った時、この件に関して「朝廷にも切所がある」と、軽い調子で断言したではないか――、と口に出かかるのを、保明は懸命になってこらえた。

（あの時はあの時、今は今。恐らくあれから京の朝廷と寺社の修繕などで何度も接触を続けているうちに、弁庵先生は、なにか気持ちに変化があったのかもしれない。それを、なんとか戻してくれないものか――）

保明は、ひたすら念じ続けた。

――長い沈黙ののち、広沢は、やおら眼を開いた。

「柳沢さま」

「うむ？」

「拙者、幼少の頃〈忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならず〉という苦悩の倫理を学びました。しかしながら、実際にそのような情況に直面するのは初めてでござる。それゆえ難渋いたしておるのでござる。確かに、この春申したように、朝廷には重大な切所がござる。だが、朝廷のお立場を思うと、それを申し上げて

良いものやら悪いものやら――拙者にはわかりませぬ」

「なぜ、この春と違って、逡巡なされるのでござろうや。そこをお教え願いますか」

「それは他でもありませぬ。朝廷のあまりの式微（衰退）を、眼のあたりに見たせいでござる。亡き兄が、大和郡山に住んでいた頃、懸命になって朝廷の御為に働いた意味が、此度、京に滞在して初めて解り申した。それに比べ、将軍家の贅は目に余りまする。拙者、殿を通じて徳川の禄を頂戴することすら、今は心苦しく思っているのでござる。どうしたものかと思い悩んでおります」

広沢は、うっすらと涙ぐんでいた。

その涙を拭こうともせず、広沢は続けた。

「それゆえ、拙者の口からは、朝廷を、これ以上お苦しめするようなことを申し上げることはできませぬ。官職の授与は、朝廷の〈歴史ある権威の象徴〉でござる。それを強要する不忠は、たとえこの広沢、この身、八つ裂きになろうともできませぬ」

しゃくり上げる声。ついに大粒の涙となった。

「やはり駄目でござるか」

保明は、深いため息を吐き、落胆の表情を見せた。

「しかし……」

保明の苦衷を、見るに忍びないと思ったらしい。
広沢は泣きやむと、声を落として続けた。
「しかし、一度は殿とお約束したことでござる。武士に二言なし。それゆえ切所の探り方だけは、ここでお教え申し上げましょう。申し訳もござらんが、後は、殿ご自身で、お考え戴けませぬか」
保明は、しばし言葉を失った。
できるだろうか？　藁とも縋る広沢に突き放され、自分一人で――。
しかし、保明は観念した。
このままでは共倒れになる。
「孝ならんと欲すれば忠ならず」と思い詰める広沢を、ここで解放してやるには、独力で朝廷の切所を見つけるしかない。
「よろしゅうござる。その手がかりだけでもお教え下さるまいか」
苦渋の決断だった。
「解ってくださるか、拙者の気持ち。有り難や。では、このようなことになろうかと思い、あらかじめ懐紙にしたためて参りました。ここに置いて参りますので、どうか、ここからお読み取りくだされ――」

広沢は懐から懐紙を取り出すと無言で差しだし、そのまま平伏した。
「では、拙者、急ぎ川越に戻らねばなりませぬ。これにて失礼仕る」
と、静かに席を立った。

一人残った保明。
恐る恐る、残された懐紙を開いた。
そこには、達筆な広沢の筆とはおよそ似ても似つかぬ、つたない文字で、次の二行がしたためてあった。

こよみ
はつき（八月）すえ

全くの謎かけである。
しかも女文字。
「孝ならんと欲すれば忠ならず。忠ならざる己れの証跡（証拠）を残さぬための広沢の工夫か、この女文字は……」

保明は、懐紙を握りしめたまま、いつまでも中空を睨み続けた。

4

一日置いた八月朔日（一日）は、八朔の参賀である。定例の儀式を無事終えると、保明は、いつになく急いで常盤橋邸に取って返した。

広沢と会ったと同じ密室に一人の男を待たせてあった。

幕府天文方の総帥・保井春海（六十三歳）。

保明が座に着くと、平伏していた春海が、ひょっこりと顔を上げた。

「殿にはご機嫌麗しく、なによりに存じあげまする」

そういう春海は――、というと、月代は伸び放題。顔は無精髭。

しかし、皮膚の艶も張りも老人のそれではない。つやつやしている。眼も生き生きとして眼光が鋭い。仕事一途に集中している男の眼である。

「急なお呼び出しにて、取るものも取り敢えず罷り越しましてござる。身なりを整える間もござらず失礼仕ります。なにしろ身は一介の都の翁にござれば、平にご容赦を」

春海の諱・都翁にかけた詫びの言葉であった。

「いやいや、苦しゅうない。悪いのは、急に呼び出したこちらの方じゃ。気にかけないでもらいたい。それにしても、都翁先生、髭にあたることもかなわぬとは、よほどのお忙しさじゃな」

と、声をかけると、

「はい。お陰さまで。とは申せ、忙しすぎるのも善し悪しで、それはもう、目も回るほどでござるが――。それでも、拙者、一日一回、体のためと思うて、本所の天文所周辺の半刻の散歩と世間の探索は欠かしたことはござらぬ。それと、最近は、時々日本橋界隈まで足を伸ばして、〈碁会所〉で、町人や旗本の侍たちに碁を教えていましてな。ここでは三十年前に、自ら禁じ手とした初手天元（碁盤中央打ち）を、秘かに復活いたしてござる。まあ相手は素人。ほんの気晴らしではござるが……」

と、春海は破顔した。

寛文十年（一六七〇）、春海が三十二歳の時、本因坊道策と対局し、天文の法則の啓示より得たという「初手天元」を打ったのは有名な話である。だが対局は九目の負けに終わった。以後、初手天元を諦めることになって久しい。

春海は、なお続けた。

「で、今日は、如何なるお呼び出しでござろうや。まさか碁の相手をせよ、と言われるのではござらぬでしょうな。申し訳にもならぬが、葉月（八月）中は、仕事に専念するため、自ら碁打ちを封じておりますれば、たとえ将軍さまとてお相手できかねまするが……」

「いや、碁のご教授を戴くためのお呼びかけではござらぬ。しかし、今うかがっていると、なにやら忙しいのは、今月だけらしゅうござるな」

「さよう今月だけ特別でござる。それも二十八日頃まで。あとの月は、天変地異の予兆でもない限り、通常の暦事の確認作業に戻りまする」

「それはまた、なぜでござろう」

「今月末までに来年の暦を算出し、その写本を江戸の各暦問屋に渡さねばなりませぬ。これが拙者の役目でござる。それも折暦、綴暦、略暦など七種もございますれば、葉月は、それこそ猫の手も借りたいほどで」

「なぜ今月中でなければならぬのでござろうや」

もしや、これが広沢の残した「こよみ　はつきすえ」と関係があるのではないか。

急に心の臓に震えがきた。

ところが、そんな、こちらの事情は、全く頓着しない春海。さらりと答えた。

「理由は簡単。それでないと霜月（十一月）朔日（一日）の暦の売り出しに間に合わぬからでござる。それから逆算すると拙者の仕事が葉月末ということになりまする」

当時の暦問屋は、春海の所から出る写本を基に、これを美濃紙に写し取り、板木に貼り付けて、摺版を彫師に彫らせた。

ところが、暦の文字が細かいので、摺版は三百枚も摺れば新しいものに代えねばならなかった。

この彫師が彫る、暦問屋が摺る、の繰り返しの手間を、暦の発売日の十一月一日から逆算すると、春海の来年の算暦期限は、葉月末までにならざるを得なかったのである。

保明は、さらに、興に引きずられて訊ねた。

「なるほど。それで今月お忙しいのはよく解った。では、それは各地方の暦とも一緒かな」

春海は、待ってましたとばかり答えた。

「昔は別々でござった。が、この十数年は、旧来の『宣明暦』を廃し、拙者の考案し

た『大和暦』で、全国ほぼ統一されてござれば、独自の暦を持つ薩摩さまを除いては、ほぼ同じでござる」

春海は、ここで、ちょっぴり、誇らしげに胸を張ってみせた。

春海が胸を張る背景には、長い長い、朝廷との暦を巡る闘争物語がある。

旧来の『宣明暦』は、貞観四年（八六二）に唐からもたらされたもので、八百余年の間に大きな誤差を生じていた。

これに初めて苦情を申し入れたのが戦国の覇王・織田信長である。

だが、朝廷の陰謀に踊らされた明智光秀によって、あっけなく討たれ、『宣明暦』は、そのまま温存された。

そんな旧習を排し、暦を初めて日本向けに工夫したのが、春海の『大和暦』であった。

朝廷に採用されたのは、貞享元年（一六八四）、信長の死後百二年である。

しかし、この改暦も、推進者は朝廷ではなかった。幼少の四代将軍家綱の後見役であった会津二十三万石の太守・保科正之である。

正之は、二代将軍秀忠が、嫉妬深い年上の妻達子（於江与の方）の眼を盗んで、た

った一度だけ敢行した浮気の子（三男）である。後難を恐れた秀忠は、この子を保科正光（当時信濃高遠城主、二万五千石）の養子に押し込んだ。

従って家綱と綱吉にとっては叔父に当たる。

幼少から秀才の誉れ高く、幕閣としては珍しく、この暦の問題と正面から取り組んだ男であった。

寛文七年（一六六七）、正之は春海に家臣二名をつけて京に送り込み、実情にそぐわない旧暦に固執する朝廷の土御門家と、暦の〈理論闘争〉を行わせたのである。

この闘争の過程で、まず、春海の理論は、その依拠するところが、かつて日本を侵略しようとした元の「授時暦」だから好ましくない、という、いちゃもんを朝廷から突きつけられた。

次に「月食の有無」を巡って欠陥がある等々の指摘を受けた。

朝廷との交渉は難航した。だが、正之は、終始、春海を支え続けた。

寛文十二年十二月、己れの死の床に就いた時も、正之は、「改暦のことは以後も春海に任せるように」との遺言を残し、従容としてこの世を去っている。

春海は、そんな正之の遺志――そして後からは水戸の徳川光圀ら日本史学者の激励――に支えられ、日夜観測を続けた。その過程で、自分の計算の誤りが、元の都と京

都との里差にあることを発見し、『大和暦』の創案に結びついたのである。

延宝八年（一六八〇）、家綱が没し、綱吉が五代将軍となり、翌年、天和の改元となる。

天和三年（一六八三）。

春海は、「請革暦表」を朝廷に上奏した。朝廷側の暦職家・土御門泰福も、その内容の正しさを認めざるを得なかった。ここに十六年に亘る改暦作業は成るかに見えた。ところが春海の建白は、認可寸前の朝議で拒絶されたのである。多分に幕府嫌いの霊元天皇（当時。現上皇）の意向が影響していたと思われる。

翌貞享元年（一六八四）三月三日。

霊元天皇は、明の『大統暦』を基準に改暦する詔を一方的に発した。

しかし、春海はその後、三度、京と江戸を往復し、朝幕の調整を図りながら、如何に『大統暦』が日本にとって不具合かを切々と説いた。

泰福と一緒になって八尺の鉄表（日影等の計測用鉄柱）を立て、日月五星の運行の観測を行って、自分の造った暦の方が正確なことを立証した。

そこまでの実証を突きつけられて、霊元天皇は屈せざるを得なかった。

同年十月二十九日。ついに春海の『大和暦』が新暦として採用されたのである。

もっとも名称は勅命によって『貞享暦』と名付けられた。最後まで幕府側の命名を嫌ったのであろう。しかし、実を取って名をすてた江戸幕府天文方の〈執念の勝利〉に間違いない。

この年、京の町は、翌々日（十一月一日）発売予定だった来年の暦が『大統暦』であったため、大混乱に陥った。

これが救われたのは、幕府が新暦の頒布に積極的に協力したからである。

以上の暦を巡る朝幕の〈十七年闘争〉は、当時、まだ平の小納戸役であった保明には、雲の上の事件であった。このため、今も、暦のできるまでの基礎知識が乏しい。

保明は、恐る恐る訊ねた。

「と、申されると、今の朝廷の暦（京暦）は、実際はどなたが造られておるのでござろうや」

ここが核心に違いない。素人ながら、なんとなくそう感じ取った。

「さよう、今では京の陰陽頭・土御門家も、その配下の賀茂（幸徳井）家で暦注の吉凶を割り付けるのみでござる」

「と申されると？」

「実際は拙者の算出した編暦に依拠して、暦をお造りになっているにすぎませぬ」

春海は屈託がない。気負いも雑念もなかった。

あくまで学者然として答えた。

だが、これは、政治的にみれば、千数百年の天皇家の造暦の実権――そして帝王の授暦の権威――が、朝廷から幕府天文方に、すでに移っているという重大な告白を意味する。

（ということは――）

しばし考えていた保明は、ここで、はたと膝を打った。

（そうか、幕府天文方の編暦を賀茂家に渡さなければ、朝廷は来年の暦を造ることができなくなるのだ！――）

これが広沢のいう朝廷の切所だった。

保明は、一人小躍りした。

更に調べてみると、幕府天文方の作成した編暦の交付手続きには、次の二つの方法があることが判った。

江戸の暦問屋（十一軒）だけは、お膝元ということで、八月二十五日過ぎに、天文方

から直接の授受が許される。

それ以外の地域では、各地とも八月二十八日から月末にかけて、奉行所に地元の暦師みずから出向いて編暦の交付を受ける。

京都もその例外ではなく、今では、地元の大経師・降屋内匠と院経師・菊沢藤蔵が揃って京都町奉行所に出頭して受領している。

ただし、他の地方より一日、二日早めになるように配慮されているようである。永年授暦権を持っていた朝廷への敬意を表すためであろう。

（そうか――それでわかった）

大きく頷いた保明は、翌二日には早々に手を打った。

京都町奉行所に家老の平岡宇右衛門を派して、こう述べさせたのである。

「主・柳沢に思うところこれあり、近く送られてくる予定の天文方の来年の編暦の交付は、柳沢の承諾あるまで保留とされるように――。このこと土御門家に予告されるも一向にお構いなし」

早い予告のあった方が、決着も早くなる。

果たして――八月下旬。

江戸の暦問屋が、幕府天文所の授暦を、いまや遅しと待つ真っ最中――。

近衛家の用人進藤筑後守が、あたふたと江戸に飛んで来て、保明に面談を申し入れた。

しかし、保明は、多忙を理由に会わなかった。

代わりに京から戻っていた宇右衛門に相手させて、次のように言わせたのである。

「俗にも『魚心あれば水心』と申すと、関白殿にお伝え下され。編暦をお渡しできるかどうかは、すべて、そちらさまの魚心次第でござる」

5

九月の重陽の日（九月九日）。

保明は、早朝七時、いつもの時刻に登城した。

取り敢えず、〈緊急の朗報あり〉との連絡を奥に入れ、自室で待機していると、「即刻会う」と伝えられた。

早朝の謁見は異例のことであった。

恐る恐る上さまを中奥まで訪ねた。

上さまは、朝湯から上がってこられて、まだ着流しのまま。小姓に髪を結わせながらの朝食の最中であった。

保明を見ると、

「おお、どうした出羽。苦しゅうない近う寄れ。人払いが必要なら、髪結いを止めさせてもよいのだぞ」

と、気軽く、お声をかけてこられた。

「一大朗報にござれば、それほど秘密にする要はなかろうかと存じます。が、一応来年弥生の正式の朝使の御伝達までは、御内聞がよろしいかと」

保明の言う〈一大朗報〉と〈朝使御伝達〉の二つの言葉に、上さまはピンとこられたようであった。

直ちに、朝餉の膳が下げられ、周囲の者、すべてが退けられた。

上さまは、にじり寄るようにして言われた。

「申せ弥太郎。例の件か」

「さようでございます」

「言え。朗報なら一刻も早く聞きたい。なにしろ近ごろ耳に入るのは、余に対する謂れなき非難ばかりでな。くさくさしていた所じゃで」

と、笑われた。

八月中、保明は編暦の件で在宅調べが多く、城を不在にしがちであった。これをいいことに、老中が、詰まらぬ下々の幕政批判を、上さまのお耳に入れたのであろう。

確かに最近、何故か江戸では、幕政への怨嗟の声が大きい。

春海が散歩がてら入手して届けてくれる町中の一枚摺には、

近頃の「諸式高直」（物価高）は、幕府の悪貨鋳造政策のせい

「生類憐れみの令」は天下の悪法等々

連日のように綱吉の施策に対する批判記事が載っている。綱吉の狂画（漫画）が、一枚摺に載ってない日は、一日たりともない状況である。

そろそろ、取締が必要では――、との声が目付あたりから上がっていた。

だからこそ、将軍が保明の〈朗報予告〉と聞いて、飛びついてこられたのであろう。

保明は、思いきって言上した。

「実は、昨夜――」

「おお、昨夜どうした」

「お喜び下されませ。昨夜、関白・近衛基熙さまより内々の使いがあり、かねてより審議中の桂昌院さまへの従一位昇叙（昇格）の件、今般、当今さま（天皇）から、正

式に〈苦しからず〉との内意が下った由にございます」

「それはまことか、まことなのだな」

上さまは、狂わんばかりに叫び、その後、しみじみと言われた。

「弥太郎、この交渉、よくぞやってくれた。夢のようじゃ、夢のようじゃ――しかし、母君にだけは、子として今お伝えしたいがよいだろうか。もちろん、春までは、内証にしておくようにと、よくよくお願い申し上げるが――」

「三の丸さまのお胸にだけ納めていただけるならよろしゅう御座いましょう。後は、どうか、お健やかに、その日を迎えられますようにと、願うだけでございます」

保明は、そう言って平伏した。

やがて、上さまは、朝餉も、心ここにあらずの御様子で、立って行かれた。

三の丸に急ぐ上さまの後姿を追いながら、保明は、つくづく思った。

（ごり押しであったが――、結果よしとしよう。だが、さて、これから、どうやってこの借りを関白殿にお返しするかだ）

保明は、長年の肩の荷をおろして、ほっとした気持ちで自室に戻った。そこに、今月の当番老中の稲葉丹後守正通が浮かぬ顔で待っていた。

一見して、緊張している様子が見える。老中にあがってまだ半年、一番末席である。

「ご相談したき儀がございまして」

と、恐る恐る言った。

よく見ると、手に一枚摺を束にして、しっかりと抱えている。

保明は、（例の御政道批判の件だな）と、即座に悟った。

こんな重大な事を、一番末席の正通一人に押しつけて寄越す他の老中も老中だが……、まず、本人の肩をほぐしてやる必要がありそうである。

保明は笑顔を繕った。

「丹後守殿。つかぬ事を伺いますが、お父君のお亡くなりになったのは、いつでござったかな。確か今頃の季節と思ったが？」

大地震があったすぐ後だったので、よく憶えていた。

正通は、不意な個人的質問に、戸惑いを見せた。

「は、五年前の九月六日のことでござる。三日前に、母と祥月命日の法要をいたしたばかりで。来年が七回忌になりまする」

「そうか、もうそれほどになるのか、早いものですな。若い時、父君には、なにかとお世話になりましてな。よくおぼえておる」

「さようでございまするか。恐縮でござる」
正通の緊張がすこしほぐれたようである。
それを見計らって、保明は訊ねた。
「して御用件は、なんでござろうかな」
「いや、たいしたことではござらぬ。が、老中方が柳沢殿のご意見を是非聞いて参れ、と申されるので参上した次第で……」
いかにも気が進まないという風情である。
「よかろう、承りましょうか」
そんなことだろうと思った。後ろに控える老中たちの小心翼々の顔が、目に見えるようである。

「では――」
と言って、正通が、まず訊ねてきたのは、案の定、最近の「諸式高直」（物価高）が、幕府の貨幣改鋳政策（元禄八年八月開始）のせい、とする世間の批判への対応であった。
「ご覧下され」
と言って、正通は、一枚摺の束を拡げた。

しかし、保明は見向きもしない。
「折角のご持参だが、読む必要はござるまい」
保明は、わざと素っ気なく言った。
「なぜでござるか？」
恨むような目つきである。
「すでに眼を通している故（ゆえ）な」
多少、はったりはあったが、まんざら嘘（うそ）ではない。毎日散歩を欠かさないという都翁こと春海から、町中で売られている一枚摺が、雨でも降らないかぎり、保明の元に届いている。
下情を知った方がいい、という春海の忠告であり、保明も春海の意見を尊重して、時々は流し読みしてきた。
これまで、皆、似たり寄ったりの駄文だったが、最近、論法が、なぜか鋭くなってきていることは確かである。
（誰か、詰まらぬ論客が加わったかもしれぬ。いずれ将監にでも調べさせよう）
そんな疑惑がある。
それだけに、今、いたずらに取り締まらず、執筆者筋を泳がせておく必要があった。

正直のところ、老中や若年寄に、今、騒がれては困る。これが保明の本音である。

保明は、ゆっくりした口調で言った。

「こんな雑文を気になされるな。それにな、丹後殿。老中たちにはいろいろ申す者もおろうが、お手前の考えで行動なされい。ほれ、上さまからもお言葉を頂いたでござろう」

浅野の刃傷事件当日、老中なりたての正通は、将軍の裁定に異を唱え、これに同調した土屋相模守らの奏上で上さまを大いに怒らせたのである。だが、綱吉はこの時、正通に「進言に遠慮はいらぬぞ」と申されたのだった。

「はい」

正通は、素直に答え、皺の寄った顔を綻ばせた。

「しかし、折角だから、この際、小職の見解だけは申し上げておこう」

「お願いいたす」

「まず結論から申すと、貨幣の改鋳と最近の諸式高直とは、全く関係がないということでござる」

「それは、まことでござるか」

「さよう。最近の諸式高直は、元禄八、九年の甚だしい冷夏によるもの。その影響が

今に及んでいる。貨幣の質とは関係がない。これを混同した議論が多いので困る。早く消し去らねばならぬ。老中方も、その積もりでいてもらいたい」

「わかり申した」

「貨幣の質が物の値段に影響がないことは、丹後守殿が老中に加わるだいぶ前だが、――元禄八年八月に、老中の方々には、当時の総奉行阿部正武殿と改鋳の実務に携わった勘定吟味役――現在の勘定奉行・荻原重秀（おぎわらしげひで）から、十分説明してござる。貴殿がご存じないのは、当時おられなかった故、仕方もござるまいが、他の幕閣方、特に当時老中であられた土屋相模守殿には、すでにご納得戴（いただ）いたこと。疑問があるなら、当時の合議の記録を、もう一度引き出して、お読みなさるがよろしかろうとお伝え下されい」

そう言って、この新任の老中を下がらせた。

6

正通の帰った後、保明は、一人ぽつねんと六年前の貨幣改鋳をめぐる論争を思い出していた。

正通には言わなかったが、本当は、この貨幣改鋳の背後に保明が居たのである。

元禄七年――貨幣改鋳の前年のこと。

保明は、将軍から一万石の加禄を得て、七万二千三十石の大名となった。侍従に任ぜられ、老中格として初めて幕閣の評定に加わったのは、この年も押し迫った十二月である。

つまり、半年の幕閣としての〈慣らし期間〉を経ての、綱吉の最初の密命が、この貨幣改鋳であった。

もちろん保明は「貨幣論」に詳しかったわけではない。最初は「無から有を生み出す」ような財政家・荻原重秀の論旨――金銀を吹き直し、金の含有量を減らした小判を鋳造すればよいこと――という意見具申を納得することができなかった。

だが、保明と重秀には、同じ武田家出身の流れを汲む親近感があった。

それに偶然だが、同年生まれである。

そんなところから保明は、素人ながら、重秀の貨幣論に興味を持ち、重秀の方も保明に食いついて離れなかったのである。

こうして保明は、この天才的財政家の理論を幕閣の中で最初に理解した一人となったのである。

「柳沢殿、お聞きくだされ」

と、当時、一勘定吟味役（勘定奉行の監視役）に過ぎなかった重秀は、組織を飛び越えて保明の所にやってくると、切々と訴えたものである。

当時、三十八歳。

相方の勘定吟味役・諸星伝左衛門（当時七十歳）はもとより、勘定奉行・松平美濃守（同四十七歳）、同・稲生五郎左衛門（同五十五歳）、同・井戸三十郎（同六十一歳）らは誰一人、重秀の理論を理解できなかった。

重秀が組織を飛び越すのも無理はなかった。

重秀は力説した。

「貨幣の量は、この国の商品の生産や流通の増大と均衡していなければなりませぬ。ところが、佐渡金山の金の生産量は、元和期以後、年々落ちる一方でござる。拙者、勘定吟味役として、十一回に亘って佐渡に渡り、排水工事を改良して生産量の回復に努めましたが、年々、採掘箇所が遠く、深くなる一方で、根本的な解決には到りませんでした。今後とも増産の見通しはありませぬ」

嘘ではなかった。保明の調べでも、元和元年（一六一五）当時の佐渡の産金量は年二百十三貫（八百キロ）。それが、今では、わずか二十貫から二十五貫を前後する程度である。

「それゆえ、以前と同量の金の含有量で貨幣を造ることは、もはや幕府としては不可能でござる。さればとて、世の生産や流通を抑止することはできませぬ。それゆえ、貨幣の改鋳に当たって金の含有量を低減させることは、避けることのできぬ措置と判断せざるを得ませぬ。

しかし、そもそも論としては、貨幣の価値は、幕府が信頼されているか否かにかかるものでござれば、貨幣の質とは関係ござらぬ。幕府が一両といえば、たとえ瓦礫であろうと紙切れであろうと一両で通用する。それが貨幣というものでござる。すこしぐらい金の含有量の増減があろうとなかろうと、地方大名の造る紙鈔（紙きれ）の藩札よりはずっとまし、と考えて割り切って下され」

以上が重秀の論旨だが、これを突き詰めると、二十世紀の「金本位制離脱経済」になる。

その意味では、ケインズより二百年以上早く「貨幣経済を先取りした男」であったという評価を与えることができる。

だが、惜しむらくは、当時の幕府経済そのものに――幕府が一両と言えば一両で通用するという信用――の裏付けとなる財政の基本思想がなかった。いうなれば、徳川家の個人家計だったのである。

これは徳川家康が、幕府創設当時、豊臣秀吉の伏見城から強奪して持ち込んだ膨大な金（一説には六十トンから百トン）。これに加えて、秀吉を真似て徳川家の直轄とした佐渡や伊豆などの金山が湯水のように大量の金を生産したことに由来する。

このため、幕府には「収入を計って支出を制する」という財政思想が育たなかった。

それだけではない。

秀吉は、金（慶長大判・小判）をもっぱら褒美に与える「見せ金」とし、流通には、銀と銅を使っていた。この天才的な二重貨幣政策を、家康は理解できなかった。そして生活貨幣に金を混入させるという愚を犯したのである。

伏見城を占拠するまでに、家康が営々と駿府城にため込んできた金は、一トン足らずだったという。それが秀吉の伏見城の金の山を見て、途端に気が大きくなってしまったのである。

このため、秀吉時代に「信用貨幣」になりかけていた貨幣が、以後、金の含有量で

計られるようになってしまった。

時代の逆行であった。

それでも、三代将軍家光までは、なんとか個人資産の金を食いつぶすことで食べていけた。

だが綱吉の時代、家康の遺産は枯渇していた。

それに輪をかけて、佐渡金山の生産量が激減したのである。

以上を考えれば、綱吉の貨幣改鋳は、避けられない政策だったということができる。

綱吉だけを責めるのは酷である。

この悪化した財政の打開要請を受けた保明は、重秀の理論を受け入れ貨幣の改鋳を実行した。

幕閣に、保明・重秀連合の貨幣政策に対して、批判がなかったわけではない。しかし、

「反論には確たる対案がなければならぬ」

という将軍綱吉の鶴の一声で、反論は封じられたのである。

ちなみに、この時、鋳造された元禄小判は、量目（重さ）は慶長小判と同じ四・七

六匁（十七・八五グラム）。大きさも縦七・四センチ。しかし、純金の含有量は八四・二九パーセントから五七・三六パーセントとなり、その代わり銀を増やした。金の含有量では三二パーセントの減少である。金の少なくなった分、色が白っぽくなるのは、炭粉や塩をまぶして磨くという「色揚げ」作業により見栄えを保った。

この新貨幣を、以後、旧貨幣と同等の価値で流通させたのである。

これは、貨幣論でいう「実物貨幣」から「名目貨幣」への大きな転換を意味したほど重大な事実である。

それだけではない。これによって、旧貨幣を持つ富民層から財を収奪したことになった。

その意味では、貨幣改鋳は、富裕税に似た善政であったと言うこともできる。

この時の貨幣改鋳で徳川幕府が得た「出目（金の差額利益）」は、五千万両（三兆～五兆円）に及んだといわれている。

だが、綱吉は、それをいいことに、これまでの四代の将軍同様、相変わらず浪費を続けた。

この辺りが綱吉の限界であった。

それはともかく、保明は、この重秀流の財政手法で当面の幕府の財政危機を凌いだ。保明が、綱吉の覚えがめでたく、幕閣第一の地位を与えられたのは、阿諛でも媚でもない。

その手腕と実行力によるものである。

だが、もう一方で、保明は、秘かに疑問と不安を抱いていた。

（金の生産が落ちるのはやむを得ないとしても、なぜ流通する金が年々少なくなっていくのであろうか）

退蔵金貨は「同価による流通」を強制することによって、かなり富裕層から吐き出させることができた。しかし、それでも金が一向に市場に増えてこない。

これでは、再度改鋳するときは、更に金の含有量を下げなくてはならなくなる。

（まさか重秀のいうように、貨幣を瓦礫や紙にするような極論は、為政者として避けたいが……。だとすればどうしたものか）

保明は、自問自答する。

「誰かが、金をどこかに退蔵しているのか、あるいは国外に金が流出しているのではないか」

この疑惑は、貨幣改鋳から六年たった今も、保明の胸の内を駆け巡って離れること

がなかったのである。

7

九月十三日。

保明は自邸で詩歌会を催している。

これに先だって、昼過ぎから私的な諮問団による「柳沢塾」の会合を開いた。

塾の構成は、綱吉の寵を得て禄が万石を超えた頃から、ぼつぼつと集めてきた在野の遺賢たちである。

筆頭が細井広沢（二百石）、以下、荻生徂徠、志村槙幹、服部南郭ら。この他、綱吉が漢文を唐読み（中国語のままで読む）できることに発憤して、長崎で当時通弁（通訳）を務めていた鞍岡蘇山を塾生に加えている。

最近は、保明も、蘇山の教えを受けて、ある程度は唐読みができるほどに上達していた。

柳沢塾の会合は、塾生が相互に先生役を務め、自分の専門の話をする他、時には外

部から講師を招いて講義を聴く形式である。
天文論の保井春海、貨幣論の荻原重秀などは、一時は、常勤のようにして招かれていた。
会合では、
「どのような意見、異見でも随意に語ってよい。しかし、個人攻撃は、上さまの批判も含めて禁じる。また、ここでの論議に、この後、遺恨など一切残してはならぬ。なお、会合の内容を外部で語ることも厳禁」
これが会合の基本方針であった。だから世間には知られていない。
この日の話題は、もっぱら「生類憐れみの令」に対する意見、異見が続出した。
その悪評の実例は、春海が持ち込んだ各種の一枚摺に、山ほど書かれている。
全員が丹念に――保明の家来たちが用意した一枚摺の朱線部分――を読み回した。
この後、塾頭格の荻生徂徠が口を切った。
「拙者の見るところ、世の悪法論の原因は、『生類憐れみの令』という基本の通達がないためでござるな。そのため、末端の小役人の類推や拡大解釈ばかりが拡がる。これで、我々まで迷惑している。現に今年は、拙者、どこに行ってもウナギ、ドジョウにもありつけなかった」

と言って塾生を笑わせた。

「いや、アサリやシジミも食せなかった」

と、服部南郭が愚痴ると、

「アサリとシジミだけは、最近解禁になりましてございます。皆様に差し上げる本日の夕餉（ゆうげ）にも添えられております」

と、書記方を務める家老の平岡宇右衛門が口を挟んだ。

これは事実である。貝類の売買を禁止すると、「貧しい人々の生活を破壊するところが大きいから」というのが、幕府の解禁の理由であった。

しかし、高級な商品であるアワビやサザエは禁止されたままである。

綱吉は鳥や魚を愛玩（あいがん）用に飼うことも禁止した。

しかし、この指示の後で、ガチョウ、アヒル、唐鳥など（外国からきた鳥）は、野に放つと生きていけないから飼ってよい、と訂正した。

笑い話のような話としては、役所と長屋の大家との間の次の問答――、

問：金魚を飼うことはよろしいでしょうか？
答：かまわない。しかし、何匹飼っているか幕府に報告せよ。
問：報告など、めんどくさいので金魚を放してしまいたいが？
答：申し出よ。藤沢の遊行寺（ゆぎょうじ）の池に集めて放させるゆえ。

一同は笑った。
さらに笑い話として、この日紹介されたのは次の問答――、

問：庭のカラスが煩（うる）さいので、処分して欲しい。
答：申し出れば伊豆七島に移送させる。

ところが、このカラスは、何日かして舞い戻っていたのである。足に目印をつけていたことで判明した。これには塾生一同笑い転げた。

8

そんな塾生の話を横で聞きながら、保明は一人孤独だった。この「生類憐れみの令」に関しては、これまで、老中打ち揃って上さまに意見具申したことがある。しかし、頑として、お聞き入れにならないのである。

「そなたらは、一本の木、一叢の草にも魂が宿っており、いたずらにいたぶれば草木も悲鳴を上げることを知らぬか。ましてや動物は、目で、声で我等に命の助けを求めるのだ。余は、あの悲しい顔、叫ぶ声を思えば、とても食する気にはならぬ」

と、かえって説教される始末。

貧しい者たちの職業を奪わぬようにと歎願して、アサリ、シジミなどに、例外を認めてもらうのがやっとであった。

俗説では、神田護持院住職・隆光が、綱吉の母の桂昌院に、

「綱吉が世継ぎに恵まれないのは前世で殺生したからだ」

「綱吉も桂昌院も、そして保明も戌年生まれだから、犬を大切にするように」

と、迷信を吹き込んだのが「生類憐れみの令」の原因だといわれている。
これは、後世の悪意の作り話である。
綱吉は、隆光に会う二年前から、「生類憐れみの令」に近い指示を部下に与えていた。
それに「生類憐れみの令」は、元々綱吉が殺生嫌いで、仏教の「生類憐れみ」の思想に共鳴していたことから始まった。
将軍になると、即刻、鷹狩りをやめ、公儀役人として威張り散らしていた鷹匠を転属させている。
それに、それまで日本では、犬の殺傷が酷すぎたという「特殊要因」があったことも、指摘しておかねばなるまい。
なぜ犬だけが残酷な扱いを受けたのか？
日本では、牛は農夫の耕耘に必要ということで、殺して食することをしなかった。
馬は武士のかけ替えのない武具であり、乗物であったから、これも食することはなかった。
ニワトリは、「時を告げる神の使い」ということで誰も食べなかった。
山野の獣類は食べるには食べたが、捕獲に手間暇と金がかかり過ぎた。

となると、残る安直な食肉の対象は、犬しかなかったのである。
武将に人気の鷹狩りも大いに影響した。
鷹の飼料に犬が供されたからである。そのため野犬の捕獲だけでは足りず、食糧用の犬の大量飼育まで大々的に行なわれた。
町衆は、食糧不足を補うために、野犬と見れば目の敵のように乱獲した。
綱吉が犬の殺傷禁止を発令するまで、江戸では犬の姿を見ることが難しいほど、その数が減っていたのである。

そこに綱吉の主張が登場した。
根本に仏教信仰があるだけに、保明も老中も理屈で反論できなかった。
それなら下部組織の運用で目こぼしを、と考えなかったわけではない。
だが末端の役人は、逆に、生類憐れみの適用範囲を拡げて、自分の組織を拡大しようとしたのである。犬の保護のための費用なら、幕府から無制限に金が出る仕組みだったから私腹を肥やすものが激増したのである。
（「生類憐れみの令」に関しては、上から下までどうしようもないのだ）
口に出しては言えないが、保明は、正直、そう吐露したい心境だった。

この時の塾の会合で、保明に助け船を出してくれたのは、それまで沈黙を守っていた細井広沢であった。

途中で、ぽつりと呟いた。

「仕方ありませぬな。こういうのを、俗に《亭主の好きな赤烏帽子》というのでござろうて」

これで座がどっと沸いた。

広沢は、さらに続けた。

「それより、も一つ問題なのは、最近の一枚摺をにぎわす批判に、もう一項加わったことでござる。ご存じかな」

「なんでござろう」

と、一同の興味が、朱線のひかれていない別の箇所に移った。

保明は、やれやれ助かったと思った。

が、それも束の間で終わった。

そこには、幕府が、この春、浅野内匠頭を切腹に処し、吉良を不問に付したのは、幕府の〈片落ちの措置〉ではないか、という批判が掲載されていたのである。

一難去ってまた一難。

読み終わった荻生徂徠が、まず、ぼそぼそした口調で解説した。

「江戸の町衆には、上さまが浅野内匠頭を罰した理由の〈朝廷への非礼〉という意味が、なかなか理解できぬのでござろうな。そのため、すぐ単純に喧嘩、そして、その両成敗こそ正義と即断する。町衆の愚かさにも困ったことじゃで」

広沢は、これに対して、

「町衆の考え方は、愚かというより恐ろしいと言うべきではござらぬかな」

と、反論した。

「朝廷と言っても、江戸の町衆には、その存在は実感すらありませぬでな。文字通り〈雲居の彼方〉のお方でござる。それゆえ、上さまの朝廷に対する非礼の処罰という意味は、なかなかに理解は難しゅう存ずる」

「ではどうしろと言われるのじゃ」

徂徠は、むっとした顔で訊ねた。

「風でござるよ。こちらの背から町衆に向かって風を吹かせねばなりますまい」

「風？」

「さよう、風。今は反対に向こうから風が吹いてきておりますでな。町衆の大好きな

〈判官びいき〉という風。それが〈喧嘩両成敗〉という御輿にのってやってくるのだからたまりませぬ。これをどうやって、かわすかですな」

「なにやら禅問答のような、お答えじゃが」

祖徠は苦笑したにとどまったが、保明は大きく頷いた。

（判官びいき――喧嘩両成敗の逆風か。なるほどうまいことを言うわい。さて、幕府がこの風を押し戻すにはどうしたらよいか――）

それには、もう一度、事件の根源に立ち戻って、浅野の刃傷沙汰の真因を探るしかない。

では、その真因を探る手段は？

ふっと、浅野内匠頭の妻を思い浮かべた。

そこに、その妻を訪ねてやってくる浪人大石内蔵助の姿を重ね合わせた。

（そうだ、あの男を、もそっと身を入れて守ってやらねばならぬな。それも、本人に気付かれぬようにじゃ……）

第八章　大石東下り　元禄十四年冬

1

八月に入って、内蔵助は左腕の痛みが急に薄らいだ。恐る恐る長尺の愛刀を振ってみたが、痛みの再発はない。

（これなら一人でも、なんとか身を守れる）

それに――、雑賀衆の襲撃は、その後、全く気配もない。

ひょっとすると、池田久右衛門への変名が奏功して、大石内蔵助は毒矢で死んだと思ったのかもしれない。にんまり笑いたい気持ちになった。

内蔵助は、まず遠出の手始めにと、京・仏光寺通りに住む小野寺十内（元京都留守居役、五十九歳。役禄を含め二百二十石）を伴って、紫野の瑞光院を訪ねた。

この時も、つけられている様子はなかった。

瑞光院には、亡君の供養墓を建てる目的があった。院主・陽甫和尚は瑶泉院の縁者である。

永年、浅野家から寺領を賜ってきた祈願所であるが、その後どうなっているのか。支えがなくてやっていけるのか、傷で寝込んでいる間も気になっていた先である。

十四日の月命日には、在坂、在京の旧藩士十数人に呼びかけ、ここで法会を行なった。

さらに、永代供養料百両を納め、下賀茂の山林を購って、院に寄付している。

今更、法会などしても、瑶泉院がお喜びになるとは思わない。だが、自分が直接瑶泉院に手紙を差し上げても届くかどうかに不安がある。実家の三次家の者に奪われるか、内容を見られる危険があった。

それより、院主を通じて、内蔵助が健常に復したこと。亡君の事を決してなおざり

にしていないことを伝えたい。そして、自分の東下りが近いことを匂わせる作戦として考えたことである。

しかし、法会に集まった旧藩士たちは、内蔵助の意図を解しかねた。

「なにを今更、法要など――、瑤泉院さまは、お経など百万回唱えても、亡君はお喜びになられぬと言われたばかりではないのか」

「それをこんな田舎で、ぐずぐずしていて、一体なにを考えておられるのか、大石殿の気が知れぬ！」

と、苦々しく思う面々が多かった。

亡君の供養なら、四月には、華嶽寺、大蓮寺（亡君の母の菩提寺）、高光寺（亡君の祖母の菩提寺）でもやっている。五月には遠林寺の祐海に早水藤左衛門と近松勘六を伴わせて高野山奥の院に亡君の供養墓を建立させている。

今更なにが供養だ、というわけである。

特に若手に不満が多かった。

吉田忠左衛門のような年配の内蔵助の同調派は、上方でも次第に少なくなり、江戸の急進派代表・堀部安兵衛の影響が、ぐんと大きくなっているせいもある。

この頃、安兵衛に応じて、急激に上方急進派代表にのし上がったのが、京に住む大

高源五（二十石五人扶持、三十歳）である。

元々、禄が低く、それもあってか、若い頃から出世など眼中になかった。もっぱら其角、沾洲、貞佐ら当時の文壇の一流どころと交流し、今では武士より俳名の「子葉」の名で通る、いっぱしの文人である。

それだけに、美意識が強く、人の生き様を大事にする気持ちが強烈だった。

なお、源五の弟が、源五の叔父・小野寺十内の養子幸右衛門（部屋住み、二十六歳）、従弟が岡野金右衛門（部屋住み、二十二歳）である。

いずれも、源五に心酔し、後に討入りに加わった熱血漢揃いの血統である。

こんな連中の、内蔵助に対する「許せぬ」「けしからぬ」の声が、真っ直ぐ、そのまま江戸の安兵衛の元に伝わったからたまらない。

安兵衛にしてみれば、疔の患いで腕が動かないというから、煮え切らない大石を、これまで大目に見てきたに過ぎない。

瑤泉院さまには、病の癒え次第、一刻も早くお目通りして、主君が殿中で抜刀した真因を訊ねる積もりだというから、じっと我慢してきた。

それが、なんだ！

病気が治っても、一向に腰を上げない。つまらぬ供養墓など造っていないで、はいずってでも江戸に出てきて仇討ちを決行すべきではないか。

そんな気持ちであろう。

こうして、安兵衛の手紙攻勢が再開した。

次の江戸三人衆連署の手紙（八月十九日付）は、前回、安兵衛が最後に内蔵助への忠誠を誓った姿勢を白紙撤回し、「世間の思惑」（世論）を前面に押したての過激な反論になっている。

以下が、その要旨である。

一　大学さま御家継承（御安否）のこと。

いわれることはもっともながら、亡君の御志を立てることの方が大事である。

このまま、なにもしないでいては、武士道が廃れる。大石殿の姿勢は、とても真実の忠節とはいえませぬ。

一　大学さまの御家継承の暁に、出家されるとのこと。

殊勝に聞こえるが、主君の敵を見逃して、大学さまだけを大事とされることは、大学さまにこと寄せて、命を惜しむように聞こえますぞ。

すでに江戸では、大名、小名、御旗本に到るまで、内匠頭の歴代の家来の中に、義を立てる侍が皆無などということはありえない、かならず主人の敵を見逃さないであろうとの期待感が高まっております。

語調は厳しく、脅しに近い。

ついで、つぎのような大学を巡る仮説や耳語（噂）まで押し立てて、内蔵助を追い詰めてきた。

一　大学さまとしても、赤穂の五万石をそのまま頂戴しても、また、たとえ百万石下されても、兄の切腹を横目に見ながらの拝領では、恥ずかしくてなかなか人前には出られないのではないか――、と江戸中が噂しております。

むしろ上野を討ったほうが大学さま（の顔）が立ちましょう。今、閉門中に討て

ば（家臣の暴走ということで）お咎めも軽い。閉門解除（御免）後に討ったのでは、大学さまの指図と思われて、かえって、御為になりませぬ。

たとえ家中の者共、腰抜け達ばかりであったとしても、必ず大学さまが上野宅へ踏み込まれるであろうとは、大名、小名、御旗本のみなさまの一致した意見です。

では、大学自身はどのように考えているのか。安兵衛の手紙に、次のような注目すべき数行がある。

亡君の遠い親族が、こうした話を聞き及んだ時、大学さまのご挨拶は、こうであったと聞きました。

「自分としては、お上に対して、（たとえ）思うところがあったとしても、果たすことは（立場上）難しゅうござる。が、家来の者たちは、決して堪忍できないであろうと存ずる」

暗に、大学さまは、我々（安兵衛たち）の決起を肯定しているのですぞ、という意味である。

これでは、内蔵助のこれまでの抗弁は、全否定された形である。

なお、上野屋敷の件についても、次の記述がある。

吉良の西隣屋敷は、蜂須賀飛騨守殿（阿波蜂須賀の支藩、阿波富田藩五万石）です。内匠頭の家来の者上野方へ切込みがあるので、その旨心得よ、とのことで、昼夜警戒を怠れない、家中の者は困り切っているそうです。そのため、呢懇の御老中の取次ぎまで願い出て、どうか吉良を屋敷替えにしてくれないか、と申し入れているようです。

その後、上野の屋敷替えが仰せだされたそうです。なんでも本庄（当時、現在の墨田区本所をこうも書いた）筋のように聞きました。これは、内匠頭衆にとっては、もっけの幸い、その思いが達せられ易くなったのではないかとの噂がしきりです。

水野隼人正殿に、呢懇の方が「上野は屋敷替えを仰せつけられたそうですな」と申されたところ、話し相手にやってきていた近侍の座頭が、「それでは、ご公儀

が、内匠頭の家来に、上野を討てと言われんばかりではないですか」

と申し上げた。

すると、隼人正殿も、「なるほどその通りだな」と、ご挨拶なされたそうです。

この最後の記述は、水野隼人正（信濃松本藩六万五千石）の上屋敷が吉良邸の向かい側にあり、隼人正の妻の母と上野介の妻富子が異母姉妹であることを考えると、手紙の文意が、より鮮明になる。

そんな近隣の親族ですら、これほど吉良上野介に冷淡なのですぞ。機は熟しています。それなのに大石殿は、なにを躊躇されているのですか、という意味である。

ともかく、安兵衛の憤激が聞こえてくるような手紙の内容であった。

2

内蔵助は沈黙した。

すでに「世間の思惑」（世論）が、安兵衛たち江戸衆の味方になりきっている。

この厳然たる事実を前に、いくら内蔵助が、

「亡君が城中で禁断の刀を抜いた理由を知ることがまず第一」

と反論しても無駄と悟った。

ほっとした点もある。大学さまご自身が、家臣の「吉良憎し」の気持ちを肯定している様子だということだった。

しかし、江戸派にも欠陥があることを、内蔵助は冷徹に見抜いていた。

まず、孫子のいう、

「敵を知り、己れを知れば百戦危うからず」

という戦略論がない。いたずらに世間の期待する結果だけを求めようとするあせりがある。

内蔵助は、手紙の返事を一ヶ月以上放置して、この間、ひたすら考え続けた。

第一に、「敵を知る」こと。

特に、戦う場合の仮想敵の範囲を見定める必要がある。仮に吉良上野介を襲う場合、反撃してくるのは誰か。

吉良には武力がない。付け焼刃で浪人を雇い入れたとしても烏合の衆でたいしたことはない。

それより、上野介が、息子を養子に出し、その子（吉良には孫に当たる）を嗣子に迎えているという、二重の血縁関係にある米沢藩上杉家がどう出るか。

さらにお役御免になったとはいえ、なお幕臣である以上、吉良への襲撃を幕府が黙っている筈がない。

（我々は幕府の家臣を殺すという大逆を集団で犯すのだ。そこには、「大逆を越えるほどの大義」がなければならない）

以上は、前から考えていたことでもあるが、皆と、もっと話し合い、徹底して考究しておく必要がある。

もう一つつけ加えれば、吉良邸の西隣の蜂須賀家の屋敷のさらに西側に美濃大垣藩戸田采女正の上屋敷があること。

その主君は、亡君内匠頭の従兄（内匠頭の母の姉妹の子）である。内蔵助は、行ったことはないが、

「殿が登城の折に、（行列が）時々かち合うので困っている」

という話を戸田家の家臣から聞いたことがある。

相手の吉良が、禄高が低いくせに、官職の高さを誇るので、どう対応すべきか判らないということらしい。

しかし、亡君の今回の事件とその行動について、采女正が終始冷たい姿勢をとってきたことは、この春以来の手紙の往復で、いやというほど身に染みている。

我等が吉良襲撃を実行したとき、それを知った采女正は、どういう態度に出るか。

これは別だ。

幕府への忠誠を示すためには、間違いなく敵方になろう。となれば、下手すれば、同族相食むことになりかねない。これも戦略論の一端として、頭にいれておかねばならない。

第二に、「己れ（味方）を知る」こと。

こちらはもっと難しい。

内蔵助は、安兵衛や（片岡）源五右衛門のように暗殺まがいのことはしたくなかった。

やるなら、もっと正々堂々とやり、江戸町民の人気を博したい。

この五月の赤穂城開城に当たっては、城を枕に自決を血盟した。だが、吉良を討つという明確な合意は、まだ誰ともしていない。

自死は犯罪ではないが、他人を殺すことは天下の犯罪である。主君の許しを得て行

う親兄弟の敵討ちとは訳が違う。旧家臣の、誰が、どこまで本気で内蔵助に付いてくるかわからない――。

あれこれ考えているうちに九月になった。それでも内蔵助の戦略は見極めを終わらなかった。

やむなく内蔵助は、ぼつぼつ、東下りの準備に入った。

まず最初に嗣子松之丞を先発させた。

東海道の宿舎の選定を含め、雑賀衆の行き来の状況の下調べのためである。

九月下旬には、原惣右衛門、潮田又之丞（馬廻、二百石。三十三歳）、中村勘助（書物役、百石。四十六歳）の三人、更に月末には進藤源四郎、大高源五を追加して江戸に派した。

五人に与えた訓辞は、

「江戸急進派の主張、ご尤もながら、大事の前の小事。まずこの際は主家の再興に全力を注ぎ、東西同士は結束が大事」

といった、相変わらずの趣旨である。

変わっていたのは、その際、万一「赤穂浪士徒党をなして江戸入り」などと一枚摺

に書き立てられてはたまらないと危惧したことである。

その対策として、内蔵助は、各人に、できるだけ、自分と同じように「変名」を使用することを勧めた。

以下が、その各自の決めた変名である。

大石松之丞――垣見左内

なお大石自身も、池田久右衛門をやめて垣見五郎兵衛を名乗ることにした。

原惣右衛門――和田元真

潮田又之丞――原田斧右衛門

中村勘助――山彦加兵衛

進藤源四郎――西山某

大高源五――脇屋新兵衛

上方の同志は、以後、変名を用いたが、江戸派はこれを潔しとせず、変名を名乗るのは、ずっと後のことである。

慎重派の内蔵助に対して、豪放だが隙だらけの安兵衛との対照が、ここにも表れている。

しかし、この頃、相前後して安兵衛から来た、もう一通の手紙の内容の方が、内蔵助には衝撃が大きかった。

八月十九日、堀部ら三人が、突然、瑤泉院を訪問したというのである。

（あれほど瑤泉院さまとは、自分が東下りの折に会うから、接触するな、と申してきたのに……）

彼らが会って何になろう。

吉良を討つことを漏らせば、瑤泉院を、吉良暗殺事件の「連座の罪」に巻き込むことになる。

（それこそ、亡君に対する不忠ではないか）

内蔵助は、怒りに震えながら安兵衛の瑤泉院訪問記を読んだ。

亡君の御後室瑤泉院様へご機嫌伺いに、三人申し合わせて、八月十九日に今井屋敷（三次藩下屋敷、赤坂今井――現在の港区赤坂・氷川神社付近）に参りました。

（中略）

瑤泉院様にも定めて先公の御事さぞやご無念に思し召されておられようと、お察し申し上げました。

私共は浪々の身ですので、さぞや身の上相談のための訪問と、おさげすみなさるのではないか、と思っておりましたが、そのようなご様子もないように思いました。

今後は、度々ご機嫌伺いに参りますのでよろしくお願いいたしますと申し上げた所、与左衛門（用人落合与左衛門）の申されるには、院さまには、皆の気持ちを容れられるであろう、もっとも千万に思う。早速言上いたしましょうとのことでした。

読み終わって、瑤泉院さまとは直接お目にかかれなかったのだと知って、ほっとした。

だが、それでも何度も出向けば、いずれは情にほだされて目通りを許すかもしれない。

そうなったら、安兵衛は自分の本心を語るだろう。それは瑤泉院を間違いなく「連座の罪」に巻き込むことになる。

（馬鹿な奴らが、碌なことをせぬわ）

事ここに到って、内蔵助は、戦略論を一旦封じてでも、決心せざるを得なくなった。

（行こう、江戸へ）

そこまでの踏ん切りをつけてから、安兵衛に、次の手紙を書いている。
日付は十月五日。安兵衛の厳しい批判の手紙から、一ヶ月半が経過していた。

八月十九日のお手紙、去月（九月）二十九日に届きました。

最初から嘘がある。いくらなんでも、江戸と山科の間の通信に、一ヶ月以上かかるわけがない。
内蔵助が、いかに返事に苦慮していたかが、この冒頭の文章で判る。
内容についても、結局のところは文意では尽くしがたいのでと逃げ、微妙な点は、面談の上の話し合いでと、二度も言っている。

一　文公（浅野大学を指す）が身を立てられるのを見届けた上で、という拙者の考えを（これまで）申し上げてきました。
お互いに亡君の恩に報いることを生き甲斐とする身です。拙者とて、いまさら身を庇った積もりはありませぬが、どれほど忠義のためと思ってしたことでも、不忠

としてしか理解されないこと、今回、いやというほど身に染みて知りました。

今日まで（ご返事を）放置したこと、別に他意があったわけではありませぬ。

また（文公が身を立てられた後は）出家すると申したのも、ただひたすら文公のことを思う気持ちから発したことですから、その点、解（わか）っていただきたい。

文公は、亡君と血のつながる特別なお方ですから、徒（あだ）やおろそかにしてはならないと思います。文公のことに寄せて、自分の死を庇（かば）うなどという積もりは毛頭ありませぬので誤解せぬように願いたい。

世間があれこれ申す批判は重々解っています。お知らせいただいた気持ちは十分に解ります。お礼申します。

一　しかし、筆談では、中々思ったように言えないのです。ご合点いかないことと思いますが、（以下）あらましのことだけを申し上げることにします。

一　前々から申しているとおり、唯今（ただいま）ここに我々がこうしているのは何故（なにゆえ）か。この元をお考え下さい。事を急ぎ過ぎ、俺が俺がとやってきたなら、ここまでこられなかったと思います。

世間の批判、あれこれ言うところは、成る程とも思いますが、俺が俺がの独走を棄て、根本を見据えれば、世間の批判は、さして気にすることではありませぬ。独走して家名まで断絶するようなことをするのは、皆様の本意ではありますまい。兎に角、文公さまがどうなるのかを見届け、その結果の善し悪しによって、考えたいと思います。おそらくよい結果が出ることはないとは覚悟しております。しかし、千に一つでも文公の面目を保っていただき、まがりなりの首尾（待遇）となれば、亡君も（弟のことゆえ）お喜びになられましょう。また、面目が保たれなければ、文公は、我々以上に怒られるに相違なく、その時は、文公も我等の同志となります。

一　文公が人前に立てるために、我々が願いたいことは、ご自身が、仙野卜一之助（吉良上野を指す暗号。略して卜一＝上野の「上」を分解したもの＝と呼んだ）方に殴り込むことがなくてはならない。そうでなくては面目が立たないということ。これは（貴殿方に）言われるまでもないことです。

この意味でも筆談ではお呑み込みは難しいと思います。

要は文公の処遇次第です。時節さえ待てばよい結果となるか悪い結果となるかは

解ることです。

一　拙者の考えは、前の手紙でも申しましたが、以上のとおりです。最近、こちらで五、七人で会合した時も、皆、拙者と同じような意見でした。まどろっこしく思われるかもしれませんが、時節を見極めてください。この趣は（すでに差し向けた）原その他にも言い含めてあります。追々参上して申し上げることになると思います。

恐惶謹言（きょうこうきんげん）

十月五日　　大石内蔵助

高田郡兵衛様
堀部安兵衛様
奥田兵左衛門様

形の上では、どう贔屓（ひいきめ）目にみても、安兵衛の論旨に完敗である。しかし、これは、あくまで事件を把握する二人の視点の差にあった。内蔵助は、安

兵衛より、そして浅野方の誰よりも、はるか高所から問題を見ていたのである。
（目先の論争の勝ち敗けは問題ではない）
内蔵助は、そう自分に言い聞かせて筆を擱いた。

3

十月二十日。
内蔵助は、山科を発って江戸に向かった。
新暦でいえば十一月十九日。血気に逸る江戸の急進派三人組らとの話し合いの時期を考慮すると、このあたりが出発の日限ぎりぎりであった。
この出発前夜、もしかすると〈今生の別れ〉になるかもしれぬ——と、思った内蔵助は、ふと思い直して、別室に臥せている妻の元を訪ねている。
普段なら、「おや、お珍しい。どうした風の吹き回しでございますか」と、皮肉の一言ぐらい言う理久だが、この夜ばかりは別だった。夫の東下りの重大さを悟っていたのかもしれない。
内蔵助の求めに対しても、素直に応じ、黙って遊女のように躰を開き、身を震わせ

た。

長い空閨のせいもあったろう。

ことが終わった後も、夜が更けるまで、いじらしいほど内蔵助にかじりついて、離れようとしなかった。

この時、宿した子が、後に三男となる大三郎である。

なお、連れて出た主な人物は、

奥野将監　組頭、千石。その母が大石の一族である。

河村伝兵衛　四百石

岡本次郎左衛門　四百石

中村清右衛門　百石

の四人である。

別に腕が立つわけではない。そちらの方は、からきし駄目な連中だが、この四人は、

「折角十日も一緒に寝起きするのだ。その間に、人物の真贋を見定めたい」

という内蔵助の隠れた意図から選んだ。

以後、一行は、関所を通る時だけ武士姿。あとの道中は、六部笠をかぶった巡礼姿で通した。

内蔵助の一行の泊まった宿場は、

二十日＝草津、二十一日＝関、二十二日＝石薬師、二十三日＝宮、二十四日＝赤坂、二十五日＝浜松、二十六日＝金谷、二十七日＝江尻、二十八日＝沼津

である。

いずれの宿場にも、先発の松之丞から伝言が託されていた。伝言には、次の街道の注意事項と、宿場の安全な宿の名前が書き記されていた。

その指示に従って歩き、そして指名の宿を取ればいい。その点では気楽だった。

夜は、宿場付近を徘徊することこそしなかったが、毎晩のように、座敷に遊女を呼んでは、地元の事情を聞く、ささやかな小宴を張っている。

（酔った時こそ、男の地が見える）

というのが内蔵助の持論である。

その意味では、四人の随行者は、酒に飲まれ、女に溺れるものばかり。地元事情の把握という使命を果たす点でも落第だった。

二十九日。

問題の箱根越えの日である。

関所を無事通過して、十町ばかり芦ノ湖沿いの道を進むと、上り下りの反復する、いわゆる九十九折りの山道に差しかかる。

辺りは鬱蒼たる杉樹林である。

前後に多くの旅人がいた筈だが、気がつくと、いつの間にか視界から消えていた。

「この辺りからの三里が特に危のうございます。くれぐれもご用心下さい」

との松之丞の伝言を、前夜の沼津の宿で内蔵助は手にしていた。

一行は緊張したまま進んだ。

しばらく行くと、昼なお薄暗い街道の樹林の中から、突如、奇妙な叫び声が走った。

「やい、やい、やい、そこな六部衆」

大声と共に、藪草を分けて現れたのは、獣皮を褞袍のようにまとい、めいめいが勝手に槍や鎌を持つ、髪ぼうぼうの山男の集団であった。

総勢五人。

雑賀衆ではない。ただの山賊のようである。

「なんだ、なにか用か」

と気丈に叫んだのは、内蔵助の荷役を買って随行した男――、町人喜兵衛を名乗る三村次郎左衛門である。背中の荷を内蔵助に預けると、右手に礫を握って先頭に立った。

「その背中の葛籠には、さぞや集めた金がたんまり入っておろう。残らず置いてゆくがよい」

と、相手の一人が叫んだ。

「そうはいかぬ」

次郎左衛門が言い返す。

「なにを！　小癪な」

と、五人が、じりっと、にじり寄った。

後ろで見ていた内蔵助は、

（まずいことになったな）

と思った。

葛籠の中の刀は、いつでも引き出せる。しかし、大事の前の小事。こんな男どもを相手に戦って怪我でもしたら、つまらない。

さりとて、相手を殺せば、山賊といえど代官所に届け出なければならない。そうな

ると、加害者であるこちらの身元が露見する恐れがある。
　内蔵助は、ゆっくりと歩を進めて前面に立つと、身の丈一際高く、美しい熊の毛皮に身を包んだ男に、笑いながら声をかけた。
「そちらがお頭さまでござろうか」
「そうじゃ」
　と、相手が答えた。
「さようか、拙者、池田弥門と申して、さる摂州の大名に仕える身でござる。お見知りおきくだされ」
「うむ、それで」
「唯今、拙者の家臣親子の仇討ちの助太刀のため、江戸に急ぎ参るところでござる。相手は旗本のごろつき次男坊とのこと。仲間の次男、三男坊の無頼どもを多数集め、我等の江戸入りを、今や遅しと待っております。それゆえ、こちらも、剣にかけては、家中でいずれ劣らぬ免許皆伝の者ばかりを選りすぐってやって参った次第でござる。これなる小者喜兵衛も……」
　と言って、次郎左衛門を振り返り、
「……礫投げでは家中随一の男。狙った物は生まれてこのかた、はずしたことがござ

らぬ。これ、喜兵衛、お頭さまの御前だ。そなたの腕のほどをすこし見せて差し上げぬか」

内蔵助は、笑いをかみ殺して言った。

次郎左衛門は、一瞬目をぱちくりしたが、素早く内蔵助の作り話に乗った。

「しからば、ご覧あれ」

と、目にもとまらぬ速さで、礫を投げると、十数間先の飛ぶ鳥を易々と叩き落として見せた。

「いかがでござる。それゆえ、ここで貴殿らのお相手したきは山々なれど、時が許しませぬ。今日のところは、我等の仇討ちの大義に免じてお許し願えませぬか。仇討ちなって上方に凱旋する折は、喜んでお相手申しても差し支えないが……、なあ皆の衆」

この話に、山賊は怖じ気づいた。

「いやいや、そのような事情なら、このままお通りなされ」

と、頭と称する男は言った。

「いや、そうは言っても、そちらとしては折角の獲物でござろう。我等としても仇討ちの腕試しとしては、うってつけのお相手なれば、皆、腕を撫しておりまするが」

内蔵助は、噴き出しそうな笑いを堪えて言った。
「いや、それには及びませぬ」
と、頭は尻込みする一方である。
「ではやむを得ませぬ。しかし、ここで会ったのも、なにかのご縁。如何でござる。拙者、貴殿が黙って通していただけるお礼に、通行料として、小者二人を含めて一人一両ずつ、合計七両を、お預けしてまいるゆえお受け取り下され」
そう言って無理に七両を摑ませて別れた。
「ご無事本懐を遂げられよ」
と、山賊に激励されて峠を下ったのは、後々までの笑いの種となった。
もっとも、この七両が、そのまま瑤泉院への預かり金の不足となり、内蔵助の懐から穴埋めする羽目になるのは、この後日談である。

4

箱根山中の危機を、内蔵助の舌先三寸の嘘でかわした一行は、十一月二日（陽暦十二月一日）、無事江戸に入っている。

宿舎は、三田松本町（現港区芝三丁目）の前川忠太夫宅である。浅野家菩提寺の泉岳寺からは目と鼻の先（直線距離で一・七キロ）にあった。

忠太夫は、屋号を「米屋」といい、昔からの浅野家出入の日雇頭であった。

年齢は内蔵助より一回り以上、上であろう。

愛想のいい笑顔を振りまく、好々爺然とした男であった。

「浅野さまには、先々代さま（長直）以来ご贔屓いただいておりました。旅籠とは違い、なんのおもてなしもできませぬが、どうぞご遠慮なく、ご逗留くだされ」

と言われて、安兵衛が斡旋したものである。

ここなら安上がりだし、旅籠と違って町奉行所の滞在客調べの目も届かない。

「しかし、忠太夫のあの目つき、どうも拙者は気に入らぬな」

と、内蔵助は言った。

「そうでござろうか。しかし、浅野家は、あの親爺とは三十年来の付き合いでござる。生まれつきのギョロ目と思って勘弁してやって下され」

「では、やむを得んか」

そんな一幕があった。

翌早朝――。

内蔵助は、斎戒沐浴した後、人目を避けるように泉岳寺を訪ね、亡君の墓に詣でた。

その後、一人部屋に籠もって、瑤泉院に「十四日のご命日、つもるお話いたしたく」との趣旨で面談申し入れの手紙をしたためた。

差出人の名義は、

近衛家用人　池田久右衛門

表書きに「御直披（本人のみの開封）」を付けた。

しかし、本文の巻紙に大きな空白をあけ、そこに生酒で「くらまいる」と隠し文字を書くことを忘れなかった。

六日からは、今後の活動のために見ておきたい場所の見聞と検証を本格的に開始した。

まず江戸城の見聞である。

（なにもかもが、とてつもなく広く大きい）

そんな最初の印象と驚嘆が収まると、次に感心したのは、江戸城を巡る付近の道の広さと微妙な曲線であった。

どの城門に到る道にも直線がない。微妙に曲がっていた。
「恐らく、鉄炮や大砲で真っ直ぐに城門や本丸を狙われないための工夫であろう。神君さまが、実に用心深いお方だったことが、これでよく解ったわ」
と、案内する安兵衛に呟いた。
「なるほど。そう言われれば、そうでござるな。何年も江戸住まいしておったが、そのようなこと、とんと考えも及びませんでした」
安兵衛は、素直に頭を掻いた。が、そこまでである。
（我々もかくあらねばならぬ。血気に逸るばかりが能ではあるまい）
という、内蔵助の言外の意味までくみ取った様子はなかった。
次に、二人だけで江戸城の外濠を一巡し、呉服橋の吉良邸を遠く望見した。
「あれが前の拝領屋敷か」
内蔵助は安兵衛を振り返る。
「そのようでござる。しかし拝領したのは敷地だけで、屋敷は自前……、と聞いておりますが」
「それにしても、四千二百石の高家なら、あれほど豪華な家屋敷に住めたのか」
赤穂の自分の旧屋敷は、あの五分の一もなかったように思う。その雲泥の差に一驚

した。

「噂では上杉家からの多額の借り入れで造ったとのことでござるが――」

「ほう、それにしても豪儀な。さぞかし返済が嵩んで大変だったであろうな」

「さてそれは如何でござろう。他人さまの懐はのぞけませぬゆえ……」

安兵衛は、つれない顔で答えた。

「……それに、上野介めは禄はわずかでも、その他の実入りが多いようでござる。此度の朝使饗応でも、聞くところでは、浅野、伊達両家に大枚の謝金を要求したとか……」

内蔵助を探る様子。

「存じておる。というより、拙者は、その謝金を要求される側にいた被害者だからな」

と、内蔵助は、ほんの少しだけ本心を語った。

「上野介めはな、公の礼節典故に大幅な変更があった、その特別指導が必要と称して、わざわざ数回に亘って自邸に殿を呼びつけた。この後、江戸詰め家老に別途の謝金を要求したようだ。しかし、安兵衛、言っておくがな。そんな金銭の要求は、江戸の幕府役人との付き合いでは、よくあること。目くじらたてるほどのことではない。むし

ろ、殿に、そっと知られぬように謝金を払う方がよほどの苦労じゃったぞ」

と、苦笑いでかわした。

これまでも殿に知られぬように金を作るため、心ならずも塩田業者から金を借りたり、時には裏金を要求した日々があった。

そんな「裏勘定」を、最後の最後になって大野九郎兵衛に見つかって慌てたのは、わずか半年前のことだ。が、今では、なにか遠い昔のような気がする。

しかし、この塩田業者への裏金要求の報いが、瑤泉院の貸金の回収率の悪さにつながっているのである。

なんとも内心忸怩たる思いであった。

内蔵助と安兵衛の吉良邸望見の会話と感想は、この程度で終わっている。

だが、吉良邸については、二人の会話を離れて、もうすこし敷衍させておく必要があろう。

上野介は、三年前、近隣の火事の類焼で鍛冶橋屋敷（現在の中央郵便局付近）を失い、ここ呉服橋に移転してきたのである。

あちらも一等地だったが、こちらも大手門前の通り沿いの、まさるとも劣らぬ一等

地（現在の東京駅日本橋口付近に当たる）である。

敷地面積は約五千坪。近隣には大名の華麗な上屋敷が立ち並んでいる。

上野介は、隣近所との均衡上、

（いっそ新築するなら、近所をあっと驚かせるような建物に……）

と、思ったのであろう。

妻富子の実家上杉家に無心して、二万五千五百両という大借金（現在価値で二十五億から三十億円）をして、分不相応な家を建てた。

上杉家としては、主君の急死で相続人の空白を生じた時、嗣子を養子に貰った恩義がある。嫌とは言えなかった。

吉良邸は、建設に凡そ二年を要している。

手間がかかったのは、建築に凝ったこともあるが、資金調達に上杉家の納戸役が、いい顔をしなかったことも絡んでいる。

上杉家は、できるだけ安くあげるために、自領から材木を江戸に運び、冬期の雪の季節で遊んでいた地元の大工・頭領を呼んで建てさせた。

頭のいいやり方だが、そのため江戸の建築関係者は、吉良邸建設で潤うことがなかった。

これも、その後の吉良人気を下げる要因となっている。

綱吉は、刃傷事件後早々の三月二十六日、上野介の「高家肝煎役御免」を機に、吉良屋敷の返上の件を保明と相談した。が、その際は「時期尚早」で保留とした。

今回ようやく、本所・深川への屋敷替えが行われることになったが、それは、お役御免を理由に、「上野介から願い出た」ことになっている。だから建築費の補償などはない。

しかし、上野介の大借金を考えれば、本人から願い出ることはあり得ない。本人は、将軍から棄てられたような、泣くに泣けない気持ちだったろう。

周囲の大名から、いびり出されたというのが真相であろう。

そして、その陰に保明を含む幕閣の煽動と暗躍があった。

上野介のこの申し出を一番喜んだのは、最初に言い出した綱吉だったろう。なによりも物事のけじめを尊ぶ綱吉には、そんな目抜きの場所が、高家肝煎を退いた一老人の敷地になっていることが我慢できなかったのである。

いずれ嗣子義周（十六歳）が吉良家当主になるにせよ、祖父のように肝煎（筆頭）にまで上りつめる資質があるとは限らない。

いずれにしても先の長い話である。ならば今のうちに召し上げておこう……、とい

う訳である。

別に吉良を見棄てたわけではなかった。

ましてや、赤穂浪士に、吉良を討たせ易くするためでもなかった。

翌七日は雨。

次の八日早朝、内蔵助と安兵衛の二人は、吉良屋敷の替え地となった本所・深川の新吉良屋敷に向かった。

長い間、旗本松平登之助の空き屋敷だったという新屋敷は、見るからに貧弱だった。

二人は知らないが、

「いくらなんでも、前・高家肝煎の吉良殿を、そのような江戸のはずれに移すのは如何か」

という声が、幕閣になかったわけではない。

しかし、もっと近い場所に吉良屋敷の候補地を選ぶと、噂を聞きつけた候補地近隣の大名、旗本たちから、一斉に「吉良の受け入れ反対」の陳情が殺到して、収拾がつかなかったのである。

赤穂浪士の襲撃の、とばっちりを受けては、かなわぬということである。

その挙げ句の場所が、本所・深川になったのである。
敷地は、呉服橋屋敷の半分ほど。建屋は七百坪ぐらいあろうか。只、だだっぴろいだけの安普請である。
目下、懸命な改造の最中であった。
しかし、今回は、さらに資金調達に難渋しているらしい。働いている者も、それほど多くなく、威勢のいい大工の掛け声も聞こえなかった。
内蔵助は、安兵衛の顔を見ながら頷いた。
（これなら襲撃は容易）
という暗黙の発信である。
しかし、なお慎重だった。
「屋敷は、まあいいとしても……肝心の、上野介は、今どこにいるのか」
と、訊いた。
「目下は上杉家の上屋敷におるやに聞いておりますが」
安兵衛は、明日にでも吉良を襲撃したいようなことを言っている割には、答えが、あやふやだった。
「それでは、襲撃の場所も日にちも刻限も、はたまた参加する人数も、そして吉良屋

敷に向かう道筋も、なに一つ決まっていないということか」
「すべては、これから決めます」
安兵衛は、むっとした顔で答えた。
なかなか腰を上げなかったくせに、今さら準備が杜撰、などといわれる筋合いはない。
そんな顔付である。
「では、参加する人数ぐらいは決めておろう。ついでに訊くが、江戸入り後も、片岡の顔が見えぬのは、どうしたわけじゃな」
内蔵助は、京在住中からの疑問を投げかけた。
安兵衛は、顔を曇らせて、
「あいつ等とは決別しております」
と、苦々しげに答えた。
「ほう、決別？　それは容易ならぬお言葉じゃな。しかし、わずか十数人が、今から分派行動してどうなる。誰と誰じゃ、勝手な行動をしそうなのは」
「片岡と礒貝の二人。二人は高田郡兵衛を誘って三人だけでも吉良に奇襲をかけると言い張って、我等を困らせております」

安兵衛は、愚痴まじりに、ぽろりと江戸衆の弱みを漏らした。
内蔵助は、さらに追及した。
「郡兵衛か、確か槍の名手だったな」
「さようで」
なにを言われるのかという顔で、安兵衛は答えた。
「槍は、屋内戦では遣えぬ。それを承知でなぜ片岡が郡兵衛を誘うのかの」
「さて、それは……」
安兵衛の顔に狼狽の色が走った。内蔵助の疑問を悟ったのであろう。
「おそらく――」と、一呼吸措いて、内蔵助は追い打ちをかけた。
「白昼、路上で吉良を襲撃するためではないかの。となると、我等の復讐は、ただの暗殺に成り下がってしまうぞ。それも、将軍家の葵御紋のついた駕籠に向かっての奇襲じゃ。場所も江戸城の外濠内となれば――、なおさら我等は、お上に楯突く謀反人になってしまうぞ。それでよいのか、ええ？　安兵衛」
安兵衛は、蒼白の顔で押し黙った。

5

十一月十日昼過ぎ――。

内蔵助は、前川宅に同志を呼集した。

この時、集まったのは、

上方から来た奥野将監、河村伝兵衛、進藤源四郎、原惣右衛門、岡本次郎左衛門、潮田又之丞、中村勘助、大高源五。

以上、内蔵助を含めて九人。

江戸衆は、勝田新左衛門（元禄十四年春、江戸入り）、武林唯七（たけばやしただしち）（中小姓・十五両三人扶持（ぶち））・三十歳。元禄十四年夏、江戸入り）と前江戸藩邸家士・中村清右衛門、そして江戸急進派の奥田、堀部、高田の三士。以上六人。

合計十五名。

数の上では、上方派が江戸派を圧していた。

しかし、九月に先発した原惣右衛門、大高源五が、すでに江戸急進派に洗脳されており、江戸派は実質八人である。

それに、上方派の奥野、河村、岡本、進藤の四人は、沈黙するばかりで、意見らしいものを持たない意志薄弱な人物であった。

結局は、内蔵助一人が江戸と上方の急進派多数と論戦する形になった。

そして、この十日からの江戸会議でも、先頭に立って内蔵助に立ち向かってきたのは、またも安兵衛であった。

（数日前、二人だけで江戸を探索していた時は、あれほど人の意見に耳を傾けたくせに……、味方が大勢になると、この男、また元の木阿弥になるのか）

内蔵助は、半ば呆れ、半ば不思議に思った。

この安兵衛の気持ちの揺れの原因が判ったのは、十日の夜、不毛の議論の末、夕刻散会した後である。

安兵衛の義父堀部弥兵衛（前江戸留守居役、前禄高三百石、隠居料二十石、七十五歳）が、ひょっこりと前川邸に内蔵助を訪ねてきた。

内蔵助と、さしで会いたいというので、自室に招き入れると、開口一番、老人は、難しい顔で、こう切り出してきた。

「ご家老。婿の安兵衛とご一緒に新しい吉良邸をご覧になられたそうな」

「うむ」

「で、如何でござる？」
「如何とは？」
「拙者、目が悪くてよくは判らぬが、安兵衛の話では、着々と砦造りが進んでいると聞いたが」
「砦？　さあ、そうは見えなかったがな」
「それは表向きでござろう。内部でこつこつと進めているに違いない。このまま進めば、あの屋敷は、目指す上野介の所在も判らぬほど複雑に入りくんだ要塞に化すは必定。その完成を見ぬ間に、決行を急がねばなりませぬぞ」
弥兵衛は息巻いた。
「そうとも思えませぬがな」
内蔵助が軽く逃げると、
「ご家老は、のんびり構え過ぎますぞ。まごまごしていると、上野めは米沢に行ってしまい、永久に仇討ちの機会を逸しまするぞ」
と詰問調で、にじり寄ってきた。
「まま、そう焦らずに。上野も、嗣子が若年なれば、手を取って教え込まねばなるまい。なかなか米沢に引っ込むことはできまい。それよりご老体こそ、なにをそのよう

に急がれるのじゃ」
「いや、別に急いでいるわけではないがな、拙者も寄る年波での」
弥兵衛は、ここで初めて欠けた黄色い歯をみせて笑った。
「お幾つになられる」
「恥ずかしながら、七十五歳になり申す。この年齢になると、この冬を越せるかどうかも心許ない。今はただこの世の望みは二つしかござらぬ」
「ほう。そのご年齢で、まだ二つも望みがあるとは羨ましい。何と何でござろうや」
「一つは孫の顔を見ること」
「なるほど」
「ところが婿の安兵衛は酒ばかり呑んだくれて、さっぱり娘を可愛がってくれぬようだ。これに困っている」
老いた父としては孫が抱きたかろう。気持ちは解るが……、こればかりはどうしようもない。
「よく安兵衛に申しておきましょう。酒もほどほどにせいと。で、も一つは」
「殿の仇討ちでござる。この二つだけが老いの楽しみでござれば」
「老いの楽しみ？」

老人の「老いの楽しみ」のために吉良を討つ積もりはない。とんでもない話だが、だからといって、大先輩を叱りつけるわけにもいかない。

「なるほど解り申した。せいぜい急ぐようにいたしましょう」

と、言葉を濁して、弥兵衛には、お引き取り願った。

この会談で、安兵衛が、討入りを急ぐ背景がわかった。

（そうか、親孝行のために急ぎたいのか）

そうと知ると、安兵衛の心の底が見えてきて、かえって腹が据わった。

翌十一日も、急進派は、吉良邸の早期襲撃を主張して、内蔵助の説得に応じなかった。

疲れ果てたのか、最後には、

「ともかく討入ってしまえばなんとかなる」

そんな暴論まで叫ぶ始末に、内蔵助までが、くさくさしたが、それでもじっと耐え続けた。

（数日中に瑤泉院さまから、なんらかのお返事があるはず。すべてはそこからだ――）

そして、待望の自筆の手紙が来たのは十二日夕刻である。

6

指定された訪問の日時は、十四日昼八つ（午後二時）であった。

内蔵助は、あらかじめ江戸に送っておいた近衛家紋服を喜兵衛（三村次郎左衛門）に持たせ、昼前には「日本橋に土産を買いに参る」と偽って前川邸を抜け出た。

瑤泉院さまにお返しする持参金の回収金の内六百両を為替に組み、残りを現金で自分の懐に秘めていた。

江戸急進派も、討議に倦んでいたのか、特に内蔵助の外出に反対しなかった。もっとも、彼らが知ったら、「我々もご一緒する」と、煩く纏わりついて離れなかったろう。

三田からの道筋は、喜兵衛が近道をあらかじめ調べてくれていた。

赤羽橋を過ぎ、背後を気にしながら、付近の茶屋でゆっくり休みをとり、持参した衣服に着替えた。次の市兵衛町周辺から赤坂南部坂一帯は、当時、江戸の喧噪から遠

く、人気のない大名下屋敷街である。赤坂今井の三次浅野家下屋敷は、旧赤穂浅野家下屋敷の脇を抜けると、すぐその先にあった。

内蔵助が、ここでは近衛家用人・池田久右衛門を名乗り、門番に刺を通じると、家司が飛び出してきて丁重に案内してくれた。そのまま奥の小書院に通されたのは、近衛家用人の肩書きの効果であろう。

小書院で待つことしばし、やがて瑶泉院さまが、中臈、侍女数人を引き連れて現れた。

平伏してご挨拶申し上げ、やおら顔を上げる。

と、瑶泉院さまが、かすかに頷いておられる。

（間違いなく手紙の隠し文字を読んでおられる顔だ）と思ったが、そのお口から出たのは、意外にも、

「池田さま、お待ち申し上げておりました。お久しゅうにございまするな。たしか、わらわが輿入れの時、お目にかかって以来では……」

という他人行儀な話だった。

そんな古いことなら、此処にいる三次衆に聞かれても、誰も知らない——そんなお

気持ちなのであろう。

察した内蔵助は、即席で話を合わせた。

「これはこれは、さようなお若い頃のことを、ようお憶えでおられましたな。拙者、確かに、阿久里さまのお輿入れの宴に、近衛卿とご一緒にお招き戴きました。あのとき以来でございます。月日の経つのは早いもの。こちらこそ、ほんにお久しゅうございます。おくればせながら、瑤泉院さまには、ご機嫌麗しく拝察し恐悦至極に存じます」

すると、瑤泉院は、にっこり笑って軽ろやかに話を返してきた。

「お陰をもちましてなんとか過ごさせていただいております。関白さまにも、恙なくお過ごしであらっしゃりましょうな」と。

内蔵助は、さらに嘘話の波乗りをした。

「はい。お陰で、お風邪一つ引かず政務に励んでおられます。京の出がけには、瑤泉院さまに『ゆるらかにお過ごしなされますように』とのお言葉を頂戴して参りました」

すこし尻がむずがゆくなるほど、ぴったり話の呼吸が合うのがおかしかった。

「有り難きお心遣い。つくづくと（深く）お礼申し上げます。で、お手紙によれば、

池田さまは、たしか二日の江戸入りとか」
「はい」
「毎日なにかとお忙しゅう御座いましょう。今日のところは、お昼餉は、すでにおすませでございましょうか」
「はい、途中の茶屋で済ませました」
「それは惜しゅう御座いましたな。では、あちらの茶室にて、粗茶など進ぜたいと存じまするが、如何でございましょう」
「喜んで頂戴仕ります」
茶室のような密室なら率直に話ができる。
望むところであった。
「では積もる昔話もあるゆえ、当時を知る清岡、そなたが茶席の次客となってたもれ。後の者はさがってよい」
そう言われると、瑤泉院さまは、後をも見ずにすっと立たれた。

内蔵助は、中臈の清岡に従って庭に出た。
顔なじみだが、余計なことは一切言わない口の堅い老女である。

中庭を横切ると、その北隅に、丸太造りに連子窓を配した茅葺屋根のささやかな草庵があった。

坪の内（内庭）に北向きに構えた縁側で、内蔵助は、清岡に大小（刀）を預け、貴人口（障子を立てた普通の上がり口）から席入りした。

不思議なことに、清岡は、この後、ついて来る気配がなかった。最初から瑤泉院さまと二人だけの茶席にする積もりだったようだ。

茶室は二畳敷で隅炉を切り、正面に床が設けられていた。

内蔵助は、作法どおり、まず正面の床を拝見した。

その掛け物に思わず息を呑んだ。

唐絵でも墨跡でもなかった。紹鷗好みの「歌切」（名歌・名筆を一首または数首、貼り付けた軸・手鑑のこと）であった。恐らくご自身で書かれたものであろう。筆蹟も美しい女文字で、

降りやめば
　あとだに見えぬうたかたの
消えてはかなき

世をたのむかな

とある。

「うたかた」は、消えるにかかる枕詞。

後撰和歌集の有名な恋歌の一節で、遊び好きな内蔵助は、よく知っている。

が、ここでは、

「消えるような心細い想いをしております。よろしくお頼み申します」

という吉良討ちの訴えであることは明白である。

内蔵助は、思わず唸った。

正直のところ、ここまで吉良に対する堅い決意が瑤泉院さまにあるとは思わなかった。

しかし、逆に考えれば、この決意の裏に、夫内匠頭が、違法を承知で吉良に斬りつけた理由がひそんでいる気がした。

（そうでなければ、武家の娘とはいえ、女だてらに、これほど堅いご決意をもたれるわけがないではないか）

自問自答の末、頷いた内蔵助は、思い直して正客の座に座り、薄暗い室内で亭主役

の瑤泉院さまの出を待った。

（今日こそ殿が吉良に斬りつけた原因が瑤泉院さまのお口から語られるのだ）

胸が期待でふくらんだ。

やがて茶道口の敷居が一尺ほど開き、水指を建付けに置き、襖を開けて畳に両指をついて一礼した瑤泉院さま。

さきほどと違って全くの無表情に見えた。

しずしずと茶室の亭主の座に座られると、型どおりに水指の前に茶碗と茶器を置き、左手に柄杓を握った。

と、その時である。

柄杓の節の下を持ち、右手を添えて持ち直して、じっと柄杓の合を鏡に見立てる「鏡柄杓の作法」のところで、瑤泉院さまの動きが、はた、と止まった。続いて、くっ、くっ、くっ、という小鳥の鳴くような声。

「なに？」

内蔵助は、思わず駆け寄りたい衝動を抑え、逆の貴人口の方へと目をそらした。

瑤泉院さまは、柄杓に、ご自分の顔を映す姿勢のまま、泣いておられる。それは、臣下として、決して見てはいけない禁断の光景であった。

しかし、瑤泉院さまの異常は一瞬で終わったようだ。
内蔵助が、再び視線を戻した時、瑤泉院さまは何事もなかったように、置き合わせた茶碗を手前に引き寄せ、帛紗で茶器を拭き清めていた。
後は型どおりの手順で進んだ。
しかし、元の阿久里さまの頃から、点茶を正客一人で頂戴するのは初めてである。
年甲斐もなく緊張していたのであろう。
内蔵助は、菓子を戴き、差し出された茶碗を、そっとにじり寄って引き、右手で左膝に置くと、次客もいないのに、思わず、行のおじぎ（お先に、の会釈）をしてしまった。
一人苦笑して、そっと茶碗を膝前真ん中に置き直し「お点前ちょうだい仕る」と、亭主の瑤泉院さまに挨拶（真のおじぎ）した。
茶の作法では、この内蔵助の挨拶を待って、更に瑤泉院さまが両手をついて挨拶（行のおじぎ）することになっている。
この動作が、内蔵助のまごつきで、瑤泉院さまの一瞬の待ちとなった。
この時の瑤泉院さまの（おやっ）という表情で、図らずも視線が合った。

瑤泉院さまの目が、さきほどの涙で潤んで見えた。

（やはり――）

と、思った。

次に内蔵助が茶を飲み、最後吸い切りをして、飲み口を指先で清め、その指先を懐紙で拭く。

茶碗の正面を正して、出された位置に戻す間も、瑤泉院さまの潤んだ目は、じっと内蔵助に注がれたままであった。

（なにか言われたいことがあるに違いない）

と、内蔵助は悟った。

それを引き出すのは、男の役目である。

内蔵助は、ためらうことなく茶碗を再び手に取ると、ゆっくり回しながら言った。

「この黒刷毛の御所丸茶碗は、亡き殿のご愛用の一つでございましたな」

御所丸茶碗は、古田織部好みの高麗茶碗である。一際目立って不均衡な姿をしている。師利休の絶対の美意識とは逆に、いわゆる「ゆがみ」の中に茶の湯の美を求めた織部の反骨を、内匠頭は、若い頃から好んだ。

恐らく、偉すぎた祖父長直への競争心が、利休を超えようとした織部への傾倒とな

ったのかもしれない。そう思うと、哀れであった。

瑤泉院さまは、ここでしみじみとした声で答えられた。

「はい。茶碗も風炉も棗も、そして柄杓も、すべて亡き殿のご愛用の品でございました」

「そうでしたか」

内蔵助は、茶碗をそっと置いた。

「あの事件以来、一切、ご愛用の茶器を封印したまま使わずに参りました。が、今日は、国元からのせっかくの大石殿のご来駕。こんな時でもなければ、機会は二度となかろうと、思いきって使わせていただきました。その懐かしさのあまり、さきほどは、お点前の途中で、お恥ずかしき所作をお見せしました。申し訳ありませぬ」

最後は、瑤泉院さまの声は、消え入るようで音にならなかった。

「さてさて、なんのことか一向に。むしろ拙者こそ、次客もいないのに、行のおじぎなどして、作法をとちりましてな」

と、内蔵助は、とぼけた。

「では、お相子ということに」

「そういうことになりますかな」

堅かった座が、ここですこし和らいだ。

内蔵助は、この機会を逃さなかった。

「それより、拙者の驚きは、あの床に掲げられた歌切。拝見して、院さまのお覚悟のほど、つくづく感じ入りました。正直のところ、そこまでのお覚悟とは存ぜず、拙者、国家老の要職にありながら、これまで事件に対して、鈍牛の如き対応を続けて参りました。お詫びせねばならぬは、こちらの方でございます」

「なんの、その前に、そなたらに詫びねばならぬは、あるいは、亡き殿の方かもしれませぬ」

「えっ、それはまた異な事を」

「いえ、実家には、こんこんと、今も意見されております。たとえ夫の内匠頭、吉良に耐え難き言葉を浴びせられたとは申せ、それを耐え忍んでこその名君でございましたろうにと……」

「さて、その耐え難き言葉を浴びせられたとは？　いつ、どこで、でござろう。我等一向に存じませぬが……」

「えっ」

今度は、驚くのは瑤泉院さまであった。

「そなたらは、なにも知らぬのかえ」
　のど笛が張り裂けるような、お声であった。
「はい、一向に」
「片岡らの側役(そばやく)たちも、殿のご無念のうちを聞いてはおらぬのかえ」
「はい。片岡からは、赤穂来訪の折、とくと膝をまじえて報告を受けました。が、ご無念の様子こそ知れ、ご無念の内容には聞き及んでおらぬ様子でございました。もちろん拙者も存じませぬ。恐らく、殿お一人が、胸三寸におしまいになられていたのでございましょう。あるいは、院さまにだけは、生前、なにかお漏らしになられていたのではござりませぬか」
「はっきりとは存じませぬ。ただ、弥生(やよい)の初め、今日から伝奏屋敷(てんそうやしき)に詰めるという日の朝でございましたな。見送りするわらわに、呟(つぶや)くように、こう申されました」
「なんと」
　それこそ全身を耳にしたい気持ちで、不躾(ぶしつけ)を顧みず、瑤泉院さまのお顔をまじまじと見つめた。
「吉良が憎い、憎うてならぬ。あやつめに、昨日、『これは、田舎大名の口をはさむことではない』と言われたと」

「田舎大名の口をはさむことではない！　そう殿が、吉良に言われたのですか」
「はい」
事実なら、武家の長に対する最大の侮蔑である。これだけでも万死に値する。
しかし、なぜ吉良がそのような暴言を吐いたのか。さらに、それが知りたかった。
「で、殿がお口をはさまれようとした『これ』とは、なんでございましょうな」
だが――、女の身空に、それ以上は無理だったようだ。
瑤泉院さまは、力なく答えた。
「そこまでは存じませぬ。殿は、そう仰せられた後、突然、このようにお頭を抱えられ、お手までぶるぶると震えなされて……」
と、ご自分も同じように、頭を抱え、身を震わせて見せるだけであった。
痞の発作は明らかだった。
（そうか……）
内蔵助は、じっと考え込んだ。持病の痞は、吉良の、けしからぬ言葉に誘発されたことが瑤泉院さまのお言葉で明らかになった。
（痞は原因ではなく結果）
これだけでも、十分吉良を討つ理由としては成り立つ。だが、敢えて言えば、殿の

言われた、「これ」とは、何であろう。

それがどうしても知りたい。

今年の朝使下向で、朝幕間に、なにか懸案事項でもあったのか。それを巡って、吉良と亡君との間に諍いがあったのかもしれない。

しかし、これは幕府に問い質すわけにはいかない。とすれば、反対側の朝廷しか聞ける先はない。

内蔵助の頭に、ちらりと、近衛家用人・進藤筑後守の姿が浮かんだ。内蔵助に輪をかけた遊び人である。

（急ぎ京に戻ってあの男と一席持たねば）

内蔵助は決心した。

こうして、亡君の刃傷沙汰の原因の一端がようやく判明した。

内蔵助は、茶室の正客の座を立ち、末席近くに座り直すと、改めて平伏して、瑤泉院さまにお誓い申し上げた。

「必ず、必ず、亡君の恨み晴らしてご覧にいれまする。それまでは、どうか、この内蔵助を信じてご辛抱のほどを――」

時に、元禄十四年十一月十四日夕七つ（午後四時）のことであった。
瑤泉院さまは、これに応えて、内蔵助が持参した瑤泉院さまの持参金の回収金一切を、――金額不問のまま――吉良討ちの費用にと、内蔵助に預けた。これは、罪を喰らわば諸共に、ということである。

帰路、門外は、昼の上天気から一転、筑波ならい（江戸の東北の風）の激しく吹く荒れ模様の天気になっていた。
だが、内蔵助の心は晴れていた。
懐も暖かい。これだけあれば、江戸で武器を闇で調達することもできよう。存分に戦える。
「では、戻るとしようか」
内蔵助は、浮き浮きして喜兵衛に言った。
喜兵衛には、なぜ内蔵助が浮き浮きするのか解しかねたようだ。
が、内蔵助は、一切説明しなかった。
前川邸に戻った内蔵助は、そっと安兵衛一人を呼ぶと、こう告げた。
「吉良討ちのこと、そなたらのご意見に従うことに決めた。ただし、時期と具体的な

手筈（てはず）については、改めて、ま一度、京で話し合いたい。どうも江戸は、密談にはふさわしくないのでな」

前川屋敷の者が、ちらちら見え隠れする場所が、内蔵助には、なんとなく気になって仕方がなかったのである。

第九章　桂昌院昇叙　元禄十四年冬

1

この年の秋から冬にかけての保明は、公私に亘って多忙であった。

十月二十一日。

まず、東叡山（寛永寺）門跡公弁法親王の来訪を受けた。五年ぶりである。

公弁法親王は、第百十一代後西院第六皇子で、江戸に在住する皇族の頂点に立つお方である。

それぱかりでない。

三山（東叡山、比叡山、日光山）を管領する天台宗の総帥でもあったから、凌雲院大僧正、覚王院僧正、喜多院僧都、円覚院僧都、住心院僧都、願王院僧都など、ぞろぞろ付いてくる高僧は数限りない。

その一人一人の接待、贈り物に、保明は、誠心誠意努めている。

招宴のきめ細かい配慮も忘れていない。

例えば――。

この日の余興には、将軍綱吉の好む能の演目はない。前回（元禄九年六月）は、『鞍馬天狗』、『錦戸』といった素人解りのいい二つの能を入れた。

だが、今回、音曲は、最初から最後まで猿楽で通している。

高僧たちは、日頃の〈抹香臭い仕事〉からの解放感を求めて来訪するのだから、しかつめらしい能より、面白おかしい猿楽を好んだのである。

さらに馬場での馬揃え、弓場での弓術の観賞まで、保明の歓待は、徹底して来客のための「気散じ」が中心となっている。

その心憎い饗応の仔細は、側室正親町町子の『松蔭日記』に、流麗な文章となって遺されている。

十一月十五日。

嗣子安貞の元服。

この日は、家臣の萩沢勝久が理髪役を務め、平岡宇右衛門が介添えした。式の後、安貞を伴って昼四つ半（午前十時半）に登城し、元服の儀を将軍に報告。

将軍からは、手ずから来国俊の刀一腰、相州広光の脇差などを賜っている。

嗣子安貞の母は保明の最初の側室・染子。上総国一袋村の浪士飯塚正次の三女である。

保明が、一袋村の佐瀬氏に再婚して住んでいた生母を引き取った際（当時保明二十四歳）、付いてきた侍女であった。

美貌もさることながら、無類の学才の血統だったようである。後に保明が参禅する際には、常に傍らにあって、その語録の覚書を記録し、自ら編集して『故紙録』（上下巻）と名付けて本にまとめるほどの学識があった。他に歌集も多数あったようだが、こちらは、残念ながら後の火災でほとんど焼失し、ごくわずかしか残っていない。

なお、この染子の子・安貞について一言触れると、安貞は綱吉のご落胤という俗説

がある。

しかし、綱吉が最初に柳沢邸に御成りしたのは元禄四年三月。この時、安貞はすでに五歳（貞享四年九月生まれ）である。

保明が自邸に綱吉を引き入れ、側室の染子を差し出したという「柳沢佞臣説」は、年代的に合わない。

この他、綱吉が、お手つきで妊んだままの染子を佞臣・柳沢に下げ渡したという俗説もある。

これも、安貞誕生の時、すでに綱吉は、嗣子徳松を失って四年。その後、どうしても男子に恵まれなかったという「不運な事情」。

さらには、「生類憐れみの令」を乱発してまで男子の跡継ぎを欲しがった綱吉の「せっぱ詰まった気持ち」。

これらを総合して考えれば、妊んだままの染子を、おいそれと手放すことはあり得ない。どんな理屈をつけてでも手許に置いた筈である。

いずれも保明の異例の出世に対する「嫉妬は正義の仮面をかぶる」類の妄説である。

大石の動向報告は、こうした公私に多忙な行事の間を縫うようにして、保明の元に

もたらされていた。

堀田将監（ほったしょうげん）の第一報は、十一月初旬。

「我等総勢三十余人。見え隠れに東海道を護衛し仕（つかまつ）りて十日余。大石殿、霜月二日、江戸・前川忠太夫屋敷に、事無くご到着致し居（お）り候（そうろう）」

第二報は同月中旬。

「赤穂浪士、十日より前川邸にて連日会合致しおり候。大石殿、お一人にて、堀部安兵衛ら江戸衆を相手として激論。お疲れの様子に御座候」

この第二報は、前川忠太夫から将監を経ての特別報告である。

忠太夫は、若い頃、黒鍬（くろくわ）組の忍びとして活躍し、その功で小頭にのし上がったやり手であった。

それを知らぬは赤穂浅野家と浪士ばかり。

こうして、大石始め赤穂浪士の行動も会話も、保明には、すべて手に取るように伝わっていたのである。

第三報は十一月十四日夜。

保明が明日に控えた嗣子安貞の元服祝いの準備に忙殺されている最中であった。

将監自らやってきた。

将監が直接来るのは、事がそれだけ重大ということであろう。急報を受けて、保明は、仕事を抜け出して自邸の小書院に出向いた。

控えていた将監は、胸を張って報告した。

「大石殿が今日、昼餉後に、瑤泉院をご訪問されましてござる」

「ほう、遂に二人は接触したか」

やはり予想通りだった。

「御意。それも三次・浅野家下屋敷の茶室で、お二人だけでのご面談となり申しました」

「それでは、二人の話は、聞き取りが難しかったのではないか」

ちょっと嫌な気がした。

自分の別邸である六義園の四阿は、鼠一匹入る隙もない構造である。

だが、それも杞憂だった。

将監は、誇らしげに言った。

「なんのなんの、事前に二人の会合は茶室と睨みました故……盗み聞きのため錐で小さな穴をあけて、待ちました。その上、万遺漏なきを期して、とびきり耳のよい女忍びを二人、天井裏と床下に配しました。二人の話は、我等、一語も漏らすことなく、

しかと聞き取りましてござる」
「でかした、では聞こう」
「それでは――」
と、将監は、盗み聞きさせた瑶泉院と内蔵助の茶室でのやりとりの全容を語り始めたのである。
驚くべきその内容に、保明は唸った。
「……ということは、すでに十日も前から、浅野は吉良を憎んでいたのか」
知らなかった。
浅野の乱心は、痞が原因ではなかった。
怒りに誘発された結果であった。
まして、あの日の登営（登城）時刻の手違いなどでもなかったのである。
「それで？　浅野が吉良を憎む原因は何じゃ」
これが核心である。
思わず手の握りに力がこもった。
「その点は、瑶泉院もはっきりとは解らぬようでござる。しかし、どうやら、浅野殿は、吉良邸に饗応の手順作法を学びに行った折に、なにか吉良殿と言い争いをされた

らしゅうござりますな」

「争う？　ほう、なにをであろう」

「なにかは、よう解りませぬ。が、ともかく、吉良に、『これは、田舎大名の口をはさむことではない』と、きつくたしなめられた。それを恨み、深く根に持っての怒りのようで……」

「なんだと！」

保明は、一瞬、血の気が失せたような衝撃を覚えた。

（あれだ！　従一位の件だ）

瞬時にそう思った。途端に、吉良に対する言いようのない怒りがこみ上げてきた。

おそらく吉良は、四年越しの「桂一計画」の自分の大役を、浅野に誇らしげに漏らしたのであろう。「田舎大名云々」は、それに反発する浅野に対して、吉良が放った「軽率な捨て台詞」ではなかったか。

あるいは――。

浅野内匠頭が、事前に、幕府の従一位工作の動きを察知して、吉良に警告したのかもしれない。

もしかすると、朝使の先発組が、饗応役に選ばれた浅野家に挨拶に行き、そこで、

「桂昌院に従一位を、と要求する吉良に、ほとほと困惑いたしておる」とでも告げ口したのか。

浅野家の勤王の志を見込んで「お口添え願いたい」とまで言ったのかもしれない。

こちらの可能性が高い。

あの日、朝使が、予定時刻を勝手に繰り上げたのも、その「告げ口の効果」を見定めたかったからではないか。

そう考えると、妙に辻褄が合ってくる。

だが、そんな詮索より当面の課題が先である。

思い直した保明は、

「で、それを聞いて、大石はどうした」

と、身を乗り出した。

「大石は……」

将監は、一呼吸措き、思わせぶりに、もう一度胸を反らせた。

「瑤泉院から亡君の心情を聞くと、その場で、涙ながらに、吉良への復讐を誓ったようでござる」

「ほう、あの鈍牛大石が涙したか……」

皮肉の積もりで言った。
だが、その心と裏腹に、
（さもあろう。それでこそ武士よ）
という、奇妙な共感もまた禁じ得なかった。
幕閣としてはあるまじきこと。
慌てて首を横に振ると、
「ということは、大石が、いよいよ本気になったということじゃな。捨ててはおけぬな」
顎を天井に向けて、ごまかした。
将監は、そんな保明の心の揺らぎに気づかなかったようだ。さらに深刻な様子で、
「御意。そして瑤泉院は、この大石以下の決起に感動したのでござろう。ご自分の持参金で、此度、大石が回収してきたもののすべてを、決起の費用に、と提供なされてござる」
と、保明を不安げに見上げた。
「ほう、瑤泉院が大石に資金援助を申し入れたというのか。で、いかほどじゃ、それは。何千両にもなるのか」

なにしろ内福だった浅野家のことだ。その持参金で赤穂方の吉良討ちの兵力が、想定外に大きくなるかもしれない。

幕府としても対応を考えざるをえない。

「いえ、詳細は未確認でござるが、せいぜいが五百から六百両程度と存じますが……」

「思うだけでは心許ない。一刻も早く調べて正確に報告せよ。まさかとは思うが、その金を使って、大石に浪人まで大量動員されては、慶安事件（由井正雪の反乱）の二の舞じゃでな」

「承知仕りました、早速に。で、他にはなにか？　いかがされますか、瑤泉院の方は……」

大石を含め、瑤泉院も、共謀と連座の罪で今からでも捕縛できる。そう言いたいのであろう。

（だが……）

一瞬、保明は、事が表沙汰になった時のことを考えた。下手すると、事件の追及から、桂昌院の従一位内定に絡む「自分の仕掛けた圧力問題」が暴露され、それによって、内定が影響を受けるかもしれない――。それだけは阻止したい。

「しばらくは両人の動き、厳重に監視するだけでよかろう」
保明は、苦し紛れに言った。
「しばらくと申されますと、いつ頃までござろうや。拙者、配置人員の計画のこともありますれば――」
と、将監が食い下がった。
「それもそうだな」
しばし考えた末、保明は答えた。
「来年の弥生半ばまでと心得ておけ」
桂昌院に従一位の昇叙（昇格）の正式通達が三月中旬の朝使下向によってもたらされれば、後はどうなっても構わない。
だが、それまでは甲府宰相にしても、この大石にしても、江戸で事を起こしてもらいたくない。
そんな気持ちである。
「心得ましてござる」
将監は、平伏した。
「ということで、これからの大石の行動については、極力注意せねばならぬ。なにか

その後の動きを摑んでいるか」

「はい。（前川）忠太夫からのその後の報告では、大石は、堀部との話し合いを打ち切り、帰国の途につくようでござる。そして江戸衆も、その後を追うように、上方に参るらしゅうございますな」

「舞台は江戸から京へ動くか。大石は、なかなか慎重だな。となれば、ここしばらくは江戸での暴発はないな」

「暴走気味の片岡ら一部は孤立しておりますれば、動こうにも動けませぬ。しかし師走（十二月）の浅野の命日は、注意が肝要と存じますが」

「そうかな。吉良の新邸は、まだ、そのころもできあがるまい。上杉家は手許不如意だからな。その間、吉良は子息の居る上杉邸に居候することになろう。大石は上杉家を相手に殴り込むような愚か者ではないわ」

「それもそうでございますな」

「だが、問題はそれからだな。赤穂浪士はなゐ（地震）と同じよ」

「なゐでござるか」

将監は怪訝な顔をした。

「さよう。なゐよ。いつか必ず起こる。だが、いつだかはわからない。それゆえ、そ

なたの当面の仕事は、来年の弥生半ばまでは、赤穂浪士に決して騒動を起こさせないこと。それだけを考えよ。その後のことは追って沙汰しよう」

「心得ました」

「ご苦労だった。なお、余計な出費があれば、（佐瀬）三太夫に言え。この際だ、金に糸目は付けぬゆえな」

慰労の言葉も忘れなかった。

2

この年十一月の掉尾を飾ったのは、二十六日の将軍綱吉の「御成り」である。

今回は格別な意味がある。

桂昌院の従一位昇叙への第一回の功労賞が与えられたのである。

側室の町子が遺した『松蔭日記』に、その喜びの記述が残っている。

御所〔綱吉公〕には、午前十時頃、御成り遊ばされた。いつもの人々を伴ってお出迎え申し上げる。まことに厳かである。〔保明さまが〕先導申し上げて中へお入

り遊ばされた。

（十二、こだかき松・三段）

さて、御座（おまし）にお着きになられ、いつもの祝い言が終わると、あるじの保明さまをお召しなされ、松平の御称号と諱（いみな）の一字〔吉の字〕を下さって、「一族のごとくに思う」とのお言葉を給わられた。

次に太郎君〔安貞〕を呼び寄せ、同じく〔松平の〕称号と諱の一字をくださる。さて四郎君、五郎君も呼んで、称号をくださり、学問の弟子にまでしてくだされた。

この功労賞によって、以後、保明は、柳沢（公式文書では松平）吉保（よしやす）、嗣子安貞は、柳沢（同松平）吉里（よしさと）となるのである。この物語の記述も、以降はこれに従うことにしたい。

なお、四郎と五郎は町子の子である。当時、八歳と六歳であった。

ところで――。

綱吉からの御下賜品、また保明改め吉保からの贈答品の交換行事の記録が述べられた後、町子の『松蔭日記』には、つぎのような奇妙な記述がある。

こうして、漢文講釈をなされることも、例の通りに済んだ。当方の預かりで、親しく思っていられる隠岐守の家は、当家の内々から通い路が続いていたのを、〔綱吉公は〕今日も徒歩でお渡りになられた。あちらでも饗応など様々である。お帰り遊ばされて、こちらでもまた御膳を差し上げる。

（同・四段）

ここに登場する、綱吉が「今日も」歩いて渡ったという「隠岐守の家」の主とは、そもいかなる人物か。

水野隠岐守勝長。実在の人物である。

備後福山藩の初代藩主、水野勝成の曾孫。分家の水野勝直の長男として延宝七年（一六七九）に生まれている。この時二十三歳。

福山藩の第五代藩主、水野勝岑が早世し、世継ぎがなく改易となったが、初代勝成の旧勲を鑑みた幕府の計らいで名跡が残されることになり、曾孫の勝長が勝岑の養子

となって水野家を継いだ。ただし領地は能登国西谷（のとのくにしや）、一万石だった。元禄（げんろく）十一年のことである。

元禄十三年、下総結城（しもうさゆうき）藩主となるが、その頃、命により柳沢保明邸内に住まうようになる。翌十四年、三千石加増。

以上が、隠岐守の横顔である。

だが、なぜそんな屋敷に、綱吉は出向いたのか。そこでいったい何をして過ごしたのか。

そこには、だれにも明かされない、綱吉と吉保だけの秘密があった。

この問題は後に譲り、綱吉が、柳沢邸に戻った後のことから、先に述べておこう。

町子の言葉（原文）を借りれば――「御遊など変らず今めかしうて日も暮れぬ」とあり、続いて、「初夜（そや）過ぐるほどにぞ帰らせ給」とある。つまり午後八時過ぎに城に戻られたというのである。

では、日暮れから午後八時までは、なにをしていたのか。

食事ではない。食事は十分尽くしていた。

実は、この間、吉保は綱吉と二人だけの静かな面談の時を持っていたのであった。

3

さて、この二人の面談の情景である。
場所は柳沢邸の奥まった小書院であろう。
吉保の側室始め侍女たちすべてが退けられた密室であった。
ここでは、堅苦しい主従間の礼儀作法は一切抜きという約束になっていた。
二人の前に置かれているのは、大きな丹波焼きの水指（みずさし）、わずか一つ。
酒を嗜（たしな）まない二人は、その水指の水を、酒の代わりに、代わるがわる飲み、分け隔てなく談じたのである。

「弥太郎よ」
と、綱吉は、盃（さかずき）を手に親しげに言った。
「はい」
「今日は、新しい姫と、すこし過ごしすぎたようだ」
綱吉は、ここでは隠し立てしない。

言い終わると、悪い悪戯をした時の子供のように、首をすくめた。

そう言われれば目つきが赤い。帰還した綱吉の着物は、ひどく皺が目立った。

実は、隠岐守の屋敷には、もう一つ別棟があった。そこに、綱吉は、大奥から事前に連れ出してきた一人の女を待たせていたのである。

綱吉は「姫」といったが、相手は「お末」と呼ばれ、綱吉の朝湯にかしずく賤女である。

綱吉は、毎朝、朝湯で身体を拭かせながら、好きな能の一節を口ずさむ。

「そちらも謡え」

と、命じた時、真っ先に、小さく美しい声で、懸命に和してくれた「お末」の一人。

それが今日の相手であった。

吉保の口ききで、大奥につかえた川越在の貧農の子である。まだ垢抜けない田舎娘だが、たしかに愛くるしい顔で、その、ころころした肢体は、中老の綱吉の愛玩物にふさわしい、美女の原石であった。

――湯を浴びせても、ぴちぴちした躰から湯が飛び跳ねてのう、拭う必要もないほどよ。

とは、綱吉が不用意にもらした、文字通りの「とんだのろけ」である。

吉保が、こうした女を預かるのは、「御成り」の日程が決まって五日ほど前からである。

その頃になると、女は、「宿下がり」と称して城を出る。そして道を迂回して、吉保の屋敷に駆け込み、隠岐守の屋敷で、上さまの御成りを待つのである。

今の女は、そんな「お末」の三人目であった。

隠岐守の屋敷が最近決まるまでは、吉保の広大な屋敷に置かれていた小姓屋敷――それは一説には六十以上あった――の一つに隠し置いた。

が、それでは、なにかと目立つために、二年前に、吉保の屋敷から歩いて行ける距離に隠岐守の屋敷を新しく造り、これを綱吉の〈忍び屋敷〉としたのである。

隠岐守なら、綱吉公を「隠し守る」にふさわしかろう――という洒落があったわけではない。

が、うってつけの口の堅い人物だった。

若い隠岐守としても、綱吉に「男の隠れ家」を提供するというのは、決して悪い話ではない。最近は、御成りの時は、隠岐守の方から進んで柳沢邸の外で一日を過ごすようになっていた。

もちろん、「お末」といえど、その身元について、吉保は、将監の手で徹底して調

査させている。

その上で、吉保は、この「お末」に、女の基本の嗜みを仕込む教育係として染子を起用したのである。

学才だけでなく、男の性の機微も熟知する女性であったから、うってつけの役であった。

これが、吉保が側室の染子を綱吉に提供したという汚名を招く原因となった。

世間の噂はうるさい。

だが、吉保も染子も別にそれを意に介さなかった。

染子は、「むしろ光栄にございまする。さしずめ、わらわは紫式部さまと同じ役割を果たすわけでございますね」と笑う度量を持っていた。

式部は、藤原道長の要請で、一条天皇の中宮となった道長の娘・彰子の女房兼家庭教師となった。わずか十二歳で「女の勤め」のなんたるかを知らなかった娘の性の教育係である。

これが成功して、中宮は子をなした。

お陰で式部もトントン拍子に出世し、後世に残る『源氏物語』の作者になったのである。

一方、吉保は吉保で、

「余一人の汚名で、綱吉公の〈御内証慰み（秘密の戯れ）〉の噂をかばえるならば……」

と、気にも掛けなかった。

実際、綱吉は、吉保の側室の染子にも町子にも、女性としての関心を抱かなかった。

「才女は鼻につく。上姪も、もったいぶるだけで好かぬ。女は丈夫で優しく、ひたすら可愛ゆければ、それでよい。出自は問わぬ」

が、持論である。

それは、当然に、綱吉を巡るこれまでの女たちへの不満の表れでもあった。

ちなみに綱吉の公式の女たちは――、

綱吉の正室・信子　鷹司前左大臣教平の娘

側室、大典侍、北之丸殿　清閑寺権中納言熙房の娘

同、新典侍、御部屋様　日野大納言弘資の養女

いずれも権高な由緒ある出自の女である。

唯一の例外が、

同、於伝、五之丸殿　小谷権兵衛（堀田将監）の娘

であった。

綱吉は、身分の賤しい黒鍬組の娘のお伝だけを熱愛した。そして二人の子をなした。

「その点でも余は、曾祖父（家康）似の〈下姪好み〉なのかもしらぬ。因果な、というより、むしろ光栄というべきかな」

と、綱吉は、妙なことで肩をそびやかし、吉保を苦笑いさせたものである。

大奥という、人も羨むような「女の園」に恵まれながら、なぜ、外に男の「はけ口」を求めたのか。

これにも、綱吉は、吉保と二人だけの時に、明快に答えている。

「公方さまなどと世間は言うがな、為政者としては面白い。が、男としては、これほど惨めな立場はないのだ。なってみて余は初めて判った」

「大奥？　ふん、あれは、余の子種だけを欲しがるメスどもの群れじゃ。野獣の檻だ。好かぬ」

もう少し性の機微に触れるなら、綱吉は、事に当たって、神経が鋭敏過ぎたようだ。

「知っているか。弥太郎。大奥には、余の女と臥せる両側に、背を向けてはいるが、耳をそばだてて二人のかわす私語を記録する中臈と申す無粋な女がいるのだ。正統な

跡継ぎの確認のためだというが、あれでは、余は、女を抱いても気が散る。いささかの憩いにもならぬ」

その点でも、隠岐守の屋敷で、無邪気な、若い「お末」と無心にじゃれ合い、時に、能の一節を一緒に和する。

「これ以上のやすらぎはないのだ、弥太郎。解ってくれ」

となる。

綱吉に、こう赤裸々に告白されては、吉保は、どれほど世間の悪評を買おうと、身を挺して綱吉を守らざるを得なくなるのである。

（今宵の上さまは、すこし気張り過ぎたのかもしれぬ）

しかし、吉保は笑わない。

出家沙弥の身でも、時には「天性の水」を排出せねばならないと聞く。まして、上さまも、そして自分も凡夫。

相身互いと思っていた。

「そんなお疲れのご様子は、七番の養老にてもいささかも見受けられませんでしたが」

と、吉保は、しれっとして綱吉を慰めた。
「そうか。それならよいが」
綱吉は、無邪気に笑うと、
「そなたの屋敷に参ると、戻ってからもぐっすり眠れるのでな」
と、喜んだ。そして、
「時に……」
綱吉は、不意に話題を変えた。
「そなたの所にこうして来るようになって、余は何年になろうか」
「今年でかれこれ十年。此度は、延べで四十二回目にございます」
「そうか、そんなになるか。そなたには迷惑をかけているな」
「いえ、とんでもございませぬ。父君の家光公のご側近への御成りは、三百余回に及んだそうでございます。上さまは、まだまだ及びませぬ」
「父君は別格じゃ。あれは超人じゃでな。それに無類の武辺好みで、剣術の仕合などを見るだけのことも多かったらしい。仕合が終わると、そそくさと城に帰られたそうだ」
「そうでしたか」

「おっと、そうでもない。昼間から出先で閨に男を招き入れ、衆道に耽られたこともしばしばであったと聞く。余も、若いとき、そんな父にあこがれるあまり、父を真似て、そなたと数回、試みたこともあったな。覚えておろう」

「あれは、父君の真似でございましたか。とんだことを真似られたものでございますな」

吉保は苦笑するしかなかった。

「全くだ。衆道など、今考えると、女色の深淵には到底及ばなかったな」

綱吉は、あっけらかんと言ったが、

「まことに」

と、答えた吉保は、すでに顔が火照っていた。

弥太郎が、館林宰相（二十五万石）であった綱吉に、初めて謁見したのは寛文四年（一六六四）。

その直後、殿の、たっての求め、ということで衆道の相手を余儀なくされた。

綱吉二十歳、吉保七歳の時のことであった。

弥太郎にとっては、ただただ、迷惑な、苦痛なだけであった。だが、父安忠からは

――、

「これも臣下の務め。殿と生死を共にし、相互扶助に徹する固めの念契と思え」

と、諭されて耐えた。

男女が抱き合うのはごく自然の行為だが、男同士が抱き合うのは、いかにも不自然である。

だが、その異常倒錯の中にこそ、無私の献身と信頼という独特な感情が芽生えるのだというのである。

しかし、父は、息子に〈性の倒錯〉が根付くのを恐れたのであろう。

息子を供出した後、密かに手を打った。

それが綱吉の母（桂昌院）の侍女であったお伝の起用であった。そうでもなければ、黒鍬組の娘如きを、殿に近づけることなど、あり得なかったろう。

綱吉は、たちまちお伝の色香に夢中になり、衆道など全く忘れてしまった。

これで吉保は救われた。

ともかく、ほろ苦い思い出である。

どのくらい経ったか――。

綱吉は、そんな思い出に耽る吉保を、のぞき込むような格好で、
「どうやら、つまらぬことを思い出させたようだな。詫びる」
と言って立ち上がった。
帰りがけに、綱吉は、駕籠を前にして、何気ない様子で囁いた。
「来年、そちをもう一度喜ばせる積もりでいる。楽しみにして待て」

4

綱吉御成りの翌日は、各方面から慶賀の使者がどっとやってくるのが常である。
今度は松平の称号を与えられたことへの祝意も加わって、柳沢邸は、早朝からごった返した。
町子の『松蔭日記』は、この状況を以下のように記述している。

翌日は、諸方からの使者が引きもきらない。この度の「松平の称号を賜わったことへの」お祝いさえ加わって、ひときわ多くの人々が来て大声を上げる。

（十二、こだかき松・五段）

そんな喧噪をよそに、吉保は妙にさめていた。

昨夜、眠りが浅かったせいもある。

うつらうつらする中で、なぜか浅野内匠頭の横顔を見た気がした。

夢には色がないという。とすれば、昨夜の内匠頭の顔は、夢か幻か。はっきり蒼白に見えた。

内匠頭の向かいに座る大男が、しきりになにか喋っていた。時に訴えるように、背をかがめて話しかけるのだが、内匠頭は、無言で頭を横に振るばかりである。

（なにをしているのだろう。なぜ内匠頭は、頭を振り続けるのか）

皆目わからない。

しかし、つまらぬ夢幻と切り捨てるには、心にひっかかるものがあった。

主だった祝いの使者が、一渡り終わると、吉保は、ふと思い立って、駕籠で屋敷を抜け出した。

出向いた先は、妙心寺派の江戸小日向の龍興寺。

そこで、二刻（四時間）の間、参禅した。

無念無想の境地に浸って、一旦心を空にする。

すると、終わった後、ぽっかり空いた心の空白に新しい発想が、ふわりと飛び込んでくる。

二十代早々から始めた、吉保流の参禅の知恵であった。

終わって、さばさばした気持ちで、方丈に雲巌全底を訪ねた。

最初に龍興寺の門を叩いた二十歳の時の禅師・竺道祖梵が亡くなられたのが貞享元年（吉保二十七歳）。その跡を継いでから、全底とは十七年の付き合いである。

吉保と同世代だが、これが到って容貌魁偉。若い頃は、粗野な振る舞いが多かった。しかし、年齢と共に素行も修まり、学識の深さと広さでは、俗界の知恵を含めて、はるかに師を超えていた。

全底は、

「僧といえども煩悩――男ならば共通する性の欲望――あり。精水を排出せずにいるは却って女犯、破戒の種となる。よっていたずらに我慢せず、時に出すべし」

若い頃は、そんな勝手なことを言っては、吉保との面談中でも、不意に「暫時待たれよ」と縁側に出た。

なにをするのかと見ていると、僧衣の前をまくって、陰茎をしごいては、「しゅっ」

と空に向かって勢いよく白い液を放出した。
俗に独楽という。
そのあと手水を使い、手を清めて戻ると、平気な顔で言ったものである。
「坊主には不要な悪水よ。時々出さぬと茶色くなってしまってな。これで落ち着いて禅を語れる。そなたのような艶福家には解らぬことよ」
ちくりと痛いことを言った。
当時、吉保は、すでに妻定子の他に側室に染子を侍らしていた。時々、座禅の時、傍らに控えさせて、全底との禅語問答を記録させた。
それが目障りだったのであろう。
艶福家と誹られても仕方がないところもあった。
しかし、なにも対談中に、そんなことをしなくてもと、思うが、これも、
「飛び出したいのは精水の勝手。拙僧には止められぬ。それゆえ悪水なのじゃ」
と、人を食った返事をした。
だが、今は、そんな昔の面影はない。
容貌も、すっかり枯淡味を帯びてきた。

「すこし、お顔の色が悪いようだが」
全底は、じっと吉保を見つめて言った。
「すこし、眠りが浅いようで」
「さもあろう。これだけ世間に騒がれてはな」
「と、申されると？」
「知らぬか」
「さて」
「駕籠などに乗らず、もうすこし町中を歩いて見ることじゃな。世間は、今か今かと赤穂浪士の復讐を待っている。今に毎月十四日には、新しい吉良屋敷の前に桟敷でもできるのではないかとの評判じゃ。これでは柳沢殿も辛かろう」
「それが一向に。その程度のことを一々気に掛けていては政事はできませぬ」
吉保は、さらりと言ってのけた。
「そうかな」
「嘘と坊主の髪はゆったことがござらぬ」
「わははは。よく言うわ。しかし、その顔色は、なにか、心にわだかまりのある証拠。語られよ」

促されて、吉保は、幻で見た内匠頭の蒼白な横顔を語った。

「ふむ、禅坊主としては、鬼神は敬して遠ざけねばならぬ。だが、青瓢箪の武士の怨念となると、そうも参らぬな」

と、苦笑いして、しばし瞑想した。

やがて目を開くと、やおら呟いた。

「浅野内匠頭は、こう言うている。柳沢殿に訴えたいことがあるとな」

「なんでござろうか」

「幕府の誤解を解きたい。しかし、それが出来ぬので苦しんでいると申されている」

「誤解？　と申されると？」

「下らぬ政治のいざこざであろうよ。拙僧には、とんと解らぬ。また解ろうとも思わぬ。町の占い師ではないからの。まあゆっくり考えることじゃな。桟敷のできる浅野の次の命日までは間がある。焦ることはない」

と、煙に巻いた。

帰路、吉保は益々混乱した。

（誤解を解きたいこととは、何であろうか）

考え始めると、周囲の煩わしさが気になった。

自邸前まで来て、祝いの使者が、まだ右往左往するのを見ると、舌打ちして、
「このまま屋敷に帰らず、登城せよ」
と、命じ、駕籠を迂回させ、そのまま城の自室にこもった。
念のため、三月半ばの勅使下向の時の記録の中で、多門伝八郎の陳述記録を、もう一度引っ張り出し、記憶の糸をたどった。
確か、こんな対話をした筈だ――。

伝八郎「結論から先に申し上げます。浅野内匠頭殿は、この度のことに関しては、一言も申し開きをされませぬ。上将軍家に対しては、いささかの恨みもないと申されました」
吉保「いや、余は此度の浅野の軽挙妄動の原因がなにかを知りたいだけじゃ。上さまへの恨みの有無などは論外ぞ」
伝八郎「その点については、全く浅野殿お一人の宿意で前後を忘却し、刃傷に及んだゆえと申されました」
吉保「宿意？　では、宿意とやらの内容は如何に」

伝八郎「それが内容は皆目わかりませぬ。ご本人も、これ以上は口をつぐんで語りませぬ」

吉保「それでは、なにもわからぬと同じではないか」

伝八郎「残念ながら……」

ここに、「桂昌院の従一位問題」と、将監から聞き取った「これは田舎大名の口を挟むことではない」という、その後の諜報を挟むと、どうなるか。なにを内匠頭は訴えたかったのか。

宿意とはなにか。

まだ浮かんでこない。

（仕方がない。吉良本人を、屋敷に呼ぶしかあるまい）

吉保は、侍臣を招いて命じた。

「吉良殿を屋敷へ。夜分でも構わぬ。おそらく芝白金の上杉家下屋敷におられよう」

5

知らせを受けた上野介が、人目を避けるように柳沢屋敷の門をくぐったのは、宵五つ（八時）過ぎである。さすがに、この時刻になると祝いの使者も途絶え、顔を知られることもなかった。

こうして二人は、十ヶ月ぶりの対面となった。

この時も、吉保は、吉良を上座に据えている。

長く家に閉じこもっているせいであろう。吉良は青白く、むくんだような顔をしていた。

しかし、

「此度、柳沢殿には、松平の称号を賜られ、諱を戴いた由、仄聞致しました。が、拙者、今はなにせ肩身の狭い逼塞の身、お祝いにも参上できずご無礼仕った」

と、吉良の以前の傲岸な姿勢は、すっかり影をひそめていた。一介の好々爺にすぎない。

変われば変わるものである。

吉保は、言葉を和らげて言った。

「なんの、なんの。それより吉良殿がことよ。ご息災そうにお見受けするが、如何か」

「お心遣い痛みいりまする。されど、息災は表の顔。内情は火の車でござる」

と、吉良は、寂しそうな笑いを浮かべた。

「と、申されると？」

「来月早々には、正式に隠居の身となります。そのかわり浅野内匠頭の処分との絡みで、長いこと保留となっていた養子（孫）義周の跡継ぎの件、ようやく上さまのご承認をいただきました。これで、いささかほっとしました。が、この間、高家肝煎をご辞退したことで、屋敷の差し替えを余儀なくされ、引っ越しになにかと出費も重なり、その工面で日夜難渋いたしておりまする」

「それは難儀なことでござろう。先頃は材木も高騰しておれば、なおさらでしょうな。しかし、吉良殿には上杉殿がついておいでですから、大船に乗っておるようなものでござろう」

下手に頼られても困る。吉保は、多少の皮肉をまじえて言った。

「いやいや、息子などというものは、いざとなれば頼りになりませぬ。親爺は、これ

まで十分過ぎるほど役目を果たしてきた。後はもう米沢に下って楽隠居なされ。米沢の周辺には、赤湯などの温泉も豊富なれば、老人には、うってつけの憩いの地だと、すっかり親を年寄り扱いして顧みませぬ。その点、娘の方がまだ親身になってくれまする」

娘三人は、一人が松平（島津）家に、一人は津軽家に、もう一人は酒井主膳忠平に嫁している。

いずれも江戸に住まう身。三人交替で父を預かってもいい、と言ってくれるらしい。

しかし、それでは長男の沽券に関わるというのが上杉家の言い分のようだ。

「さようか、（上杉）綱憲殿は貴殿に米沢に行けと勧めるのか。難しい選択でござるな。で、お手前はどうなさるお積もりで」

本心では止めねばならないと思っていた。

止めなければ、大石たちは焦って、年内に復讐するかもしれない。

（師走にでも決行されたらたまらぬな）

と、思った。

だが、この不安は、吉良の方から消してくれた。

「義周は、まだ十六歳。式典の礼儀作法を一から仕込まねば、成人した後、高家肝煎

は務まりませぬ。拙者、今から温泉めぐりで余生を過ごす気にはなれませぬので」

赤穂浪士に狙われる不安より、孫への情が優るということらしい。

綱憲も困るだろうなと思いながらも、

「ごもっともでござる」

と、吉保は、吉良の返事に、ほっとした。

そして、何気ない口ぶりで続けた。

「いや、今後とも江戸におられるなれば、別に急ぐことではなかったのでござる。だが、師走を迎え、今年の行事の記録を書庫に納めるに当たって、ちと吉良殿に確かめておきたいことがござってな」

「さて、なんでござろうや」

「いや、たいしたことではござらぬ。今年の弥生のみぎりの、例の朝使下向の時のことでござるよ」

「と、申されると……」

軽くは受けたが、吉良の顔に、一瞬、不安がよぎったように見えた。

「一つは、朝使御登営の時のことでござる。聞くところでは、例の事件の折、その登城刻限は正式に繰り上げられていたのでござろうか」

俺や上さまは知らぬぞ、と言いたい気持ちは、ぐっと呑み込んだ。

「いえ、さようなことはございませぬ。ただ十四日の朝は雲行きが怪しく、濡れるのを避けるために、早めに登城して城内にて待機してもよいか、という問い合わせのあったことは事実でござる」

「なるほど。で、それを貴殿は許された？」

「さようで。下々なれば、雨に濡れれば着替えにも困ろうかと思うて……」

「なるほど。しかし、浅野殿には知らせなかった」

「さて、どうでござったか。お知らせしたと記憶するが、よう覚えておりませぬ……」

「さようか。まあ、それならそれで結構」

しかし、吉良の最後の返事は、間違いなく「逃げだ」と思った。

これで判った。

この早出組の中に、朝使の高官が紛れていた。

この高官の早出の事実を知った大奥留守居役の梶川が、刻限まえに「表」に顔を出した。

これで梶川が、「表」をうろうろしていた事情が納得できた。

「では、もう一つ承りたいが」
「喜んで……」
「此度の饗応に先立ち、吉良殿は、浅野を自邸に招いて、饗応についての式事次第と作法を懇切に伝授されたと聞くが――」
「それはもう、抜かりなく」
「さようか。そこで、ちと立ち入ったことを訊ねたいが、よろしいか」
「なんでござろう」
「浅野は物覚えがよかったかの？」
と、にやりと笑ってみせた。答えやすくしたいがための芝居である。
しかし吉良は、さすがに老獪。
これに乗らなかった。
「さてさて、お答えの難しいご質問でござるな」
と、警戒気味に構えて、
「柳沢殿が、そこに、指導上、浅野と拙者の確執があったと思し召されるなら、全くの見当違いでござる。浅野殿は聞きしにまさる名君。おつむの明晰なお方でござって〈一を聞いて十を知る〉とは、まさに浅野殿のためにあるような、お言葉でございま

したな」

と、歯の浮くようにほめた。

「ほう。ということは、貴殿のご指導は何事もなく円滑に進められたというわけですな」

「さよう、いささかの遅滞もなく。なにか、この点にご不審がござろうや」

だが、そういう吉良の声が上ずっていた。手も、かすかに震えている。年齢のせいとは思えない。

「いや、それなら結構。浅野殿が貴殿に宿意があったや、の噂も聞こえるゆえ、ご指導上、なにか問題でもあったのかと思ったわけで、別に他意はござらぬ。では、そのような噂は全くの言いがかりというわけですな……」

「さようでござる」

吉良は、いいながら視線をそらした。

これも、吉保は見逃さなかった。

「しかし、描者もそうだが、上に立つ者は、いつも一言多いか、一言少ないものでござってな。しかも、不思議なことに、そんなことのあったのを、忘れてしまうのでござるよ、困ったことに……」

「そんなものでござるか」
と、吉良は、横を向いたまま答えた。
「この吉保も、実はその経験者でござる。それも被害者でござってな」
吉良を、問題の核心に誘い込むには、「肉を切らせて骨を切る」しかない。
「ほう、それは」
どうやら吉良は誘いに乗ったようだ。
疑わしそうな目で視線を吉保に戻した。
「言われたのは上さまでござる。遠い昔、まだ館林中将であらせられた頃のことだが。上さまは、ご存じのように、当時から舞も踊りも、そして歌をうたうことも達者であらせられた。ある時、拙者にも歌えと言われるので、仕方なく下手な歌をうたうと、そちの歌には、心がこもってないな、と笑われた。以後、拙者はぷっつりと歌も舞もできなくなりましてな。幸い、子の吉里には、幼少から女どもが仕込みましたので、昨日などもなんとかお相手ができましたが、拙者は、今もからきし駄目で、仕舞をすこし嗜む程度でござる。しかし、数年前、この話を上さまに申し上げた時、上さまが、なんと言われたか。吉良殿、どう思われますか」
「さて、とんと拙者には――見当もつきませぬが」

吉良は、用心深く返事を避けた。
「上さまは、こう申された。余が、そのような、心ないことを言った筈はない。そなたの記憶違いであろうと。かえって叱られました」
「ほう、柳沢殿でも上さまに叱られるようなことがあるのですか……」
「あります、あります。上の者とは、ここだけの話だが、そのようなご勝手なものでござるよ。自分の言葉が、部下にとっては〈葉っぱ〉ではなく、時に、ぐさり胸を刺す〈刃〉にもなる。それがわからない。まあ拙者の場合は、歌や舞踊などの芸事でござったから、笑い話で済みましたが、これが政事にかかわる事となると、また別でござりましょうな、わはははは」
吉良は、再び顔を背けた。
衝撃を受けたことは明らかであった。
（これで決まった。瑤泉院の言葉が間違いでないことが――）

「しかし、浅野の宿意が事実となると――」
その夜、吉良を送り出した後、吉保は、一人書斎にこもって考えこんだ。
なぜ浅野は、宿意の原因を幕府の目付たちに語ることなく切腹して果てたのだろう

か。

（もしやそれは……）

一瞬、閃いたのは、浅野が、朝幕間の従一位を巡る紛争を、表沙汰にしたくなかったから――という想念だった。

それは朝廷の平和のためでもあり、幕府の平和のためでもある。

このことを吉保に知って欲しい。

誤解を解きたい。

それが、あの青白い横顔だったのか。

吉保は、身震いした。

火鉢一つなかったせい？

いや違う。吉保は、不意に、浅野の言葉に出せなかった忠誠心が、たまらなく哀れに思えてならなくなったのであった。

第十章　大石の誓い　元禄（げんろく）十四年暮れ～十五年年初

1

内蔵助（くらのすけ）が、江戸での会合を切り上げ、無事山科（やましな）に戻ったのは、元禄十四年十二月五日である。

以後、師走（しわす）の内蔵助もまた、公私に亘（わた）って多忙であった。

十二月十五日。

嗣子松之丞（しし まつのじょう）元服。

以後、主税良金と改名させている。

近親の縁者を集めての、ささやかな宴が終わると、内蔵助は主税一人を書斎に招いた。

江戸で瑤泉院から聞いた亡君憤激の一部始終を語った後、内蔵助は、吉良上野介を討つ決意を、初めて子に明らかにした。

「亡君の刃傷が、気の病からでなく、まっとうなお怒りの発露と知った以上、この屈辱は、臣下である我等とて同体である。そっくりそのまま吉良に味わわせねばならぬ。それ以外に亡君鎮魂の道はない。しかし相手は、いやしくも幕府の高官を務めた男だ。これを討つことは、幕府を敵とすることと見なされよう。我等の罪は免れぬところと覚悟せねばなるまい。解るな」

「はい」

「ただの喧嘩や、天下晴れての仇討ちとは訳が違うのだ。万一仕損じれば、満天下の笑いものになる。江戸の堀部らは、情けないことに、この事の重大さと分別を弁えておらぬのだ」

「解りました」

「それともう一つ、大学さまの問題じゃ。そなたも、大学さまのご処遇を見守るだけ

という今の父の態度に、なにか煮え切らぬものを感じているであろう。どうだ、正直に申してみよ」

「はい、多少は……」

主税は、困った顔で、ぼそっと答えた。

「遠慮せずともよい。だがな、これも色々と考えあってのこと。父は卑怯でも日和見でもない」

内蔵助は、ここで一呼吸措いて言葉を選んだ。

「一つは、大学さまの処遇待ちとすることで、大石は暴走しない、浅野家の再興第一を考える〈律義な男〉という幕府の安心を勝ち取ることができた。吉良にも油断が生じていよう。言うなれば体のいい目くらましよ。加えて、これで時を稼げば、こちらは、きっちりとした復讐の戦略を練ることができる。一挙両得というものじゃ」

「そうでしたか。そこまでの父上のご深慮があろうとは存じませんでした」

「そうだろう。江戸の衆も上方の原も大高も、父の真意を知らぬ。解ろうとせぬ。復讐の功ばかりを焦りよってな。それともう一つ――」

内蔵助は、ここで、じりっと膝を進めた。

「実はな、これは誰にも漏らしたことがない、大学さま御本人の、お気持ちの問題じ

やが――」

そこまで言うと、ふっと、ため息がでた。

最後の最後まで言いたくなかったこと。

だが、この息子一人にだけは、解ってもらいたかったことがある。

「拙者の本心は、この復讐、大学さまに是非にも先頭に立って頂きたいのだ」

「えっ」

「当然であろうが……。吉良屋敷で武士の面目にかかわる恥をかかされたのは、ご自分の実の兄ではないか。臣下の我々より、もっと切実に吉良に憎しみを抱かねばならぬ立場じゃ」

「なるほど」

「ところが、情けないことに、どうもそうでもないらしい。弥生十四日の夜、兄の刃傷事件を阿久里さまに知らせに駆けつけた時もそうだった。ただ、おろおろと、事の次第ばかりを並べたてるので、しっかり者の阿久里さまは、たまりかねて叱ったそうな。『相手の吉良はどうなったのか知ってか』と。それも確認せずに、ここに来るとは、どういう了簡か。それでも血のつながる弟なのか、と言いたかったのじゃろう。女ながらもあっぱれなものじゃ。なればこそ、ここで大学さまには名誉挽回、すべて

を投げ出して我等の企てに参加していただきたいのだ。だが、これは、臣下の我等が口に出すべきことではない。このこと、原や堀部に言ってみろ。すぐに大学さまに、大石が、かくかく申しております、と告げ口するだろう。そんな受け身でのご参加では、大学さまの御為にならぬ。あくまでご本人から言いださねばな」

「それゆえ父上は、じっと大学さまの出方を待っておられるのですか」

「そうだ。覚えておるか。七年前、父は水谷家断絶の際、備中松山城受取りに参った。この時も、五万石の水谷家は、復活後、わずか三千石だった。その時の断絶の理由は、水谷出羽守さまの不慮の死じゃ。なんの罪もない。ところが、此度の赤穂・浅野の場合は、江戸城内で厳しく禁じている刃傷沙汰だ。赤穂城内でもそうだが、これは大罪じゃぞ。同じ弟さまの継承といっても三千石はおろか、米百俵も戴けまい。たとえ百俵戴いたとしても、そんなものは、お犬大事の将軍さまの〈犬の餌〉にでも呉れてしまうがいいのだ」

激しい言葉に、主税は沈黙したままである。

内蔵助は、堰を切ったように続けた。

「だが、大学さまには、そのような男の覇気も気骨もなさそうだな。これからも、父は大学さまへのご沙汰を待つには待つが、もはや、なにも期待はせぬ。最後は我等だ

けでやるしかあるまい」

そこまで一気にまくし立てると、

「さて、そこでだ――」

と、内蔵助は、目を細めて愛息を見た。

「この大罪と困難をすべて承知の上で、父は、元服したばかりのそなたに、あえてこの父に加担せよと命じたい。どうじゃ。承知してくれるか」

「もとより望むところでございます。ご懸念には及びませぬ」

主税は、さわやかに答えた。

「よくぞ申してくれた」

危うく涙がこぼれるところだった。

まだ、この世の、面白きこと、おかしきことのなんたるかも知らぬ子だ。それを父の浮き世の義理で道連れにするのは罪な話である。

だが、大石家の嗣子に生まれた以上、残しておくことはできないのだ。

「しかし、父のせめてもの願いは、この罪を父とそなただけにとどめたい。そなたの母や弟妹にまで及ぼしたくないのだ。そなただけは、嗣子に生まれた不運と思ってあきらめてもらいたいが」

「この主税、いささかも不運とは思いませぬ。喜んで父上について参ります」
「よう言うてくれた」
内蔵助は、主税の両の手をしっかり握った。
「ならば言う。後顧の憂いを断つため、父は次の決意を固めた。聞いてくれるか」
「はい、謹んで」
「では申す。第一に、父は、いずれ近いうちに母を離縁致す。第二に、そなたの弟妹は、母に引き取らせる。大石の家は、父とそなたの二人だけとなる。そして復讐の暁には、大石家は途絶えることとなろう。これも今の世の人倫の命ずるところ、家臣としての務めだ。耐えて欲しい。今日来た親類縁者にも、できるだけ迷惑の及ばぬよう、いずれ義絶する。その旨も、さよう心得てくれ」
「承知仕りました」
「時に――、あらぬことを訊くが」
「はい」
「これは父の立場を離れて、一人の男として訊ねたいのだが……」
「なんでございましょうか」
「そなた、女を知っているか」

「えっ？　知って――と申されますと？」
主税の顔が、ぱっと赤くなった。
「愚か者め。抱いたことがあるか、と訊いておるのじゃ。つまらぬことまで父に言わすな」
噴き出しそうになる笑いを、内蔵助は耐えた。
「ご無礼しました。その意味なれば、この主税、女を知りませぬ」
「そうか、気の毒なことじゃ」
「気の毒でございますか。たかだか、女を知らぬごときが」
主税は、むっとした顔を見せた。
内蔵助は、知らぬ顔で続けた。
「戦国の世では、将の子は元服の夜、〈男への加入儀式〉を受けたものだ」
「加入儀式と申されますと？」
「父が侍女の中から、年上の良きおなごを選び、元服した嗣子の寝床に添わせたと聞く。それで男子は、女のなんたるかを知った。だが、今の大石の家には、そのような余裕はない。第一、美女もおらぬわい」
内蔵助は自嘲した。

しかし、主税は、興味津々である。
「では、お父上の元服の時は如何でしたか」
痛い所を突いてきた。
「ははは、父は残念ながら、戦国の子ではない。しかし、その伝統は、まだ残っておった。仕方がない。では申そう。父の元服の時はな……」
といって、にやりと笑うと、
「確かに美女はいた。だが、残念ながら、そなたの祖父はこちこちの堅物でな。そんな粋なことは、してくれなかった。その代わり、俺は、さっさと自分で始末をつけた」
あの時の初経験が、俺の好色の始まりかもしれぬ……、そんな思い出を、かろうじて内蔵助はこらえた。
「えっ、始末？　それを〈始末〉と申すのでございますか、父上」
子は、益々興味がつのったようだ。
「愚か者、そう父を虐めるでない。判った、こうしよう。いずれ時を見計らって二人で遊びに参ろう。男の最初の始末は、女が教えてくれるものじゃでな」
「そのようなものでございますか、おなごとは。では、心得ました。ご教授いただき

ます」

「それそれ、その答えが堅いのじゃ。せめて喜んで遊びにお供致したい、とでも言ってくれ」

本当の女の味は、何度も躰を交わして噛みしめねばわからない。だが、この子には、そんな余裕は許されまい。せいぜいが、これから一度か二度、それが哀れである。

そんな父の想いも知らぬのか、息子は答えた。

「では、お供仕ります」

「では、は余計じゃぞ」

もすこし、からかってみたかった。

「お供仕ります」

「そう、そう。それでよい。わはははは」

笑いながら、内蔵助は心で泣いていた。

2

数日後、内蔵助は、町屋の隠居姿に身をやつして山科の寓居を出た。辻石峠を下る

と一刻足らずで京の町中である。

訪ねた先は、御所の南、朱雀大路を少し南に下った所にある関白・近衛基熙の用人・進藤筑後守の屋敷である。

池田久右衛門の名で刺を通じると、在宅していた筑後守は、気さくに顔を出してくれた。

年齢は五十がらみであろう。細い枯れ木のように痩せた、目だけぎょろぎょろした男である。

内蔵助の四代前の大石良信の妻・志茂は、関白・近衛前久の娘だが、庶出の娘であるため、近衛家の家臣・進藤家に託され、進藤家から良信に嫁いでいる。

筑後守は、元々が大石の遠戚の一人である。浪人して池田姓を名乗る時、病中ということで、代わって三村次郎左衛門に、黙認料を十両包んで挨拶に行かせた経緯がある。

「これはこれは、池田殿。ご無事で江戸からお戻りでおじゃるか。それは重畳」

と、初っぱなから言われた。

聞いてみると、どうやら三次浅野家から、先日瑤泉院を訪ねてきた近衛家用人・池田久右衛門の身元照会があったようである。

「いやはや、すでに露見しましたかな」
内蔵助が、わざとらしく頭を掻くと、
「わははは、露見も露見、頭隠して尻隠さずでおじゃるえ。なんとか口裏だけは合わせておきましたがな。なかなか骨が折れましたえ」
と、意味ありげに笑った。
「では、その口、さらに堅く閉じていただくために、これで如何でござろう」
内蔵助は、そっと指で酒を飲む格好をした。
もとより、二人ともいける口。これまでも散々悪所通いした遊び仲間である。
だが、この時は、
「京の町中は、ちと困るえ。他人の目が刺しまするでな」
と、妙に尻込みしていた。
内蔵助と一緒に居る所を他人に見られたくない。そんな気持ちかもしれない。
「では、いっそ、はずれで……、思いきって拙者の地元の伏見ではいかがでござる」
「そんな気の利いたところがおじゃるかえ」
「ございますとも。撞木町と申して、二流ではござるが、知る人ぞ知る通人の遊び場がござる」

「面白い。では、池田殿、年内、暮れも押し迫らぬうちに一度飲みまひょか。それに、拙者からお耳にいれたいことも、二、三おじゃれば」

と、目配せした。

「拙者の方も、筑後守さまに是非ご相談したきこともありますれば――」

そして数日後――。

二人は、待ち合わせして、秘(ひそ)かに撞木町の茶屋笹屋(ささや)に入った。

登楼前、内蔵助は、なじみの女将(おかみ)を呼んで、

「ちと、酒の入らぬ前に客人と四半刻ほど、やぼ用な話がある。人目のつかぬ小部屋を借りたい」

と断って奥の隠れ部屋へ――。

二人は、そそくさと部屋の真ん中に安座すると、まず筑後守から切り出してきた。

この器用な男は、一旦公家(いったんくげ)の世界を出ると、たちまち公家なまりを消し、武士言葉になる。

この時もそうだった。

「遊びの前じゃ。無粋な挨拶は抜きで急ぎ話すがの、大石殿。まず第一に、そなたの江戸で泊まった宿のことじゃ」

「ほう。これはまた、なんでござろう」

「一体どこぞに泊まられたのじゃな？」

言葉こそ詰問調だが、筑後守は、なにもかも承知、という含みを帯びた顔である。

「三田は松本町に所在する米屋と申す、元浅野家出入りの日雇頭の屋敷でござる。総勢十四、五人にもなるので、町の旅籠では、なにかと世間の目が煩わしいと存じ、ここを定宿代わりとしましたが、それがなにか問題でも？」

「大ありじゃぞ。あの米屋の主人、さて、なんと言ったか。近頃、人の名前をど忘れするので、急に思い出せぬが……」

「たしか前川忠太夫と申したと記憶いたすが」

「それそれ、それよ。そなた、あの男の素性を知らぬのか？」

「さて、一向に。あまり目つきには、よい印象を持たなかった程度でござるが」

「それもその筈。あれは幕府の隠密、黒鍬組の元小頭じゃ。それをご存じないとは！」

「げっ」

内蔵助は、すっと顔から血の気が引いたような衝撃を受けた。
「ということは！」
「もしかすると、そなたと江戸衆との対話は、皆、黒鍬組頭領の堀田将監を通じて幕府側用人の柳沢にまで筒抜けということじゃな」
なんというドジなことをしたのだ、という筑後守の顔に、内蔵助は身が縮んだ。
江戸での宿のことは、すべてお任せくだされ、と安兵衛に言われ、つい、宿泊費を安くあげたいこともあって前川屋敷に泊まる話に乗った。
〈只ほど高いものはない〉とは、まさに、このことである。
「そうでしたか」
内蔵助は、唇を噛んだ。
が、後の祭りである。
「そうでござるよ。まさか大石殿がこのようなことをなさるとは」
筑後守は、大袈裟に天を仰いで呟いたが、
「しかし、考えると、ちと不思議じゃな」
とも加えた。
「なにがでござるか」

「大石殿は、恐らく米屋で、江戸の旧家来衆を相手に物騒な話をなさったに違いない。いや、隠さずともよい。赤穂浪人が、いずれ吉良上野に復讐するだろうという話は、江戸は元より京・大坂でも持ちきりじゃで。ところが、幕府は、その物騒な連中が、お膝元の江戸に集まり、なにやらひそひそやっている。その話の内容もすべて把握した。ところが……」

「そのまま手も出さずに放置したのはなぜじゃ、と申されるので――」

先回りして、内蔵助は言った。

「さよう。いかにも面妖な（おかしな）話ではないか。のう大石殿」

さすがの内蔵助も、即答できない。

「それに、今春、そなたを赤穂で襲ったのは黒鍬組ではなく雑賀衆だったというではないか。益々不思議じゃ。まあ、後で柳沢の身になって、じっくり考えてみることだな」

「心得ました」

かろうじて、そう答えた。

「では、先を急ごう。こんな詰まらぬ話より、早く、そなたの馴染みの女の顔が見たいでな」

と、けらけら笑う筑後守。

「……では、もう一つ申す。大石殿、そなた、京の呉服商の綿屋善右衛門を存じておろうな」

内蔵助の顔を、じっとのぞき込んだ。

善右衛門は、京烏丸通り室町二条に大店を営む呉服商で、広島や赤穂の浅野家に、古くから出入りしている。

「名前だけは存じておりますが、直接には――。その方が、なにか？」

「しきりに、そなたと会いたがっておる。だいぶ急いでおるようじゃ。近く会ってみてくれぬか」

「よろしゅうござる。今は浪人の身、呉服の用はさしてござらぬが、お会いいたしましょう。なに、こちらから折を見て数日中に参上すると、お伝えくだされ。店の所在は存じておりますゆえ」

「よかろう。拙者から伝えるべきことはこれだけじゃ。では次に大石殿の番じゃな。先日、なにか拙者に訊きたいことがあると申されたが」

「はい。では――申し上げます。今般江戸に参り、ご承知のように、瑤泉院さまにお目にかかりまして」

「ふむ、それで――」
「その折、亡君内匠頭が、殿中にて刃傷に及ぶ前、といっても、江戸伝奏屋敷に詰める前の弥生初旬のことでござるが――、すでに亡君と吉良殿との間で、なにか争い事があったやに、聞き及びましたが」
「ふむ、ふむ。それがどうかしたのか」
「その争い事の種が、どうやら、朝廷と幕府の間での係争であったやに推察するのでござるが……、如何でござろう」
「知らぬな」
筑後守は、にべもなく顔を背け、逆に、
「しかし、大石殿は、なぜそう思われるのじゃな」
と訊ねてきた。
きらりと光った目が別人のように鋭かった。
（これはいけない。うっかりしたことはしゃべれぬな）
咄嗟に判断した内蔵助、
「いやいや、なんとなくそう思っただけでござるが……」
と、後は言葉を濁した。

「それでは、拙者も解らぬな」
筑後守は、そっけない。
しかし、すこし考えた末、
「だが、その争い事とやら、もしあるとするならの話だが、いずれ、時が解決しよう。待たれよ。多分、来年の春、それも弥生の頃にな……」
と、謎めいた言葉で密談を締めくくった。

3

話を切り上げると、二人は早速、笹屋から妓楼に登った。
すでに用意万端整っていた。
広い奥座敷の床の間を背に、今日の招待客である筑後守が座る。その横に、内蔵助が手配した筑後守の敵娼の紅梅太夫が寄り添った。
内蔵助と、馴染みの浮橋は、唐紙を背に、座敷の下座に、横に並んだ。
この他、座敷一杯に、ぐるっと囲むように局、次、新造から禿まで総勢二十余名。
今日は、「うきさま」こと大石大尽のご散財とあって、豪勢な宴となった。

遊び慣れている筑後守は、

「拙者に太夫を、貴殿が天神とは……」

と、恐縮する一方、一目見て、横にはべる紅梅の美しさが気に入った様子。

「いやいや、お構いなく。ここでは、拙者は、ここな浮橋に浮かぶ、うたかたの〈うきさま〉に過ぎませぬ。もっとも、浮き草か、腐れ縁かは、拙者、存じませぬが――、のう浮橋」

内蔵助が軽い調子で浮橋をからかう。

間髪を容れず、浮橋が鼻声で、

「あい。たとえ、か細い浮橋とても、腐れ縁では、ちと欄干が危のうおすえ。まちっとこちらへ、なあ、うきさま」

と、芝居もどきで内蔵助の手を引く。

「わははは、では、お許しを得て、この鈍牛、善光寺さまに参るとしようか」

内蔵助は、浮橋の胸元に沈るようにだきつき、その胸元をまさぐる。と――、

「あれれ、鈍牛さまにしては、お手のはやい」

浮橋が身をそらし、内蔵助は、だらしなく畳の上に転がり出た。

この二人の掛け合いの戯れ言で、座がどっと一度に沸いた。

あとは、飲めや歌えやの宴となった。

内蔵助が、浮橋と最初に会ったのは今年の夏過ぎである。

この頃、内蔵助は傷も癒え、出歩きたくてうずうずしていた。堀部安兵衛の厳しい手紙攻勢に、いらだっていたことも原因の一つである。

それに、妻は不在がち、赤穂で囲っていた妾とは、生まれた子が病死したことで気まずくなって別れたことも重なった。

一人お忍びで、顔馴染みの妓楼に登った時、偶々小用に立った廊下の隅に、癪で苦しんでうずくまっていた女郎。それが浮橋である。

しかし、その頃の内蔵助には胡蝶という馴染みの天神がいた。

こと遊里の世界では、一旦決めた妓楼と敵娼を変えるのは中々厄介であった。

だが、浮橋と会った直後、馴染みだった胡蝶の姿が、なぜか忽然と消えたのである。

噂では地方の商家の跡継ぎとできて落籍されたとも、酒乱の客に刺されたとも聞いた。

だが、それ以上の女郎のその後の噂は、身の幸不幸に関係なく禁句である。

そのまま、すんなりと浮橋が内蔵助の馴染みの女に納まっただけで事は終わった。

客と遊女としての最初の出会いである「初会」の後、すぐに二回目の「うらを返す」と、あとはずるずると、内蔵助は、この浮橋に溺れた。

まだ二十歳前後であろうか。初心なくせに、会いに行く時の男の心の襞を、いち早く察知する不思議な女であった。

内蔵助は、遊び慣れているが、これ以上の床上手な女を知らない。

男がほしいままに狂いたいときは、自分も、ひたむきに素裸になって躰を合わせてくれる。

男が落ち込んで、憂さ晴らしにやって来るときは、じっと奴婢のように献身的にかしずくだけである。

この女となら、浮き世の義理も、なにもかも捨てて地獄に堕ちても構わない。ふっと、男をそんな狂気に誘う魔性の魅力があった。

二人の会話はすくない。

二人だけになって女が語りかけるのは、つま弾きの三味線にのせた何気ない歌語りである。

この夜もそうだった。

筑後守と内蔵助の二人は、早々に酒を切り上げ、各々の敵娼の部屋にしけ込んだ。
だが、内蔵助の頭は、筑後守に言われた前川忠太夫＝黒鍬組小頭説で、いっぱいだった。
知らなかった悔しさもある。が、なぜ、柳沢は我等を捕えなかったのか、あるいは東海道の帰路、追っ手をかけてこなかったのかを、考え続けた。
そして、筑後守が最後に言った謎の言葉、
「時が解決しよう。待たれよ。多分、来年の春、それも弥生の頃」
が、呪文のように頭を巡って離れない。
（一体なにがあるのか、来春？）
内蔵助は、馴染みになった時、浮橋に贈った夜具に、ごろり横になったまま、じっと想いに耽るだけであった。
そんな男の沈黙を見かねたのか、浮橋が、そっと長い煙管に火をつけて差し出した。
無言で吸い口を口にする内蔵助――。
だが、今日は苦いばかりでうまくない。
いたずらに青い煙が、心細げに天井に立ち昇るだけとなった。
それを見た浮橋は、そっと無言で立って、再び煙管を預かると、部屋の隅に座った。

やがて、三味線を取り出し、軽くつま弾きながら、小さな声で呟くように歌い始めた。

あだし此身(このみ)を煙となさば、
せめてくるわの里近く、
廓(くるわ)のや、廓のせめて、
せめて廓のさと近く
何を思ひにこがれてもゆる、
野火の狐火(きつねび)さよ更(ふ)けて、
思ひにやこがれてもゆる、
野辺の狐火小夜更けて。

内蔵助自作の地唄(じうた)〈狐火〉である。

「もう覚えたのか」

内蔵助が、思い直して声をかけた。

「あい。うきさまの作られたという〈里げしき〉も撞木町では評判どすえ。わちこも、

覚えましたぞえ。一つ聴いておくれやすか」
「うむ」
「では、お隣さんの部屋の睦言の邪魔にならぬよう、もそっとお近くで。うきさまのお側にお寄りしてもよろしおすか」
「許す。三味は俺が弾こう」
「嬉しおす。では……」
と、しずしずとやって来た。
今度は内蔵助が三味線をつま弾き、浮橋が、内蔵助の耳元で囁くように口ずさんだ。

更けて廓のよそほひ見れば、
宵の灯火うちそむき寝の、
夢の花さへ散らす嵐のさそひ来て、
閨をつれ出すつれ人をとこ、
よそのさらばもなほあはれにて、
裏も中戸をあくるしののめ、
送る姿のひとへ帯、

とけてほどけて寝乱れ髪の、
黄楊の小櫛も、
さすが涙のはらはら袖に、
こぼれて袖に、
露のよすがのうきつとめ、
こぼれて袖につらきよすがの、うきつとめ。

「こちらも長いのに、よう言葉違えず覚えたな」
「あい――」
と、浮橋はあでやかに笑った。
「これは、おまえとの後朝の別れを詠ったものだ」
「そうどすか、なおに嬉しおす」
言いながら、内蔵助は、この詞を作った時の自分の心象風景を思い浮かべた。
登楼を重ねて馴染みになると泊まりになる。
だが、廓の朝は早い。明六つ（六時）には別れがくる。外は日の出といっても、冬

の妓楼の各部屋は暗い。

その中で、遊女は、せっせと客の着替えを手伝い、羽織を後ろから掛けてやり、時に、甘い言葉に包んで、昨夜の褥での逞しかった男を讃える。

そして男の再度の登楼を約束させるのである。

歌詞の前段から中段は、そんな同じ登楼中の男が押し出されるように帰る、そのおかしさとあわれを歌ったものである。

後段は、送り出す女の、まだ、しどけない寝乱れ姿を詠み込んだものだ。

しかし、最後の二行、

露のよすがのうきつとめ、
こぼれて袖につらきよすがの、うきつとめ。

は、実は――うきさまと呼ばれる――自分のことである。

こんな愛しい女を差し措いて、やれ忠義だ、武士の一分だ、とわめき散らし、仇討ちなどに血道を上げなければならない、武士という商売の因果、馬鹿ばかしさ、そしてむなしさ――。

家老の子でなければ、とっくに塩間屋になりたかったものを……、そこから、こぼれた男の愚痴であった。

「さて、休むか」

内蔵助は声をかけた。

「あい、でも、お側に侍ったままで、よろしおすか」

「かまわぬ」

「嬉しい。しかし、今宵、お疲れでしたら、お布団の端で、わちきは、じぃっとしてますさかい」

「ははは、いじらしいことをいう。だがそうはいかぬ、男としては、そうはさせられぬな」

内蔵助が着替え終わると、浮橋の、屏風の陰でいそいそと着物を辷らす絹の音が続いた。

内蔵助は、女が着物を脱ぐ、この音を聴くのがたまらなく好きだ。生まれつき好色なのかもしれない。それとも最初の経験が悪かったのか。

だが、この夜の内蔵助の想念は、再び女を離れて元に戻っていた。

（一体、来年の春、朝幕間に、なにがあるのだ？）

これがこびりついて離れない。

「因果なことよ」

内蔵助は、思わず呟いた。

「えっ、なにか言わしゃんしたか」

浮橋が振り返る。

「いや、こっちのことだ。寒い、はよう参れ」

「あい」

内蔵助は、じっと浮橋の来るのを待った。

やがて、ふっと、行燈の火が吹き消された。

この時の女の横顔を見ながら、ふと、前の女――胡蝶――の横顔を思い出した。

偶然にしては胡蝶の失踪と、この新しい女の出現とが、妙に出来すぎている気がした。

（ひょっとすると、この女も謎かもしれぬ）

そんなつまらぬ想念を思い切るように、内蔵助は、褥を開けて浮橋を迎えた。

「おおさむ」

浮橋は、あどけない声で、内蔵助にむしゃぶりついてきた。

4

師走も押し迫った二十四日の昼下がり。

内蔵助は、筑後守の指示に従い、京室町の綿屋善右衛門を訪ねた。

間口三十間もあろうか、という堂々たる店構えは、折からの年末売り出しを迎え、着飾った大家の奥方や若い娘たちでにぎわっていた。

大石の名で案内を乞うと、四十がらみの番頭の一人が飛び出してきて、丁重に挨拶した。

「ようお出でくださいました。こちらへどうぞ。主人がお待ち申し上げておりますれば」

「かたじけない。お取り込み中、恐れ入る」

そんなやり取りの後、内蔵助は、番頭に案内されて裏木戸をくぐる。

そこは枯山水の庭園を設えた別天地であった。

踏み石伝いに中露地を緩く左折すると、こけら葺きの書院風の茶室が見えてきた。

「あちらでございます。では、手前はこれにて」
辞を低くして番頭は去った。
なお中露地を進む。
やがて、なにやら銘でもついていそうな見事な手水鉢と石灯籠を前庭に配した茶室に着いた。
十二畳ほどの広さであろうか。広縁と落縁が外に向かってせり出し、縁先の開口部に中敷居を設けて上半を障子、下半が吹き放ちになっている。
その広縁の片隅で、この家の主・善右衛門らしい男が平伏して待っていた。
「中露地といい、この茶室の構えといい、実にお見事でございますな。感服仕った、綿屋さま」
内蔵助が声を掛ける。
善右衛門は、顔を上げ、にっこり笑った。
「おほめに与り恐縮にございます。ささ、中にお越し下されませ。粗茶など進ぜましようほどに」
年齢は五十代前半であろうか。いかにも大店の主に似合いの恰幅のいい男である。
型どおりの喫茶儀式が済むと、「さて」と、善右衛門は、おもむろに切り出した。

「つかぬことを伺いますが、大石さまは、もしや《神君の密書》なるお噂をご存じではございませぬか」

思ってもみない問いであった。

一瞬ぎくりとした。

この話は、子供のころ、一度だけ、父に〈一子相伝の秘密〉として聞いたことがある。

が、この場は、

「かすかに――」

と、さらり、かわすだけとした。どんな展開になるのかに不安があった。

「そうですか、かく言う私めも、大石さまと同じくらい、かすかな記憶しかございませぬ。しかしながら、私めの祖父、先々代の善右衛門は、この話に、ちと訳ありでございましてな……」

と、善右衛門は小さく微笑を漏らした。

話はこうである。

今でこそ神君と奉られる家康だが、百一年前の〈関ヶ原の合戦〉に際しては、まともに戦えば豊臣方に対して到底勝ち味のないことを知っていた。

そのため、なんとしても豊臣方の猛将・福島正則を味方に引き込まねばならなかった。

下野・小山の陣に正則を招いた時、家康は、正則に言われるままに、戦後、秀吉の一子秀頼の生命を違えぬ旨を約した。

そして、この約束を違えぬ証として、家康は江戸城を担保に差し入れる、という誓約書を書かされたというのである。

それほどせっぱ詰まっていたのであろうか。

「そのあたりの事情は、町人の我等にはようわかりませぬ。が、ともかく、その誓約書とやらが、福島正則さまの死後も行方知れずでございました。ところが、ずっとそのまま広島城に隠されておったのでございますな。浅野家の治世になった後、慶安二年（一六四九）のなゐ（地震）で、広島城の小天守が崩れ落ち、偶然にも、その密書を納めた木箱が転がりでてきた――、というわけでございます」

善右衛門は、言いながら、内蔵助の腹を見据えるように、じっと視線を凝らした。

「そこまでの噂は、薄々存じておる。だが、それ以後のこと、拙者は知らぬ」

嘘ではなかった。

内蔵助の父は、それ以上は知らぬでもよい、むしろ知らぬは、そなたのためだ、と

言って教えてくれなかった。

その様子を、じっと見ていた善右衛門が続けた。

「そうでしたか。では、こちらから申し上げねばなりますまい。実は、浅野本家は、今更幕府に密書を提出すれば、あらぬ謀反の疑いを掛けられぬとも限らない。つまり〈触らぬ神に祟りなし〉と思われたのでございましょうな。密書の入った木箱を、支家ながら、つとに英明の呼び声高かった浅野赤穂の城主・浅野長直さまに、押しつけられたのでございます。困り果てた長直さまは、いっそ家来方に相談するより、出入りの信頼できる町人に、とでも思われたのでしょうか。よく事情は解りませぬが、相談の白羽の矢が、なんと私めの祖父の所に参りました」

「そうでしたか。それはそれは、さぞ迷惑なことでござったろう。で、どうなされたので」

「この件、大石さまにも神明に誓ってご他言無用に願いたいのですが、よろしゅうございますか」

「もとより、この刀にかけて。なんなら神文してもよろしいが」

「いえ、そこまでは結構でございます。大石さまのお人柄を信じましょう。では、その後のお話を申し上げます。実は――」

思いあまった長直と先々代の善右衛門の二人は、知恵を絞った挙げ句、この木箱を伊勢神宮に奉納しておくことにした。

「長直さまは言われました。まだ、当分は徳川さまの天下が続くであろう。今、表沙汰にしても、このような密書は、ただの〈偽書〉として始末されるのが落ちである。しかし、〈驕る者久しからず〉のたとえどおり、いずれは徳川家にも凋落の時が訪れよう。それまで、今しばらくは、天朝さまの発祥の源である伊勢神宮さまに、密書をお守り頂くのが一番よいのではないか、ということになりましてな」

「なるほど、考えましたな。で、お伊勢さんは内宮と外宮のいずれに？」

「これも考えましたが、いっそお預けするなら、一般の方が近づけぬ、あらたかな宇治の内宮さまに、他のご宝物とご一緒に――、ということにいたしました」

「ほう、他のご宝物と一緒にでござるか。さぞ、その手続きも厄介でござったろうに――」

「はい、それはそれは、難儀いたしました。が、ともかく、ある昵懇な宮司さまとの、長い長いお話し合いの上、お引き受け頂きました。しかし、その宮司さまのお名は、手前、金輪際申し上げぬ約束でございます。もとより、その宮司さま以上の職制にあらせられる祭主さま、斎王さまは、この件に一切関与されても、させてもおりませぬ。

万一露見した時のことをお考えになられた、長直さまの御配慮でございました」
「なるほど」
「ところが、今考えると、この内宮へのお預けがよくなかった。いや最悪の選択でございましたな」
善右衛門は長嘆息した。
「と、いわれると？」
「内宮は、日頃、人気が少ないため、盗まれたのが判らなかったのでございます」
「なに、盗まれたと！」
内蔵助は、唖然とした。かろうじて、
「それはいつのことでござるか」
と、訊ねたが、自分でも情けないほど、声が涸れていた。
むしろ、善右衛門の方が冷静だった。
「代が変わって、父が盗まれていることに気付いたのは、延宝三年（一六七五）の初めでございます。私めの綿屋は、密書の伊勢奉納以来、毎月、木箱をお納めした十日の日には、祖父、父、そして私と、お伊勢さまに欠かさず参詣して参りました。だが、この年、念のためにと思って、父が木箱を開けてみて腰を抜かしました。すでに、中

は空になっておりました」

「それが延宝三年の年初！　でござるか」

「はい。もっとも、盗まれたのは更に前のことかもしれませぬ。しかし、一部の噂にあった寛永十四年（一六三七）の島原の乱で、天草四郎が、この密書を所持していたというのは嘘でございますな。間違いなく、密書は、慶安二年（一六四九）までは浅野家・広島城にあり、そこから転がりだしたのでございますから。あったとすれば、そちらの方が、福島正則さまの話を伝え聞いて作られた〈偽書〉でございましたろうな」

善右衛門は、微笑し、さらに続けた。

「私の父は途方に暮れました。浅野家にご相談しようにも、赤穂・浅野の家では寛文十二年（一六七二）、すでに預け主であった初代長直さまがお亡くなりになり、さらにその三年後、二代長友さまも亡くなられました。そして、長矩さまが、わずか九歳で、この年、ご家督をお継ぎになる直前のことでございますから」

「ということは、貴殿の父君は長矩さまに――」

「さよう、やむを得ず長矩さまに、事の次第を申し上げに参上しました」

「と申されると、長矩さまは、九歳で、すでにその密書のことをご存じであったの

か」

「はい。昔の事の経過は、ご祖父やお父上から口伝されていたと思われます」

「で、貴殿の父君が、この件をお伝えしたとき、殿はどのようなご様子であったか。お側に侍ったのは誰であったか……」

内蔵助は、震える手を握りしめて訊ねた。

「お側に居られたのは、お母上か祖母さまであったか。ともかく、お一人だけであったと聞きました。他の者は、一切退けられておりました。そして長矩さまは、ご幼少ながら、私の父の申し上げることを、じっとお聴き下さいましたそうな。だが、父の辞した後は、それはそれは、大変なお苦しみだったようで、夜もよくお休みになれぬようになられたと、後に漏れ承りました。お側衆からは、おまえは一体なにを若殿のお耳にいれたのかと、父は厳しく追及されたそうでございます。しかし、この件、今日まで、父も、その後を受け継いだ私も一切語らずに参りました。今日、ここで私が大石さまに申し上げるのが、おそらく最初で最後になろうかと存じまする」

衝撃だった。

（もしかすると、この秘密を知ったことが内匠頭さまの痞の原因となったのでは……）

そう気付いたからである。
そう思うと堪らなくなった。
「そうでしたか。知らぬこととはいえ――」
とは言ったが、それは知らなかったことへの後悔ではなかった。
内蔵助の悔恨は、そんなことをも知らずに、痞に苦しむ殿を敬遠しがちに、長年お仕えしてきた自分の不徳と不誠実さにあった。
それが悔やまれてならなかったのである。

5

山科の自宅に帰った後も、内蔵助は、昼間の悔恨を引きずっていた。
これに追い打ちをかけたのは、留守中に届いていた進藤筑後守の手紙である。
開いてみて驚いた。
十二月十一日。吉良上野介の隠居が、正式に許され、代わって嗣子左兵衛（義周）が後継者として登城を許されたとのことであった。
しかし、浅野側は、大学さまへのご沙汰がない、相変わらず棚ざらしのままだとい

う。

（いったいどうする気なのか。はっきりせい）

内蔵助は幕府に言いたかった。

同時に、大学さまにも、いい加減に、ご自分の身の始末ぐらいつけたらどうなのだ、と叫びたかった。

そんな、やりきれない気持ちの時に書いたと思われる手紙がある。

日付は十二月二十五日。綿屋と会った翌日である。相手は江戸の堀部弥兵衛。安兵衛の義父にあたる。

一読して解るが、なんとも自分の気持ちをはぐらかしたような韜晦（とうかい）（つつみかくすこと）したところがある。

が、復讐（ふくしゅう）の決行を前提に、しっかりした骨格の戦略を立てること。諜報（ちょうほう）収集に慎重さを説いているところが、これまでにない異色の手紙となっている。

一筆啓上。皆様ご無事と存じ上げます。

こちらも相変わらず、つつがなくやっております。

吉良氏、去る十一日御隠居、御家督は左兵衛殿にと申請なされた由（よし）、さてさて結

構なこと〈珍重〉。
どなたさまか、さぞご満悦であろうとお察し申し上げます。
（中略）
もはや（今年も）押し詰まりましたので、春になったら、とくと（今後のことを）ご相談しましょう。
下手な大工衆（安兵衛以下三人を指す）が、事を急ぐのではないかと不安に思っております。
この上は、十分戦略を練り、土台から随分念を入れて、何度も話し合うことです。しっかりした木柱（基本諜報を指すと思われる）も集めて構築し、取組むべきものと思います。
（中略）
事を急いでは、材木（個々の諜報を指すと思われる）等も粗末で、間違いないかどうか（出来の程も）覚束（おぼつか）なく思います。
手に入ったとお考えの材木（諜報）でも念には念を入れなくてはいけません。くれぐれも肝に銘じてください。
（中略）

下手な大工衆には、とくと言い聞かせてください。
三人の大工衆は、春にはこちらにこられるとのことです。
（以下略）

この十二月二十五日の手紙は、内蔵助が、江戸の瑤泉院、京の進藤筑後守、そして同じく京の綿屋善右衛門を通じて得た諜報によって、一大変身を遂げたことを推測させる重要な文献である。

同時に、この手紙は、安兵衛以下三人を下手な大工にたとえる皮肉にうかがわれるように、これまで受け身一方だった内蔵助が、以後、復讐に指導力を発揮するようになる、記念すべき出発点となったものであった。

6

年が明けた。

内蔵助の周辺は、この頃から浪士たちの動きがにわかに慌ただしくなっている。

（元禄十五年）

一月九日　原、大高両名京に到着
同月十一日　山科内蔵助宅にて会議
同十四日　寺井玄渓宅にて同志の会議
同十五日　萱野三平自刃の報に接す
二月十五日　山科会議

昨年の暮から、内蔵助の復讐への決意は不動のものとなった。だが、内蔵助が懸案とする、

三月の朝幕間の懸案の政治課題
大学さまの処遇への最終判断

の二点については、過激派との間に、依然、関心の大きさに隔たりがあった。

十一日の内蔵助宅での会議では、原、大高は、相変わらず煮え切らない内蔵助の態度に、

「もはや、大石頼むに足らず。我等だけで決行を――」

と激高。席を立って吉田忠左衛門にたしなめられるという一幕まで起こした。

しかし、内蔵助は終始冷静だった。
（もうしばらくの辛抱。いずれ彼らにも解ってもらえる時が来る。その時まで……）
二人には敢えて反論もしなかった。

内蔵助にとって幸いだったのは、原、大高の激高に、肝心の江戸の過激派総帥・堀部安兵衛が、同調しなかったことである。
理由は二つ考えられる。
一つは、内蔵助が、年末に義父の弥兵衛に与えた手紙の影響である。安兵衛は、義父から手紙の実物を見せられたろう。
内蔵助の文面に「下手な大工」とたとえられたことで、一時は、むっとしたかもしれない。
だが、元々利口な男である。
内蔵助が最終的に決起に同調していることを文面から読み取り、これを諒とした。
そして、戦略論の構築に欠けているという指摘にも、おのれの到らざる所を反省した。
その証になるものがある。
次の堀部安兵衛と奥田兵左衛門両名連記による内蔵助への書簡（正月二十六日付）で

ある。

恐らく内蔵助に届いたのは二月初旬と思われるが、だらだらした長文なのでその肝心の冒頭部分だけを掲げておく。

委細仰せられたご趣旨は承知しました。

これによって、（以後は）念には念を入れ、（吉良の）様子を見届け、その上で、決行されるとの（大石殿の）思し召しを得心いたしました。

これが、昨年来、内蔵助を、皮肉まじりの激烈な文章で攻撃し続けてきた安兵衛か、と思われるほど殊勝な文面である。

義父に、拙速を慎み、大石殿の指示に忠実に従うようにと説得された。これもあろう。

だが、この時、安兵衛が、原、大高と一線を画した最大の理由は、その盟友・高田郡兵衛の思いがけぬ脱落にあった。

過激派の郡兵衛が、なぜ江戸派の脱落者第一号になったのか。

真相は今も謎である。

いささか信憑性に欠けるが、伝えられるその原因は、郡兵衛の叔父内田三郎右衛門が、妻子がないため、郡兵衛を養子に、と申し込んできたことに始まるという。

この申し出を兄の高田弥五兵衛が断った際、断る理由の一つに、「いずれ弟は、吉良への復讐に参加する積もりなので貴殿に迷惑がかかる恐れもあるゆえ」と漏らしたという。

驚くべき軽率さである。

この叔父の口を封じるには、養子になる他なくなったというのである。

「俺が脱退するのは、一同のためなのだ」

と言わんばかりの、奇妙な〈逆説の論理〉である。もし事実なら、生一本な安兵衛は、怒り心頭に発したろう。同時に、そんな自分勝手な郡兵衛の脱落理由を恥とした、と思われる。

安兵衛は、一方で郡兵衛の説得を続けながら、内蔵助には、この事実を隠さざるを得なかったのである。当然、それだけ内蔵助批判の矛先が鈍くなったと考えられる。

振り返れば、昨年八、九月頃の内蔵助との往復書簡で、ちょくちょく、郡兵衛の署名が欠けていたことがあった。これが脱落の兆候だった。

これを、安兵衛は郡兵衛の病気のように偽ってきた。内蔵助の十一月の江戸滞在中も、安兵衛は、この嘘をつき通した。

帰京後の十二月二十五日の堀部弥兵衛に与えた内蔵助の書簡にも、「三人の大工衆」とあるように、この年の年末時点でも、内蔵助は、なお郡兵衛の脱落を知らなかったと推測される。

それが、暴露される時が来た。

内蔵助に対する堀部弥兵衛の別の返信（同じ正月二十六日付）が、この事実を明らかにしたのである。

その上で、弥兵衛は、こうも書いて寄越した。

誰が意見しようとも（略）貴殿のお考えの通りに、一筋にご命令下さい。また、私共の倅（安兵衛）は、今も心違えは全くございませぬ。

郡兵衛の離反を隠していた詫びもあってか、親子共々内蔵助に全面降伏したのである。

7

二月十五日、山科会議。

ここでは、内蔵助は間違いなく江戸の堀部親子の姿勢の変化を把握していた。

原、大高が、どんなに激怒しても、内蔵助が微動だにしなかった理由がここにある。

微動だにしなかっただけではなかった。内蔵助は、この時期から初めて反撃を開始している。

山科会議の参加者は十八人ほどだが、当初は、原、大高の怒声に圧倒されて、内蔵助の支持者は少数であった。

「もはや大学さまの安否に見切りを付けて、一日も早く討入りの決行を――。吉良も隠居したということは米沢に移ることも考えられる。そのような場合は、途中で討ち取るべきである」

原と大高は、前回同様、内蔵助に詰め寄って動かない。

他の者たちは沈黙したままである。

にも拘らず、内蔵助は、断固として原、大高に反論したのである。
「各々方、静まれい」
内蔵助のこれまでにない気迫に、会議所の部屋中にぴりりと緊張が走った。
「まずは、吉良が米沢に引っ込むなどということは、あり得ませぬ。落ち着いてくだされ」
「吉良の隠居が決まった以上、これが落ち着いていられるか」
原と大高は、一段と激高。今にもつかみかからん勢いになった。が――、
「静まれい。ご両人」
内蔵助は、はったと二人を睨んだ。
「もう一度言う。そのようなことはあり得ませぬ。お二方の勝手な妄想ぞ。なんなら拙者、吉良が米沢に移らぬ方に首を賭けてもよい」
この内蔵助の断言に、出席者は息を呑んだ。
「それに、十分な準備なくして討入りを急いでは必ず失敗する。下手な大工仕事と同じよ」
堀部親子に書いた言葉を、そっくりそのまま、この会議で使った。
二人は、さらにいきり立った。

「益々(ますます)もってけしからぬ。我等が言うことは下手な大工仕事だと申されるのか」
「いかにも」
内蔵助は、平然と受けた。
「言わせておけば――、元ご家老とはいえ許せぬ。どこが下手な大工じゃ」
二人は、刀に手をかけんばかりの怒りである。
だが――、
「では、申し上げる」
と、内蔵助は、ゆっくりと、ここで立ち上がり、全員を睥睨(へいげい)した。
「皆の者、拙者、今から、ここなご両人と討論いたす故(ゆえ)、しかとお聞きくだされ。そして公平にご判断くだされ」
こう宣言すると、二人と対峙(たいじ)する姿勢で、討論の火ぶたを切った。
「まず第一に、今、吉良は何処(いずこ)にいると思われるかな、ご両人」
「それは――」
二人は、思わぬ問いに顔を見合わせた。
「新しい吉良邸に相違なかろう」
「ほう、そうかな。あの屋敷は、場末も場末。いくら金をかけても、周囲の道は悪い

し、じめじめして身体によくない。湿気が多いせいじゃ。それに水も不味いようだな。それでは、上野介の好きな茶会の開催も難しかろう。ところが、上野介の子息は、上杉家の殿様だ。上杉家の屋敷は、霞ヶ関始め江戸の一等地にある。場所は知らぬが、他に、も一つ下屋敷もあろう。吉良屋敷を含めて都合四箇所。その何処ぞに吉良がいるかは、常時監視しなくてはわかりませぬぞ。討入ってはみたものの、相手が不在だったでは、天下の笑いものになるだけじゃ」

内蔵助は、日頃考えてきたことに、はったりをかませて喋り続けた。

「第二に――、吉良邸には部屋が幾つあるか、ご存じか？」

「えっ」

「そして吉良は、そのどの部屋に就寝しておるか、知ってか」

「それは――、それはこれから調べる」

二人は、すでにしどろもどろである。

内蔵助は、追い打ちをかけた。

「ほう！　どのようにして調べなさるかな。その方法論をお持ちか」

「いや、それはまだで」

二人は声を上ずらせた。

「拙者が先般の東下りで望見した限りでは、新しい吉良屋敷の建屋は、ざっと東西三十間、南北二十間ほどとお見受けした。合計六百坪余り。これを二十畳の間で考えれば、五十以上の部屋数になる。それを、深夜、真っ暗な中で、一間ずつ吉良の所在を調べてあるけば、夜が明けてしまう。そこまでお考えになったことがござろうか。その他、我等の攻撃に対して脱出用の抜け穴があるかどうかも検討されてしかるべきではないのか」

「抜け穴！　そのような防備まで、吉良はしておりましょうか」

二人は、驚きの声を上げた。

「拙者の赤穂の屋敷ですら、拙者の寝所から炭小屋までの抜け穴があった」

これは、はったりである。そんなものはなかった。そんな抜け穴を用意したのは、用心深い大野九郎兵衛の屋敷だけである。

そこを通じて大野は逃亡した。内蔵助は、それを見て見ぬふりしたのである。

内蔵助は、続ける。

「まして我等に狙われていることを百も承知の吉良が、抜け穴を考えぬ筈はない。それが何処に通じているか、これも調べねばならぬ。あの湿地帯では、抜け穴を造るのはなかなか難しかろう。だが、金さえかければ、できぬこともあるまい。ともかく、

血気に逸るだけではいかん。お二人だけでなく、皆の衆も、この点をよくよく解ってほしい」

部屋全体が、しんと静まりかえった。

「更に……、我等を迎え撃つであろう兵力の予測も必要じゃな。吉良家の武力はなきに等しいとしても、上杉はどう出る。幕府はどうする。あの屋敷の北と東には旗本屋敷が各二軒連なっていたが、その各氏は我等の吉良襲撃をどう見るか。まさか訊くわけにはいかぬではないか。ともかく、我等が心を合わせて調べねばならぬことは、まだまだ山ほどあるのじゃ」

沈黙の中で、内蔵助は、漸く自分の真意が浸透し始めた実感を得た。

もちろん、内蔵助の側にも、報告こそしなかったが、予想外の事件が起こっていた。

一月十四日、主君の〈月命日〉の夜半、萱野村の自宅で中小姓萱野三平が自殺したのである。

これが上方の脱落第一号である。

三平は、昨年春の殿中凶変の際、その第一報を早水藤左衛門と共に赤穂にもたらした忠臣であった。開城後は、故郷に帰って、秘かに復讐の機会を待っていた。

だが、そんな息子の心情を知らぬ三平の両親が他家への奉公を決めてしまった。三

平は、忠孝の板挟みとなって困り果てた末、自刃したのである。

内蔵助宛ての次の書状が残されていた。

昨冬以来、吉田忠左衛門、近松勘六殿と申し合わせ、江戸に下ろうと思っておりましたが、父七左衛門は、その目的を知らず強く反対しました。もっとも、江戸下りの本意を伝えれば、恐らく喜んだこととは思います。しかし、皆様に差し出した神文の誓いの手前、たとえ父子との間でも、このことは口外できませぬ。君への忠と父への孝の狭間にあって苦慮した末、自害する道を選びました。吉田、近松両氏には、このこと伝えておりませぬゆえ、あなたさまより、しかるべく、お伝えくださるようお願い申し上げます。恐惶謹言。

正月十三日

萱野三平重次

大石内蔵助様

なお、辞世の句も短冊に残されていた。

晴れゆくや日ごろ心の花曇り

報を聞いた内蔵助は、事情を知って哀れに思った。責任の一端は、復讐の決行に慎重を期してきた自分にもある。人知れずそう考えた内蔵助は、三平を丁重に氏寺に葬り、亡君への殉死扱いとした。郡兵衛の脱落とは訳が違う。

いずれにせよ、内蔵助の吉良への復讐にかける気持ちは、今では、いささかの曇りもない。

ただ、どっしり構えて、拙速を避ける姿勢が、他の浪士と違っていただけである。こうして山科会議を乗り切った。

時移って三月十四日。

御主君の祥月命日である。

内蔵助は、赤穂に赴き、浅野家の菩提寺である華嶽寺で、亡君の一周忌を行った。

参加者は在京、在坂の赤穂浪士十数人。

皆、浮かない顔であった。大石の決行の意思は先月確認した。しかし、なお前途は

見えていない。

そんな中で、内蔵助と嗣子の主税だけが、吹っ切れた気持ちになっていた。

山科に戻ると、内蔵助に、近衛家用人・進藤筑後守から呼び出しがかかっていた。

（なんであろうか、もしや例の朝幕間の争い事の話では――）

そのまま筑後守の屋敷に飛んで行くと、

「いやいや、呼び出したは他でもない。ようやく、そなたに告げるべき時が来たゆえだ」

そう前置きして、筑後守は、新しい江戸からの報告を語った。

徳川綱吉の御母堂・桂昌院に従一位

この昇叙に功績あった故をもって柳沢吉保に加増二万石

という江戸幕府の発表である。

「あの桂昌院に従一位でござるか」

（あの卑賤の出の……）という、出かかった言葉を呑み込んで、内蔵助は、眉を顰めた。

「さよう、色々事情もあってな。まあ、天朝さまは、またまた官位を幕府に強奪されたようなものじゃな。大きな声では言えぬが、今は、関白さま以下公家衆すべてが宮中で喪中のようにひっそりして声もないわ」

「と言われると、幕府側で、強奪に暗躍したのが柳沢というわけですな」

「さよう。それで、この二つがつながる」

「となると、吉良邸での内匠頭さまと吉良の言い争いも、これに絡んだことでは？」

「さて、その辺は、なんとも言えぬな」

筑後守は言葉を濁したが、その匂いがぷんぷんしていた。

内匠頭が幕府の横暴に口出しして、その先鋒を務めた吉良にたしなめられた。そこから言い争いになった――、とすれば、確証はないが話は通じる。そうだったのか！と思った。

筑後守は、話をそらした。

「それにしても、二万石の加増とは、なんと豪儀なものではないか！　今上さま（天皇）の禄高全部が、柳沢の加増分に過ぎぬぞ。〈石が浮いて葉が沈む世の中〉とはい

え、これでは、あまりにも天子さまがお気の毒ではないか、そして我々も……、な、解ってくれるか、我等が悔しさを」

「お察し申し上げます」

内蔵助は、ようやくたどり着いた真相に感慨を覚えた。

「そなたとやけ酒でも飲みたい気持ちだが、関白さまが、毎日のように朝議でお出かけで、留守を預かる身共も出歩けぬ。今日のところは、これでご無礼する」

いかにも残念という筑後守の顔。

内蔵助は、ほっとして答えた。

「いや、拙者も江戸からの来客で多忙でござれば、これにて失礼したい。お知らせいただいた事、肝に銘じまする」

「では、大石殿も撞木町には無沙汰かの……」

「残念ながら、そちらの方は、とんと」

「拙者もじゃ。そのため、まだ紅梅には〈うら〉を返しておらぬ。気になってしかたがないが」

にやりと笑って、ちゃっかり遊びの催促のようだ。

「よろしい。お任せください。お近いうちに」

内蔵助は、苦笑いして進藤の屋敷を辞した。
だが、心の内は、
（これでなにもかも解った。いよいよ、吉良邸討入りの準備じゃ）
と、晴れ晴れした気持ちになっていた。

自邸に戻ると、内蔵助は、斎戒沐浴（さいかいもくよく）して身を引き締め、厳（おごそ）かに主税に宣言した。
「父は、以後、しばらく書斎にこもるゆえ、そなたと次郎左衛門以外の一切の目通りを許さぬ。そなたらとも衣食の世話以外の事、私語無用」
言い終わると、静かに机に向かった。
この、ふつふつとわき上がる心の高揚はなんなのだろうか。女を抱くなどの比ではない。
ひょっとすると、生まれて初めての感慨かもしれない。
（俺も案外な仕事人間かな――）
内蔵助は一人微笑した。
やがて、考えた末、筆を執ると、

【吉良邸討入り策覚え】
元禄十五年壬午
弥生十五日起稿

と、一気に大書した。

この後、内蔵助は、三月一杯を討入り構想に専念した。実際、誰とも会った形跡がない。一方、在坂、在京の同志のあいだでは、不満は鬱積していたと思われる。しかし、その鬱憤をぶつけられた江戸の堀部安兵衛はどうだったか。

表だって直接同志を宥めることまではしなかったが、不満たらたらの大高源五発の書翰に「備忘の為」と記して次のような感慨だけを書き挟んで残している。

日付まではわからないが、二月の記録である。

大石内蔵助始め、上方の方々は、残らず内蔵助と、とことん話し合った上のことだから、（大石殿に）今更なにを申し上げても同意されることはあるまい。

それなら、ということで、心を一つにした六、七人ばかりで（吉良）屋敷に踏み

込んだとしても、本望の達成は難しいだろう。

我々の（世間体ばかりを考えた）見栄（みえ）だけの行動では、かえって心外な結果になりかねないと思う。

最後まで、我々は決心を捨てるのではないのだから（ここは）待ちにくい所を待ち、（たとえ）恥多くとも、時節を待つのも勇気である。

この考えを趣旨として、やむを得ず（時節を）待つべしと、（奥田）兵左衛門と安兵衛は話し合った。渡世の儀を心掛けて申し語る（に留めた）。

なぜ、これだけはっきり急進派と一線を画した考えを持っていたのに、原、大高らを説得し、内蔵助を助ける態度に出なかったのか。

これは、兵左衛門、安兵衛とも浅野家では、禄高こそ高いが、新参者に過ぎなかったことを考えれば納得できるだろう。

昭和の軍隊でも、「星の数より飯の数」と言われたものである。まして三百年以上前の封建時代のことである。言い出せなかったのだ。

末尾の「渡世の儀を心掛けて」という言葉に、その含みを読む必要があろう。

（下巻へ続く）

この作品は平成二十年十月新潮社より刊行され、文庫化にあたり、加筆修正をし、上・中・下、三冊に分冊した。

加藤廣著

空白の桶狭間

桶狭間の戦いはなかった。裏で取り交わされたある密約と若き日の秀吉の暗躍。埋もれた真実をあぶりだす、驚天動地の歴史ミステリ。

芥川龍之介著

羅生門・鼻

王朝の説話物語にあらわれる人間の心理に、近代的解釈を試みることによって己れのテーマを生かそうとした〝王朝もの〟第一集。

芥川龍之介著

地獄変・偸盗（ちゅうとう）

地獄変の屏風を描くため一人娘を火にかけて芸術の犠牲にし、自らは縊死する異常な天才絵師の物語「地獄変」など〝王朝もの〟第二集。

芥川龍之介著

蜘蛛（くも）の糸・杜子春（としし ゅん）

地獄におちた男がやっとつかんだ一条の救いの糸をエゴイズムのために失ってしまう「蜘蛛の糸」、平凡な幸福を讃えた「杜子春」等10編。

芥川龍之介著

奉教人の死

殉教者の心情や、東西の異質な文化の接触と融和に関心を抱いた著者が、近代日本文学に新しい分野を開拓した〝切支丹もの〟の作品集。

芥川龍之介著

戯作三昧・一塊（いっかい）の土

江戸末期に、市井にあって芸術至上主義を貫いた滝沢馬琴に、自己の思想や問題を託した「戯作三昧」他に「枯野抄」等全13編を収録。

諸田玲子著

誰そ彼れ心中

仕掛けられた罠、思いもかけない恋の道行き。謎が謎を呼ぶサスペンスフルな展開、万感胸に迫る新感覚時代ミステリー。文庫初登場！

諸田玲子著

お鳥見女房

幕府の密偵お鳥見役の留守宅を切り盛りする女房・珠世。そのやわらかな笑顔と大家族の情愛にこころ安らぐ、人気シリーズ第一作。

諸田玲子著

蛍の行方　お鳥見女房

お鳥見一家の哀歓を四季の移ろいとともに描く連作短編。珠世の情愛と機転に、心がじんわり熱くなる清爽人情話、シリーズ第二弾。

諸田玲子著

鷹姫さま　お鳥見女房

嫡男久太郎と鷹好きのわがまま娘との縁談、次女君江の恋。見守る珠世の情愛と才智に心がじんわり温まる、シリーズ文庫化第三弾。

諸田玲子著

灼　恋

徳川綱吉の寵愛をうけつつ柳沢吉保に恋い焦がれて三つ巴の関係を生き抜いた染子。志に燃え恋に心解き放つ女と男の元禄歴史絵巻。

諸田玲子著

狐狸の恋　お鳥見女房

久太郎はお鳥見役に任命され縁談も持ち上がる。次男にも想い人が……成長する子らを見守る珠世の笑顔に心和むシリーズ第四弾。

司馬遼太郎著

梟の城

直木賞受賞

信長、秀吉……権力者たちの陰で、凄絶な死闘を展開する二人の忍者の生きざまを通して、かげろうの如き彼らの実像を活写した長編。

司馬遼太郎著

人斬り以蔵

幕末の混乱の中で、劣等感から命ぜられるままに人を斬る男の激情と苦悩を描く表題作ほか変革期に生きた人間像に焦点をあてた7編。

司馬遼太郎著

国盗り物語

（一～四）

貧しい油売りから美濃国主になった斎藤道三、天才的な知略で天下統一を計った織田信長。新時代を拓く先鋒となった英雄たちの生涯。

司馬遼太郎著

燃えよ剣

（上・下）

組織作りの異才によって、新選組を最強の集団へ作りあげてゆく〝バラガキのトシ〟――剣に生き剣に死んだ新選組副長土方歳三の生涯。

司馬遼太郎著

新史太閤記

（上・下）

日本史上、最もたくみに人の心を捉えた〝人蕩し〟の天才、豊臣秀吉の生涯を、冷徹な史眼と新鮮な感覚で描く最も現代的な太閤記。

司馬遼太郎著

関ケ原

（上・中・下）

古今最大の戦闘となった天下分け目の決戦の過程を描いて、家康・三成の権謀の渦中で命運を賭した戦国諸雄の人間像を浮彫りにする。

松本清張著

小説日本芸譚

千利休、運慶、光悦――。日本美術史に燦然と輝く芸術家十人が煩悩に翻弄される姿――人間の業の深さを描く異色の歴史短編集。

松本清張著

或る「小倉日記」伝

芥川賞受賞　傑作短編集(一)

体が不自由で孤独な青年が小倉在住時代の鷗外を追究する姿を描いて、芥川賞に輝いた表題作など、名もない庶民を主人公にした12編。

松本清張著

黒地の絵

傑作短編集(二)

朝鮮戦争のさなか、米軍黒人兵の集団脱走事件が起きた基地小倉を舞台に、妻を犯された男のすさまじい復讐を描く表題作など9編。

松本清張著

西郷札

傑作短編集(三)

西南戦争の際に、薩軍が発行した軍票をもとに一攫千金を夢みる男の破滅を描く処女作の「西郷札」など、異色時代小説12編を収める。

松本清張著

佐渡流人行

傑作短編集(四)

逃れるすべのない絶海の孤島佐渡を描く「佐渡流人行」「下級役人の哀しい運命を辿る「甲府在番」など、歴史に材を取った力作11編。

松本清張著

張込み

傑作短編集(五)

平凡な主婦の秘められた過去を、殺人犯を張込み中の刑事の眼でとらえて、推理小説界に新風を吹きこんだ表題作など8編を収める。

宮城谷昌光著

晏子（一～四）

大小多数の国が乱立した中国春秋期。卓越した智謀と比類なき徳望で斉の存亡の危機を救った晏子父子の波瀾の生涯を描く歴史雄編。

宮城谷昌光著

玉人

女あり、玉のごとし――運命的な出会いをした男と女の烈しい恋の喜びと別離の嘆きを幻想的に描く表題作など、中国古代恋物語六篇。

宮城谷昌光著

史記の風景

中国歴史小説屈指の名手が、『史記』に溢れる人間の英知を探り、高名な成句、熟語のルーツをたどりながら、斬新な解釈を提示する。

宮城谷昌光著

楽毅（一～四）

策謀渦巻く古代中国の戦国時代。名将・楽毅の生涯を通して「人がみごとに生きるとはどういうことか」を描いた傑作巨編！

宮城谷昌光著

香乱記（一～四）

殺戮と虐殺の項羽、裏切りと豹変の劉邦。秦の始皇帝没後の惑乱の中で、一人信義を貫いた英傑田横の生涯を描く著者会心の歴史雄編。

宮城谷昌光著

古城の風景Ⅰ

―菅沼の城　奥平の城　松平の城―

名将菅沼、猛将奥平、そして剽悍無比の松平。各氏ゆかりの古城を巡り、往時の武将たちの宿運と哀歓に思いを馳せる歴史紀行エッセイ。

山本周五郎著

青べか物語

うらぶれた漁師町浦粕に住みついた〝私〟の眼を通して、独特の狡猾さ、愉快さ、質朴さをもつ住人たちの生活ぶりを巧みな筆で捉える。

山本周五郎著

柳橋物語・むかしも今も

幼い一途な恋を信じたおせんを襲う悲しい運命の「柳橋物語」。愚直なる男が愚直を貫き通したがゆえに幸福をつかむ「むかしも今も」。

山本周五郎著

五瓣の椿

自分が不義の子と知ったおしのは、淫蕩な母と相手の男たちを次々と殺す。息絶えた五人の男たちのそばには赤い椿の花びらが……。

山本周五郎著

赤ひげ診療譚

小石川養生所の〝赤ひげ〟と呼ばれる医師と、見習い医師との魂のふれ合いを中心に、貧しさと病苦の中でも逞しい江戸庶民の姿を描く。

山本周五郎著

大炊介始末（おおいのすけ）

自分の出生の秘密を知った大炊介が、狂態を装って父に憎まれようとする姿を描く「大炊介始末」のほか、「よじょう」等、全10編を収録。

小説日本婦道記

厳しい武家の定めの中で、夫や子のために生き抜いた日本の女たち——その強靱さ、凛とした美しさや哀しみが溢れる感動的な作品集。

宮尾登美子著

もう一つの出会い

初めての結婚、百円玉一つ握りしめての家出、離婚、そして再婚。様々な人々との出会いと折々の想いを書きつづった珠玉のエッセイ集。

宮尾登美子著

櫂（かい）

太宰治賞受賞

渡世人あがりの剛直義侠の男・岩伍に嫁いだ喜和の、愛憎と忍従と秘めた情念。戦前高知の色街を背景に自らの生家を描く自伝的長編。

宮尾登美子著

春燈

土佐の高知で芸妓娼妓紹介業を営む家に生まれ、複雑な家庭事情のもと、多感な少女期を送る綾子。名作『櫂』に続く渾身の自伝小説。

宮尾登美子著

菊亭八百善の人びと

戦後まもなく江戸料理の老舗に嫁いだ汀子。店の再興を賭けて、消えゆく江戸の味を守ろうと奮闘する下町育ちの女性の心意気を描く。

宮尾登美子著

朱夏

まだ日本はあるのか……？　満州で迎えた敗戦。その苛酷無比の体験を熟成の筆で再現し、『櫂』『春燈』と連山をなす宮尾文学の最高峰。

宮尾登美子著

きのね（上・下）

夢み、涙し、耐え、祈る……。梨園の御曹司に仕える身となった娘の、献身と忍従。健気に、そして烈しく生きた、或る女の昭和史。

平岩弓枝著

日本のおんな

愛を求め、自由を求め、安らぎを求め、それぞれの幸せを手探りしながら、健気に現代を生きてゆく爽やかな七人の女たちの愛の物語。

平岩弓枝著

ふたりで探偵

海外旅行は危険がいっぱい！　不倫、嫁姑の確執、そして殺人事件……。絶妙のコンビが推理する、ツアー参加者の秘められた思惑。

平岩弓枝著

花影の花

―大石内蔵助の妻―

「忠臣蔵」後、秘められたもう一つの人間ドラマがあった。大石未亡人りくの密やかな生涯が蘇って光彩を放つ。吉川英治文学賞受賞作。

平岩弓枝著

幸福の船

世界一周クルーズの乗客の顔ぶれは実に多彩。だが、誰もが悩みや問題を抱えていた。船内の人間模様をミステリータッチで描いた快作。

平岩弓枝著

平安妖異伝

あらゆる楽器に通じ、異国の血を引く少年楽士・秦真比呂が、若き日の藤原道長と平安京を騒がせる物の怪たちに挑む！　怪しの十編。

平岩弓枝著

魚の棲む城

世界に目を向け、崩壊必至の幕府財政再建を志して政敵松平定信と死闘を続ける、田沼意次のりりしい姿を描く。清々しい歴史小説。

武者小路実篤著

友情

あつい友情で結ばれていた脚本家野島と新進作家大宮は、同時に一人の女を愛してしまった——青春期の友情と恋愛の相剋を描く名作。

武者小路実篤著

愛と死

小説家村岡が洋行を終えて無事に帰国の途についたとき、許嫁夏子の急死の報が届いた。至純で崇高な愛の感情を謳う不朽の恋愛小説。

武者小路実篤著

真理先生

社会では成功しそうにもないが人生を肯定して無心に生きる、真理先生、馬鹿一、白雲、泰山などの自由精神に貫かれた生き方を描く。

亀井勝一郎編

武者小路実篤詩集

平明な言葉、素朴な響きのうちに深い人生の知恵がこめられ、〝無心〟へのあこがれを東洋風のおおらかな表現で謳い上げた代表詩117編。

武者小路実篤著

人生論・愛について

人生を真正面から肯定し、平明簡潔な文章で人間の善意と美しさを表明しつづけてきた著者の代表的評論・随筆を精選して収録する。

武者小路実篤著

お目出たき人

口をきいたことすらない美少女への熱愛。その片恋の破局までを、豊かな「失恋能力」の持主、武者小路実篤が底ぬけの率直さで描く。

川端康成著

雪国

ノーベル文学賞受賞

雪に埋もれた温泉町で、芸者駒子と出会った島村――ひとりの男の透徹した意識に映し出される女の美しさを、抒情豊かに描く名作。

川端康成著

伊豆の踊子

伊豆の旅に出た旧制高校生の私は、途中で会った旅芸人一座の清純な踊子に孤独な心を温かく解きほぐされる――表題作等4編。

川端康成著

愛する人達

円熟期の著者が、人生に対する限りない愛情をもって筆をとった名作集。秘かに愛を育てる娘ごころを描く「母の初恋」など9編を収録。

川端康成著

掌の小説

優れた抒情性と鋭く研ぎすまされた感覚で、独自な作風を形成した著者が、四十余年にわたって書き続けた「掌の小説」122編を収録。

川端康成著

舞姫

敗戦後、経済状態の逼迫に従って、徐々に崩壊していく〝家〟を背景に、愛情ではなく嫌悪で結ばれている舞踊家一家の悲劇をえぐる。

川端康成著

山の音

野間文芸賞受賞

得体の知れない山の音を、死の予告のように怖れる老人を通して、日本の家がもつ重苦しさや悲しさ、家に住む人間の心の襞を捉える。

遠藤周作著

白い人・黄色い人

芥川賞受賞

ナチ拷問に焦点をあて、存在の根源に神を求める意志の必然性を探る「白い人」、神をもたない日本人の精神的悲惨を追う「黄色い人」。

遠藤周作著

海と毒薬

毎日出版文化賞・新潮社文学賞受賞

何が彼らをこのような残虐行為に駆りたてたのか？　終戦時の大学病院の生体解剖事件を小説化し、日本人の罪悪感を追求した問題作。

遠藤周作著

留学

時代を異にして留学した三人の学生が、ヨーロッパ文明の壁に挑みながらも精神的風土の絶対的相違によって挫折してゆく姿を描く。

遠藤周作著

母なるもの

やさしく許す〝母なるもの〟を宗教の中に求める日本人の精神の志向と、作者自身の母性への憧憬とを重ねあわせてつづった作品集。

遠藤周作著

彼の生きかた

吃るため人とうまく接することが出来ず、人間よりも動物を愛し、日本猿の餌づけに一身を捧げる男の純朴でひたむきな生き方を描く。

遠藤周作著

砂の城

過激派集団に入った西も、詐欺漢に身を捧げたトシも真実を求めて生きようとしたのだ。ひたむきに生きた若者たちの青春群像を描く。

ヘッセ
高橋健二訳

春の嵐

暴走した橇と共に、少年時代の淡い恋と健康な左足とを失った時、クーンの志は音楽に向った……。幸福の意義を求める孤独な魂の歌。

ヘッセ
高橋健二訳

デミアン

主人公シンクレールが、友人デミアンや、孤独な神秘主義者の音楽家の影響を受けて、真の自己を見出していく過程を描いた代表作。

ヘッセ
高橋健二訳

車輪の下

子供の心を押しつぶす教育の車輪から逃れようとして、人生の苦難の渦に巻きこまれていくハンスに、著者の体験をこめた自伝的小説。

ヘッセ
高橋健二訳

青春は美わし

二十世紀最大の文学者といわれるヘッセの、青春時代の魂の記録。孤独な漂泊者の郷愁が美しい自然との交流の中に浮びあがる名作。

ヘッセ
高橋健二訳

クヌルプ

漂泊の旅を重ねながら自然と人生の美しさを見出して、人々に明るさを与えるクヌルプ。その姿に永遠に流浪する芸術家の魂を写し出す。

ヘッセ
高橋健二訳

郷愁

都会での多くの経験の後で、自然の恵み深い故郷の小さな町こそ安住の地と悟った少年に、作者の自画像を投影させたヘッセの処女作。

新潮文庫最新刊

畠中恵著

こころころろ

大変だ、若だんなが今度は失明だって!? 手がかりはどうやらある神様が握っているらしい。長崎屋を次々と災難が襲う急展開の第八弾。

佐々木譲著

暴雪圏

会社員、殺人犯、不倫主婦、ジゴロ、家出少女。猛威を振るう暴風雪が人々の運命を変えた。川久保篤巡査部長、ふたたび登場。

沼田まほかる著

アミダサマ

冥界に旅立つ者をこの世に引き留める少女、ミハル。この幼子が周囲の人間を狂わせる。ホラーサスペンス大賞受賞作家が放つ傑作。

加藤廣著

謎手本忠臣蔵（上・中・下）

なぜその朝、勅使の登城は早められたのか？朝廷との確執、失われた密書の存在――。国民文学の論争に終止符をうつ、忠臣蔵決定版。

井上荒野著

雉猫心中

雉猫に導かれるようにして男女は出会った。飢えたように互いを貪り、官能の虜となった二人の行き着く先は？ 破滅的な恋愛長編。

阿川佐和子・井上荒野
大島真寿美・島本理生
乃南アサ・村山由佳 著
森絵都

最後の恋 プレミアム
―つまり、自分史上最高の恋。―

これで、最後。そう切に願っても、恋の行く末は選べない。7人の作家が「最高の恋」の終わりとその先を描く、極上のアンソロジー。

新潮文庫最新刊

谷川俊太郎著

トロムソコラージュ
鮎川信夫賞受賞

ノルウェーのトロムソで即興的に書かれた表題作、あの世への旅のユーモラスなルポ「臨死船」など、時空を超える長編物語詩6編。

安東みきえ著

頭のうちどころが悪かった熊の話

動物たちの世間話に生き物世界の不条理を知る。ユーモラスでスパイシーな寓話集。イラスト14点も収録。ベストセラー、待望の文庫化。

湯川　豊著

須賀敦子を読む
読売文学賞受賞

イタリアを愛し、書物を愛し、人を愛し、惜しまれて逝った作家・須賀敦子。主著を精読し、その人生と魂の足跡に迫る本格的評伝。

平松洋子著

夜中にジャムを煮る

つくること食べることの幸福が満ちる場所。それが台所。笑顔あふれる台所から、食材と道具への尽きぬ愛情をつづったエッセイ集。

池谷裕二著

受験脳の作り方
―脳科学で考える効率的学習法―

脳は、記憶を忘れるようにできている。そのしくみを正しく理解して、受験に克とう！――気鋭の脳研究者が考える、最強学習法。

黒川伊保子著

運がいいと言われる人の脳科学

幸運を手にした人は、自らの役割を「責務」ではなく「好きだから」と答える――脳と感性の研究者が説く、運がいい人生の極意。

新潮文庫最新刊

渡辺康幸著

復活から常勝へ
―早稲田大学駅伝チームの〈自ら育つ力〉―

伝統校が「箱根」で2年連続シード落ち――青年監督は、いかにして低迷を脱し、強いワセダを取り戻したのか。再生と成長の物語。

星野道夫著

星野道夫ダイアリー

アラスカの原野を旅し、オーロラの光を追い求め、古老の話に耳を傾けた星野道夫。その写真と文章をちりばめた『書き込み日記帳』。

T・クランシー
G・ブラックウッド
田村源二訳

デッド・オア・アライヴ
(1・2)

極秘部隊により9・11テロの黒幕を追え！軍事謀略小説の最高峰、ジャック・ライアン・シリーズが空前のスケールで堂々の復活。

J・フジーリ
村上春樹訳

ペット・サウンズ

恋愛への憧れと挫折、抑圧的な父親との確執……。ビーチ・ボーイズの最高傑作に隠された、天才ブライアン・ウィルソンの苦悩。

G・D・ロバーツ
田口俊樹訳

シャンタラム
(上・中・下)

重警備刑務所を脱獄し、ボンベイに潜伏した男の数奇な体験。バックパッカーとセレブが崇めた現代の『千夜一夜物語』、遂に邦訳！

P・オースター
柴田元幸訳

幻影の書

妻と子を喪った男の元に届いた死者からの手紙。伝説の映画監督が生きている？　その探索行の果てとは――。著者の新たなる代表作。

謎手本忠臣蔵(中)

新潮文庫　　か－48－4

平成二十三年十二月　一　日　発　行

著　者　加藤廣

発行者　佐藤隆信

発行所　株式会社　新潮社

郵便番号　一六二－八七一一
東京都新宿区矢来町七一
電話　編集部(〇三)三二六六－五四四〇
読者係(〇三)三二六六－五一一一
http://www.shinchosha.co.jp

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・大日本印刷株式会社　製本・加藤製本株式会社
© Hiroshi Katô 2008　Printed in Japan

ISBN978-4-10-133054-9 C0193





定価：本体490円（税別）

刃傷事件の真相を探る大石内蔵助は、内匠頭の正室、瑤泉院から吉良との気になるやり取りを明かされる。折しも着々と進む討入りの準備に、江戸にいる暗殺急進派の堀部安兵衛より横槍が入る。一方、堀田将監を通じて、内蔵助らの動向を把握していた柳沢吉保であったが、その情報から極秘裏に進めていた桂一計画と刃傷事件の関連に気づき——。物語が大きく動き出す、驚天動地の中巻。

ISBN978-4-10-133054-9

C0193 ¥490E